ポケモン不思議のダンジョン 新伝説 闇の司

鏡花水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 新伝説 闇の司

【Nコード】

N5673S

【作者名】

鏡花水月

【あらすじ】

時の歯車事件から1年が経った。探検隊チーム“ブライト”は世界を救った英雄である。だが、彼等が救った世界をまた、闇が包み込もうとしていた。存在してはいけない者となり、自分の命の意味をもう一度考える二人。今、守りたいものの為に何が出来るか。時空を超えて、物語は動き出す。

プロローグ(前書き)

続編の始まりです

プロローグ

暗く闇の息づく地底の底。無限大に広がる悪意が満ち渡っていた。「…………おのれ…………この恨み…………どう晴らしてくれよう…………！！」漆黒の塊は怒りと怨恨をその碧眼に燈し、報復を誓ったのであった。少年と少女に。

少年、シアン＝ロビンソンはリオルの姿をしている。だが彼は本来リオルではない。人間なのだ。とある事故からリオルになってしまっていたのだ。戸惑うところに、少女が申し出をしてきた。彼女の名はハーブ＝フローラ。優しい感性を持ったチコリータである。シアンはハーブの申し出を受けた。

申し出の内容は共に探検隊を組んで歩んでいくこと。決して楽しいことばかりではなかった筈だが、彼はその要求を受け入れた。そして、探検隊として歩み始めた。

シアンは本当は未来からきた者だった。彼が住んでいた未来世界は暗黒の世界で、シアンは暗黒の未来世界を変える為、この過去の世界にやってきた。そして、暗黒の未来世界を無かったものにしようとした。

結果的に彼の試みは成功を修めた。タイムパラドックスにより消える運命にあったとしても、臆せず立ち向かっていった。そして、時を経てハーブの悲しみをディアルガの慈悲により復活することができた。

時の歯車騒動から現在約一年が経過している。トレジャータウンは活気を取り戻し、隣接するプクリンギルドはますます栄えていた。そのプクリンギルドの一室で、シアン＝ロビンソンとハーブ＝フローラは目を覚ました。

01話 卒業試験（前書き）

続編が、本格的に開始致しました！

シアン

「この作者の文章のグダグダさ、何時になったら治るのでしょうか？」

し、失礼な。

01話 卒業試験

「卒業試験……ですか？」

プクリンギルドの早朝。その親方であるプクリンの口から発せられたのは約一年間修行を続けたギルドへの別れだった。

「ヘイ！ 何でオイラ達より後に入門したのにもう卒業なんだよ！ シアンとハーブの先輩であるヘイガニが不満気な声をあげる。

「何を言ってるんだい。世界を救う程の探検隊だぞ。御前達とは実績が違うんだ」

プクリンの一番弟子で、自称情報屋のペラップがその抗議をあっさり切り捨てる。

「本来ならもつと早くに卒業させても良かったんだけど、なかなかその機会がなかったからな」

「でもそれは、卒業試験に合格すればの話ですよね」

冷静な態度で返すのはシアン。青い体に黒い目の縁。典型的なりオルの姿をしている。首に巻いたマリンプルのリボンが彼のクールさや智的な部分を際立たせている。

「何をすればいいの？」

高い声の主はハーブ。若草色の体に頭についた葉っぱ。大きなくりくりした赤い瞳を不安げに揺らしている彼女の種族はチコリータである。普通のチコリータより小柄で少し幼く見えるところが彼女の持つ優しさを表しているかのようだ。

「そうだ。明日、卒業試験を受けてもらう。だからブライトの二人は明日に向け準備をしておくんだ。試験の内容は、神秘の森の奥地の、光の湖に隠されたお宝をとってやることだ」

「光の湖？」

ハーブはその名前に何と無く聞き覚えがあった。彼女はその場所に行ったことがあるのだが、覚えていないようだ。

「そうだ。それに成功すれば御前達は晴れて卒業の身だ」

「でも、気をつけてね。光の泉には悪の大魔王が住んでいる、という噂があるんだ」

「ええっ!?!」

ハーブは素っ頓狂な声をあげた。

「……ドゴームさん、確か何年か前に卒業試験を受けた、と仰っていましたね」

シアンは冷静なまま、ギルドの弟子の一人、ドゴームに話しを振る。だがドゴームは

「あ？ ああ。だが卒業試験の内容はばらしちゃいけない、というのがギルドの仕来たりなんだ」

そう言って黙ってしまった。

「そうですね……」

「それでは、チーム：ブライトの二人は明日の試験の為にトレジャータウンで入念な準備をしておくこと。他の皆は仕事にかかるよ」

「おおーっ!」

こうして、いつもの鬨の声と共に今日という日が始まった。

トレジャータウンはプクリンギルドから徒歩で約一分のところにある街だ。

時の歯車騒動以降、世界を救った探検隊がいる街として盛んになり、景気も上昇してきている。

「……悪の大魔王って何なのかしら……」

ハーブがカクレオンの店で購入した復活の種をトレジャーバッグに入れながら呟く。

「恐れることは無いだろう。僕達は神とも呼ばれたポケモンを倒したんだ」

シアンが楽観的な言葉で返す。

「でもその私達でも勝ったことのない相手がいるじゃない」

「親方様のことか？ そもそも勝負すらしたことがないから、どち

らが強いかなんて分からないだろう。それに、もう一度言う。僕達はディアルガを倒した英雄なんだ。今更そんなお伽話程度でビクビクしてどうする」

今日の彼はやけに強気である。卒業試験を受けるといふ喜びがそうさせるのだろう。シアンは冷静な面持ちで、ハープは心配そうな面持ちで、トレジャータウンの片隅の『パッチールのカフェ』に入っていた。

「卒業試験を受けるんですか？」

そう尋ねたのはチップ・ジュリアス。パッチールのカフェの常連のパチリスである。一時期、ブライトの一員として活躍していた。今は脱退しているが、最近是一緒に探検に行くなど、また加入の兆候を見せている。

「頑張つてね」

そう言ったのはレイナ・コンスタンス。ツンとした雰囲気の特徴のイーブイである。彼女もまた、シアンと同じく記憶がなく、人間からポケモンとなった者だった。その正体は未来世界から星の停止を変える為にやってきた少女である。シアンがタイム・パラドックスで消滅した際に彼女も消滅した筈のだが、シアンがこの世に戻ってきた日にまた彼女も戻ってきている。現在PPO捜査課の課長を務めている。

「有難う。ところで、悪の大魔王つて知ってるかな？」

「ん〜何でえ。その面白そうな奴はよお」

シアンが訊ねた時、隣のテーブルから軽薄な口調が響いた。ローブを被った大柄な体躯。ゼアン・ロビンソンである。その正体は人間で、シアンの祖先である。人間は本来この大陸の北のはずれに住んでいて、ポケモンとの交流は一切ない筈だが、彼は何故かここにいる。本人は特別な方法を使って来たらしい。

「えつとね……」

ハーブは卒業試験の全様について説明した。

「それで、光の泉の宝をとって来ないと行けないんだけど……そこには悪の大魔王が住んでいるらしいのよ」

そう説明するハーブは表情が強張っており、ビビっているのが丸分かりである。

「ふーん。そりやてーへんだな。ま、なんとかなんじゃねーの？」

ゼアンはそう言って空っぽのグラスを店主のパッチールのところへ持って行った。最初の方こそ彼の奇怪な容貌にビビりまくっていたパッチールだが、今はもう慣れたらしい。笑顔のまま彼に渡されたグラスをかたづけている。因みにゼアンの正体を知っているのはシアン、ハーブ、チップ、レイナ、さらにトレジャータウンの一部の住民位である。

「もうこんな時間か。僕は帰るよ」

シアンはそう言って立ち上がった。ハーブもそれに釣られて帰る用意を始める。

「試験、頑張ってください」

「受かりなさいよ」

「有難う」

シアンは軽く微笑んだ。チップは会釈をし、レイナは顔をほのかに赤くしてそっぽを向く。

「あれ？」

パッチールのカフェの出口はギルド前の十字路にある。そこは水飲み場もあり、ブクリンギルドも側にある為に意外と人通りも多かつたりするのだが……

「み、皆どうしたの？」

カフェを出たシアンとハーブが見たのは、ギルドメンバー全員だった。

「あ、ああ。いや、ちょっとな。ハハ……」

ペラップが気まずそうに言葉を濁す。

「さ、さあ皆帰るさ」

そう言っただけでさくさくとギルドの中に入っていった。

「きよ、今日も頑張りましたわ」

「早く晩御飯を食べたいでゲス」

他の皆も挙動不審なまま立ち去っていった。

「……………そういうことか」

シアンが苦笑い気味に呟く

「え？ な、何？ なんなの？」

「いや、今の態度を見ていたらアレしかないだろう」

「あ、アレって何よアレって」

ハーブはシアンの言葉の意味が分からず、おろおろするばかりであつた。

翌日。ペラップは出発前のシアン達にあるものを渡した。

「……………これは何なの？」

ハーブは不思議そうな顔で見つめた。直径一センチの小さなバツジである。

「受験票だ。それを他人が見て一番目立つ場所につけておいてくれ」

「は、はあ……………」

言われるがままに、シアンは自分の胸元、ハーブは首の蕾と蕾の間につけた。

「それでは二人共、頑張っておいで」

『はい！』

チーム：ブライトの二人は勇ましくギルドを出た。それを先回りしようとしてきた影があることに気付いていない。

01話 卒業試験（後書き）

シアン

「大魔王の正体ばらし過ぎでしょう」

いや……まあシアンなら気付かないとおかしいからね……

ハーブ

「シアンってなんでそんなに頭良いのよ」泣

02話 神秘の森（前書き）

後半 g d g d g d です

シアン

「つつか更新遅い」

へい、すみません。このところ他小説に時間を割いてるんで（汗）

シアン

「何故今更」

いや、前作の終わりの頃とか他小説をほっというてそればかり手をつけてたからさあ w w w

シアン

「ほっとかなくても良いんですよ。こんな駄作」

酷いな（涙）

02話 神秘の森

「あれ、ヒメグマにリングマ。どうしたの？」

彼等がギルドを出ると、すぐ一組のペアと出くわした。ヒメグマとリングマ。共にこのトレジャータウンの住人である。

「今から光の泉に行くのよ」

「ええっ!？」

そのヒメグマの答にハーブは心底驚いた。それに対してシアンは眉一つ動かさない。悪の大魔王の正体を御存知な為だ。

「そ、そんなところに行つて大丈夫なの!？　そこは悪の大魔王がいるのよ!？」

「?　悪の大魔王?　なんだそのメルヘンチックな奴は」

リングマが不思議なものを見るような目で首をかしげる。

ハーブは

「え……嘘、でもプクリンは悪の大魔王……」

視線を泳がせて焦っている。シアンはフツと鼻で笑い、リングマ達に問いかけた。

「二人とも、光の泉には行つたことがあるんですか？」

「あ?　ああ。結構行つたな」

リングマは慣れている為かシアンの大きな態度は気にしない。

「とにかく、私達はそんな物騒なのは見たことないわ。何かの間違いないじゃないかしら」

「そうだな。じゃ、早く行くぞ」

ヒメグマ達はそう言うつと神秘の森の方角へ歩き出した。

「……どういうことかしら」

「さあね。真相は光の泉に辿りついてからの楽しみだろっ」

シアンはそこで腰を下ろすとトレジャーバッグの中身を確認する。

「オレンの実が四つ、穴抜けの珠を一つ……うん、準備は万端だな」

シアンはリングマが完全に見えなくなったのを確認して立ち上が

った。理由は簡単。折角の卒業試験なのだから他人の手など借りたくは無い。それに彼等を巻き込むわけにはいかないからだ。

「シアン、準備は出来た？」

隣を見ると今まで引き攣った表情のハーブが、彼を見て自信満々の笑みを浮かべている。

変わったな……

他人見よがしでもそう思う。彼女は僅か一年前まで敵ポケモンに異常なまでの恐怖を抱いていたのだ。

「準備は万端さ。行こう。僕達の正念場に」

反対に、シアンはキリツと顔を引き締めた。

この世界には鉄道という概念がある。それは人間の世界と同じようなものだ。切符を買い、到着した車両に乗り込む。そして車両は線路伝いに走りだす

乗車から数十分後。シアンとハーブは神秘の森の入り口に立っていた。

「シアン……いよいよだね」

「ああ。この試験をパスすれば僕達はもうギルドの規則や習わしに縛られることもない。頑張ろう」

神をも倒した彼等は悪の大魔王など恐れない。ギルドの卒業は確信していた。卒業など高い絶壁にも等しいと恐れられるブクリンギルド。その卒業を。

「ドダアー！」

「……つつあ……」

やはり卒業試験場には選ばれるとあってか、ダンジョンのポケモンのレベルも並ではなかった。二人はドダイトスの放った地震をジャンプすることでかわすと、ハーブはソーラービームを放つ為、頭の

葉っぱに光を吸収し始めた。そこまでのタイムラグを埋めるためにシアンはハーブとドダイトスの間に立ちふさがり、黒いオーラを纏った銀の針、ダークネビュラ暗黒星雲で正確にドダイトスの葉っぱカッターを弾いていく。

「シアン、良いわよ！」

ハーブの合図と共にシアンは跳び退る。一瞬の後には極太の光の束が彼女の葉から放たれていた。それはドダイトスに突き刺さり、彼を5m程後へ押しやる。

「グ……ウ、オオオオオオオ！」

だが、ドダイトスは止まらなかった。それどころか怒り狂って咆哮をあげる。更にベイリーフが襲いかかってきた。

「ちっ……」

シアンはドダイトスの攻撃を反射的にかわし、ベイリーフに毒突きを喰らわせた。ベイリーフはなんとか持ちこたえたが、毒状態に陥っていたのだろう。すぐに倒れてしまった。シアンは毒突きを喰らわせた後、何も考えずにドダイトスとの戦闘に戻っていた。

「はっけい！」

彼はドダイトスの背中に登り、頭にはっけいを打ちこんだ。

「グオ!?!」

ドダイトスがよろめく。さっきのベイリーフが襲って来たのは幸いだった。ベイリーフが来なかったら恐らくこのような不意打ち行動は出来なかったであろう。ドダイトスのはっけいの影響で麻痺状態に陥っている。

「マジカルリーフッ！」

ハーブが虹色の葉っぱで止めを刺す。

「だいぶ奥まで来たよな……」

三十分後。彼等は口ゼリアを倒し、光の泉まであと一步のところ
にいた。

「あ、あれは！」

突然、ハーブが明るい声を出し、駆けだす。

「ちよっ、ハー……」

シアンは止めようとして、彼女が見ているのが何なのか気付いた。大きい影と小さなシルエット。リングマとヒメグマである。

「ヒメグマ！ リングマ！」

その声に二人は振り向いた。

「あら、貴方達。悪の大魔王は見つかった？」

「いや、何もいなかったよ……」

「そうだろ？ 何かのガセ情報だつて」

ハーブの言葉をリングマは笑い飛ばす。

「じゃあ、私達この奥に用があるから」

彼等はその言葉を残して進んでいった。

「シアン！ 私達も行こう！」

「ああ……」

シアンは釈然としないまま頷いた。

「……感じるな」

「え？」

「いや、何でもないよ」

ハーブが見咎めたのをシアンは適当に誤魔化した。本当に何でも無いこともなく、見張られているという感覚を大いに感じていたのだが、そこはスルーした。どうせ自称：悪の大魔王の手下だろう。

「さ、行こう」

「うん」

チーム：ブライトの二人はリングマ達の後を追いかけていった。卒業という、大きな関門に向かって。独立した一流の探検隊となる為。

その夢の塊が、フツと姿を消した。

より正確に言えば、落とし穴に落ちた。

02話 神秘の森（後書き）

シアン

「終わり方が中途半端すぎますよ」

ツッコミイクナイ 文字数的に作者の限界がきたからあそこで切ったのだ。

シアン

「いやいや、今回2000字程度しかいってないでしょう!?!」

03話 卒業試験開始(前書き)

えー、後半グツダグダです。

シアン

「……それ、いつもでしょう」

いや、今回はいつも以上にグダグダなんだよ

シアン

「……まだ堕ちる余地があったのか……」

03話 卒業試験開始

「きゃあああつ!?!」

ハーブが金切り声をあげる。シアンは声を失っていた。

まさか、こう来るとは
!!!

ここで罾があるとは想定していなかった。彼等はてっきり光の泉で待ち伏せていると思っていたのだ。完全に、彼の失策であった。ハーブは何が起こっているか分からなかった。ただ頭の中で色々なことが渦巻き、思考がカオス状態になっていた。

「あつ!」

「痛ててて……」

受け身を取りながら地面に落ちる。しかし慣れていないことをしたのか、あまりうまく結果とは言えなかった。二人共痛む場所をさすりながら起き上る。周りは暗く、頭上の穴からかるうじて光が見えているが、周囲は全く見えない。

「くそ……落とし穴か……」

大量の葉っぱと枝でうまくカモフラージュしていたのだ。それ故に気付かなかったが、完全にしてやられた。

「あ、穴が塞がれていくわ!」

ゴゴゴゴゴ、と音が響き穴の中が真っ暗になる。

「ちよ……」

真っ暗だ。すぐ隣にいるパートナーすらいないのではないかと心配になる。

「シアン、大丈夫?」

「あ、ああ。しかし……完全に失策だな……」

彼の口調はいつも通りのものであったが、そこに心細さや悔しさが滲み出ている。

「フッフッフ」

「っ!?!? 誰っ!?!?」

突然響いた不吉な声。シアンはその声に聞き覚えがあるし、それがどんな意図によるものかなんてたかがしれている。だが彼より洞察力に欠ける上にパニック状態に陥っているハーブはその声の主が誰かなんて分からない。

「……遊んでないで、さっさと姿を現したらどうですか」

シアンの口調は、暗闇の中で戦うことに対する恐れと、自分の愚かさに対する苛立ちから低く刺々しくなっている。

「……ボクは悪の大魔王」

「あ……」

ハーブは恐れを抱く。今まで抱いていた絶望への嫌悪が最大まで膨らんでいく。

「そして大魔王の子分九卿だ」

また別の声が聞こえる。シアンは声質から誰であるかを判断した。

「フッフッフ。君達、ここに来たからには生きては帰さないよ」

悪の大魔王が言いかけたその瞬間だった。

ドサツ

シアンが腹に据えかねたのか、一つの不思議珠を取り出して後に放り投げる。

「!?!」

地面に落ちた珠は瞬間、眩い閃光を辺りにばらまく。

「……いつまでも遊んでないで、さっさと白黒つけましょう……親方様」

「え……」

先程シアンが使用したのは光珠。その効果により、穴の中は外と同じように明るく、悪の大魔王も、子分九卿の正体も丸分かりである。

「プ、プクリン!? それにギルドの皆も! これってどういうことなの!」

そう。その正体はプクリン、ペラップ。そしてギルドの先輩達であった。

「う……」

全てを見透かされてしまったペラッブが口ごもる

「……君はいつまでも知能レベルが変わらないんだね……」

シアンは溜息と共に皮肉を言うと、種明かしを始める。

「昨日、貴方達は全員揃ってギルドに帰ってきていた。普段見張り番でギルドにいる必要があるデイグダさんやドゴームさんまで外に出る理由。それは光の泉で準備をする為。更にリングマさんとヒメグマさんは悪の大魔王などいないと仰った。これが何を意味するかは誰でも分かりますよね？」

プクリン以外のギルドメンバーが苦い顔をする。

「こんな暗闇の中でも普通に戦えると思ったのは……これの為ですね」

シアンはそう言って胸元につけていたバッジ もとい

受験票を掲げて見せる。

「これはある種の発光体。暗い場所で光を発する物質です。これを目印にするつもりだったのではないですか？ 親方様」

その場にいる全員の目がプクリンに向く。

「お……親方様ってだあれ？」

その口から出た答はそれだった。

「え……ちよっ」

「ワ、ワタクシも知りませんわ！ キマワリなんて！」

キマワリに似た九卿の一人が否定する。

「……キマワリ、まだ私は何も言っていないよ」

「しょうがないな。ハーブ、準備は良いか」

「じゅ、準備って……」

ハーブが一抔の戦慄を覚える。それは瞬く間に広がり、不安がこみ上げてきた。

「親方様、何があっても試験は続行するのですね……」

急にシアンが目を伏せ、声のトーンを落とす。プクリン以外のギルドメンバーをドキッとさせるほどの妖艶さだった。そして、畏怖

の念を感じさせるオーラだった。

「皆！ 悪の大魔王の名にかけて、侵入者を追い払うよーっ！」
プクリンの叫びと共に卒業試験たたかいが始まった。

開始六秒。最初に倒されたのは当たり前というか当然というか、ビツパだった。ギルド最弱で、しかもシアンが格闘タイプであったからそれは否めないだろう。ノーマルタイプの彼には最強の天敵だった。

「水平斬り！」

そのシアンは水平斬りを使ってキマワリ、グレッグル、ドゴームに斬りつけた。ドゴームとグレッグルには直撃して彼等は目を白黒させていたが、キマワリは咄嗟にガードの体勢をとっていた為にダメージは少なかった。

「マジカルリーフ！」

ハープは虹色の葉でデイグダを倒した。なるべく消耗せずに敵を倒していく。敵に囲まれた時のベターな戦い方だ。

「デイグダ！」

倒れた息子を見たダグトリオが声を張り上げたが、ハープが蔓の鞭を構えていた。

「いくらデイグダが心配でも、今は自分の身を守るべきじゃない？」

「っ！ 地震！」

切羽詰まったダグトリオは地面タイプの大技を繰り出す。

「しまった！」

シアンが叫ぶ。かくいう彼も地震の波に吞まれてしまった。だが

……

「ゲエ！？」

「ヘイ、ダグトリオ！ 何するんだ」

それでダメージを被るのはシアン達だけではない。地震は敵味方関係無く襲うのだ。

「……僕達が倒されないだけでも、マシというべきかな……」

シアンは今回の地震の犠牲者：ドゴームに追悼の念を送りながらキマワリに足払いをかける。転ばされたにも関わらずキヤーと歓喜の声をあげるマゾ向日葵の葉っぱを片方掴むと背負い投げの要領で彼の後方に投げる。そこに居たのは

「グヘッ!?!」

背後からシアンに攻撃を仕掛けようとしたグレッグル。彼はシアンが自分に気付いていないと思っていたが、大間違いであった。シアンはちゃんと背後グレッグルの邪念の存在に気付いていた。

「キヤー……!?!」

「グヘエ!?!? やってくれんじゃねえか。グヘヘヘ」

キマワリとグレッグルが思い切り交差する。グレッグルは意識があるが、キマワリは頭でも打ったのか、ピク、ピクと痙攣している。「気味悪い声を出している場合じゃないですよ」

シアンは冷淡な口調で言うとはっけいをグレッグルの体に飛び込ませた。毒タイプを持っているグレッグルにはその威力は低いが、シアンが重要視しているのは威力ではない。

「グヘエエ!?!? 体が……」

刹那、グレッグルの体に鋭い痛みが走った。はっけいの追加効果の麻痺である。これにより、グレッグルは行動できない。

シアンは水平斬りでグレッグルに斬りつける。

「グヘ……!?!」

ダメージが溜まっていたのだろう。グレッグルは麻痺でガードもとれずにシアンの攻撃を受け、倒れた。今日のシアンは少し容赦がないかもしれない。

「くう……!?!」

ハープはチリーンとダグトリオのコンビネーションに手こずっていた。ダグトリオがハープの苦手タイプの飛行技、燕返しを使用してくるのだ。チリーンの回復技もあって、厳しい戦いとなっている。

「燕返し！」

「蔓の鞭……っ」

ダグトリオの燕返しに対し、ハーブは蔓の鞭を当てて応戦するこ
としか出来ない。燕返しは必中技だ。かわすのはほぼ不可能に近い。
このままじゃ倒されるだけ……っ！

ダグトリオは攻撃力が高い種族だ。放射までに時間のかかるソー
ラービームでは確実に燕返しを喰らってやられてしまうだろう。そ
こまで考えて

「あ」

要はダグトリオが燕返しを使えなくなれば良いのか、と気付いた。
「念力！」

チリーンの念動波をハーブは屈んでかわす。

「こつちにも必中技はあるのよ！ マジカルリーフ！」

ハーブはそう叫ぶと虹色の葉を幾枚も飛ばす。

「きゃあああ！？」

「ぐっっ！？」

マジカルリーフはチリーンとダグトリオを襲う。

「ぐ……お……だ、大地の力！」

ダグトリオが苦しげに叫ぶと地面から木の根が突きでた。それは
幾重にも絡まり、彼等とハーブを阻む壁となる。

「くっ……ちよこまかと五月蠅いわね……」

ハーブが呟いた瞬間、大地の力のダムが決壊した。

「ハイパーボイス！」

「！ エナジーボール！」

チリーンの攻撃にハーブはいささか不意を打たれたようだが、エ
ナジーボールで相殺する。その瞬間違和感も感じた。

ダグトリオがいない！

体全体から冷や汗が吹き出す。それと彼女の腹部に激痛が走るの
はほぼ同じだった。

「穴を掘る」

ハーブの視界から隠れている間、彼等は穴を掘るで不意打ちを狙っていたのだ。

「つ、蔓の鞭！」

「燕返し！」

彼女の渾身の一撃はまたしても弾かれてしまう。

「念力！」

チリーンの放った力は紙一重でハーブにかわされる。

「燕返し！」

「蔓の鞭！」

二つの音がまたぶつかり合う。ハーブもダグトリオも徐々に疲弊していく。

「癒しの鈴」

チリーンの体が光り出す。ハーブはそれを阻止しようとエナジーボールの塊を作った。ダグトリオが完全に無防備のハーブに爪を向ける。

「やらせるか！ 燕返し！」

だがその力は発動しない。

「な……」

「エナジーボール！」

深緑の珠がチリーンとぶつかって小さな爆発を起こす。チリーンは地面に落ちた。

「PPって言われて分からない？ ダグトリオは技を出し過ぎたのよ」

「……！！」

ダグトリオが目を見張る。ポケモン達が使う技にはPP、というものがある。これは技の使用制限回数のことである。先程燕返しを出し過ぎたダグトリオはもうその技を使えないのだ。

「これで終わりよ」

ハーブの頭の葉っぱが淡く光り出した。ソーラービーム。切り札の前兆だ。それを前に、ダグトリオは為す術がない。他の技は相性

の悪い彼女に対しては不意打ち用にしか備えていない。

轟音と共に、光の束が放たれる。勝者は、チコリータの少女だった。

親方様……

シアンは横目でチラリとプクリン
自称悪の大魔王を
見る。プクリンはいつもの笑顔のまま、戦場を眉ひとつ動かさずに
見ている。

ギルドの弟子たちが……いや、九卿が次々に倒されて
いつているというのに手を出さない？ 自分の力はタイムン一対一の時にで
もとっておくとどうつもりか？

シアンは一瞬そちらに思考を向けたが、すぐまた目の前の状況に
引き戻される。体から一瞬、力が抜けた。

何だ、これは
！！

どうやら先程の戦闘でさうとう体力を減らしていたようだ。

「う……ま、負けませんわ……」

先程投げ飛ばしたキマワリが起き上っている。だが頭を打つたら
しく、足元がおぼつかず、顔色も少し青い。シアンは自責の念に囚
われた。彼女を投げたのは自分なのだから。

脳震盪とか起こしてないよなあ……

心配しながらもシアンは拳を構える。キマワリがふらついていて、
技を出すのを躊躇われる。やがて彼女はか細い声で最後の力を出し
た。

「は……花卉の舞」

シアンは言葉を失った。あれだけポロポロになって、まだそんな
大技を出せるのか？ 沈黙の空白に、シアン目の前に危険が迫って
いるのも気付かない。花卉の舞は彼に大きなダメージを与えた。

「ぐあああああああああ……」

体全体に痛みが走る。関節がギシギシと鳴り、立っているのも辛

いかもしれない。でも、

「負けられない……ここで、勝つんだ！」

シアンは立ち上がる。絶対に負けたくない、という意志があるから。勝利に対する、強い執着心で。

「そん、な……で、すわ……」

キマワリは花卉の舞の影響で混乱状態に陥っている。止めを刺すのにはかっこうの状態だった。

「はっけい!!!」

花卉の舞のダメージは思ったほど大きくなかったようで、まだ十分の威力があった。

「……悪の大魔王様、貴方の子分九卿のうち八人は倒してしまいました」

シアンは優しく笑いかけながら悪の大魔王とその側近らしいペラッブに語りかけた。

「……あとは、貴方達を倒せばいいのね？」

ハープが目を爛々と輝かせる。二人の卒業は、すぐそこまで迫っている。

03話 卒業試験開始（後書き）

シアン

「く……はは、やっぱりギルドの先輩たちは強いんだな……」

君も改めて分かっただろうね。

それから今回最後まで私の駄文を読んで下さった方、有難う御座います。そしてお疲れ様です（汗）

04話 悪の大魔王への挑戦（前書き）

えー、事情があり、昨日は更新できませんでした。

シアン

「何があったし」

うん、色々あった。理由は言えないけど。

ハーブ

「私達はどうなるのかしらね」

今回、決着が付きます。ではどうぞ

04話 悪の大魔王への挑戦

シアンはプクリンのハイパーボイスを辛うじて回避した。

後ろの壁からバキィッ！ と轟音が聞こえる。それと同時に、地面が振動しているのも感じられた。

「気合い珠あつー！」

シアンの掌からだいたい色の闘魂が放たれる。しかし、それはプクリンの手に止められた。

なっ……

シアンは恐れを感じたが、同時にプクリンの顔が少し歪んでいるのにも気付いた。

しかしその瞬間、

「私もいるのだぞ！ エアカッター！」

ペラップが翼を振った。シアンは動けなかったが、ハープが代わりにマジカルリーフでその技を相殺する。

その粉塵で場は一瞬靄に包まれる。

「真空斬り！」

シアンは掌を向かい合わせる。その間から無数の刃が飛び出した。プクリンは往復ビンタを使って打ち消すが、ペラップは耐え忍ぶしか術がない。また、プクリンも真空斬りの全てを防ぎきれてはいない。だが、二人共その余裕さを崩すことは無い。

「自然の恵み！」

だからといってシアン達も苦戦することはない。目の前の敵に攻撃を当てていく。それだけだ。

現在ハープが所持しているのはキーの実。自然の恵みは電気タイプとなる。

「ぐうっ！」

ペラップは翼でその攻撃を打ち消したが、彼は飛行タイプである。幾分かダメージは残った。

「やあ！」

シアンがその隙をついて裏拳を繰り出す。その拳は見事ペラツプの頭に収まった。だがペラツプが直撃したすぐ後にハイパーボイスを繰り出した。裏拳の直後でバランスも整っていないシアンに避けられる筈が無かった。

「うわあっ！！」

「きゃあ！！」

シアンは吹き飛ばされ、ハーブにぶつかる。

明滅する視界の中、ハーブが見たのはギガインパクトを放つ前触れのプクリンだった。

「いやあああーっ！！！！」

ハーブは叫びながら蔓の鞭をプクリンに放つ。

「ひっ……」

蔓の鞭がシアンの頭上スレスレを駆け抜けていったことは気にしない。因みに彼は今尻もちを吐いた状態である。

「ギガインパクト！」

「蔓の鞭！」

二つの技はぶつかった。だが、ギガインパクトと蔓の鞭では規模が違いすぎる。ハーブは圧され、あつという間にプクリンはシアンとハーブの目の前まで迫ってきている。ギガインパクトが直撃しようという瞬間、

「気合い珠！」

プクリンは後方10mまで飛ばされた。蔓の鞭とギガインパクトの膠着時間はシアンの気合い珠の準備に十分だった。セッターアップ

「とりあえず、状況を打破しようか。ダイクネヒュラ 暗黒星雲！」

シアンは銀の針を何本か構え、シャドークローの力を加える。両手から、暗黒星雲を放ち、それらはプクリンとペラツプから、シアンとハーブを見えなくする壁となる。ブラインドが

「ハイパーボイス！」

突如、紫色の煙の奥から音波が二つ、飛び出してきた。プクリン

とペラツプのハイパーボイスである。

突然の攻撃に、二人共反応できなかつた。

爆音が起こり、二人分の質量が穴の壁に激突する。

「ぐっ……」

衝撃で痛む全身を、シアンは鞭打って立たせる。隣では、ハーブもよろよろしながら立っていた。

まだ戦う勇気も、立ち上がる力も残ってる……勝機はあるわね

その痛々しい表情の中、ハーブは無理に笑みを作る。それは疲れ切つて疲弊したものでなく、自身に満ち溢れた精悍なものだった。シアンとハーブは一瞬の間目配せをする。シアンが右手を心臓の上に当て、ハーブが軽く頷く。それは見て分かるかどうか、というほど一瞬の間であつた。

シアンは弾丸のように飛び出すと、拳を握りしめた。

「はっけ

」

「エアカッター！」

エアカッター

だが、ペラツプが空気の刃を放つ。それはシアンの胸に直撃し、シアンは仰向けに倒れた。

「シアン……」

一瞬、ハーブの顔に縦線が何本も走る。だが、次の瞬間には

「マジカルリーフ！」

意を決して攻撃していた。プクリンとペラツプは腕と翼を盾にして防ぐ。

前のハーブならシアンが倒れると動けなくなっていたのに……変わったね、ハーブ

ハーブは蔓の鞭で打ちかかったが、プクリンが前に進み出て、メガトンパンチで相殺した
と思つた。

「!?!」

ハーブはプクリンの腕に蔓の鞭を絡ませた。そのまま跳び箱の要領でプクリンを後に押し出し、その上を飛び越え、彼の背後に跳び下りた。そこにいたのは

「しまった　　!!」

「原始の力!」

ペラップだった。ハーブは一息で、容赦なく彼の苦手とする岩タイプの大技を放つ。

「ペラップ!!」

プクリンの悲痛な声。かつてペラップがシアン達を庇って怪我を負ったときに彼に呼びかけた時の声に似ていた。

少し顔を顰めたが、シアンは後ろを向いたプクリンに呼びかける。「倒れている敵に、背中を向けていていいのですか?」

「なっ……」

プクリンはまた前に向き直り、衝撃的な光景を直視する。さっきペラップが倒した筈のシアンが、飄々とした顔で、構えた気合い珠を放っていた。

プクリンは、防御態勢も取れずに気合い珠を受ける。

「僕が相手の攻撃をそのまま喰らうと思いましたが?」

シアンは楽しそうな悪魔の笑みを浮かべる。彼はペラップのエアカッターなど喰らってはいなかった。胸に手を構えてガードしていた。喰らって倒れたふりをし、チャンスを見計らっていたのだ。自身の切り札である。気合い珠を確実にプクリンに当てるためのチャンス。

もう良いかな。ボクが君達に教えることは無いよ。これからも頑張ってね

プクリンは、チーム：ブライイトに合格の判断を下した。今まで自分を慕ってきた弟子を手放す、というのはとても寂しく、辛いものであったが受け入れざるを得ない。

「た、大変だ。逃げろっ！」

プクリンはそう叫ぶと右手に珠を掲げた。そこから光が漏れる。

「！」

シアンとハーブは身構えたが、その必要は無かった。彼が取り出したのは穴抜けの珠。光が晴れた時、穴の中にはシアンとハーブの二人しかいなかった。

04話 悪の大魔王への挑戦（後書き）

シアン

「僕達勝ったんですね」

ハーブ

「シアンの倒れたふり……リアルだったわよ」

グロいねそれ（汗）

05話 試験合格。そして・・・（前書き）

ちよつと更新遅れたかな？WWW

シアン

「笑いながら言わないで下さい」 気合い珠を構える

うん、分かったからそんな危険球を放つのはやめて。マジやめて
涙)

05話 試験合格。そして・・・

「よっと……」

シアンは（何故か）持ってきていた鍵縄をロープで地上に引っかけた。

「じゃあ、脱出するか」

シアンはそう言ってヒョイ、と飛び上がり、地上に着いた。ハーブもシアンに遅れて地面に足を着けた。

地面が崩れないかと心配したが、どうやら杞憂だったようだ。

ほんの数十分地下にいたのに、日の光を久しく見てないような感情になった。

「光の泉はこの先ね。早く行こう」

ハーブは意気揚々と光の泉へと歩き出した。シアンも、自分の体に着いた傷を調べ、大したものではないと確認するとハーブのあとに続いていく。

暫く歩いていくと光の泉に辿りついた。見た目は普通の泉である。中心から眩い光を放っていないければ。

「……？」

ハーブはこの場所にデジャブを感じていた。前に来たような気がする……だが、どうしても思い出せない。

「御前達遅かったな。何かあったのか？」

ブライトの到着が遅いのを訝しんだリングマが尋ねる。シアンはそれを

「ちよっと達の悪い悪戯に引っかかったんですよ」

と受け流しておいた。リングマとヒメグマは互いにその疑問顔を見合わせた。

「まあいいや。とりあえずちよっと困ってることがあってよ」

「困ってること?」

リングマの呟きにハーブは咄嗟に反応する。

「ああ、あれ見る」

リングマは光の泉の方に指をさした。そこに一つ宝箱が置いてあるのが確認できた。

「何ですか、これ?」

「ああ、俺にもよく分からねんだ」

「普通に開けても良いんだけど、何かの罠だったりしたら怖いじゃない?」

ヒメグマの言葉に、シアンもハーブもああ、と分かったように頷く。

「多分それは卒業試験用の宝じゃないかしら」

「宝?」

「うん。私達、それをとってこいって言われてるんだよ」

「そうか……」

ハーブの言葉にリングマは納得した。その間にシアンは宝箱に触っていた。

ヴウン

シアンは物体に触った時、たまにその物体に関する過去や未来の事象を見ることが出来る。

ヴウン

人はそれを『時空の叫び』と呼ぶ。今も、その時空の叫びは発動している。

キュウウウ……

今も、シアンに目眩が襲っている。目の前で閃光が走り、閃光から一つの光景が溢れだす。

僕が今見ている影。おそらくあれは親方様のものだろう。今、宝箱を置いていった。……つまり、この宝箱は卒業試験用のものとみて間違いないな。

そこで映像は途切れた。シアンは後を向いてハーブに言う。

「ハーブ、これで間違いないみたいだ」

「ホント!？」

ハーブは明るい表情で答えた。

「ああ、時空の叫びではこれは親方様が持ってきたものみたいだ……ところで、貴方達は何故ここに？」

シアンはリングマ達に話を振った。

「ああ、忘れるところだったな。ほらヒメグマ、さっさと行きな」
リングマはそう言うヒメグマの方をポンと叩いた。

「うん」

ヒメグマはそう言う光の泉の中心地

眩い光が迸る

魔方阵の中に入っていった。彼女が体ごと振り向いたとき、何処からか、声が響いた。

『目醒める者達よ。ここは光の泉。汝は進化を求めるか?』

「!？」

突如として響くその声にシアンもハーブも身構えたが、誰かが襲ってくるという事は無かった。

「うん、お願い」

その間にヒメグマは答えていた。『うん、お願い』とは進化を促す意志があるという意味なのだろうが、どういふことなのか、シアンにはよく分からなかった。(シアンはポケモンが進化するということを知っている)

ハーブはやっとこの場所がなんなのか思い出した。5年ほど前に

姉と来たことがある。あの時、この場所に来ていなければ彼女も探検隊になってもう一度この場所に立つなんてことは無かっただろう。

『汝、進化に宝具は必要か？』

「要らないわ」

ヒメグマが答える。その瞬間、ヒメグマの周りで光の渦が巻き、彼女の姿が見えなくなった。

バハアアツツ！！

光の筈が内から弾け、そこに立っていたのはリングマだった

「え？」

シアンはほけつとした顔で、泉の中央に立つリングマと自分の傍に立つリングマを何度も見比べた。

「い、今のは……これが進化ですか？」

「ええ。ポケモンはある条件を満たすと進化して、自分の姿かたちが変わったりするのよ。それだけじゃなくて、強さも変わったりするの。技の多様性が小さくなってしまっからちよつと問題があるんだけどね」

いまいち状況が掴めないシアンにヒメグマだったリングマが説明する。シアンは首を傾げたままだったが、ハープは目を輝かせると、「じゃ、じゃあ私達も進化出来るのかな!？」

そう言っつて光の泉の中心地に躍り出た。その場に居た全員の視線が彼女に集まる。その瞬間、またあの声が響き渡る。

『……ここは光の泉』

重く低い、遠雷のような声。

『汝、進化を求めるか？』

その声はハープに尋ねかけた。

「うん！ 進化したいよ」

ハープはその声の雰囲気合わない快活な口調で返事をした。だが声は苦にもならないような声質のままだ。

『汝、進化に宝具は必要か？』

「……宝具？ なんのことが分かんないけどいいや。要らないよ」
ハープがそこまで答えると泉から溢れ出る光の量が増した。

『目醒める者達よ。では始めるぞ……』

ハープは光に包まれた。その光は途中で弾け、中から出てきたのは
姿かたち変わらぬままのハープだった。

「……え、何で！？ どうして進化出来ないの！？」

ハープは進化が失敗したという格好悪さと進化出来ないというコンプレックスから少し焦っていた。

『汝は進化できない』

声が低い声で、物騒な一単語を口にした

『空間の歪みの影響で。汝の後に居る者もまた然りだ』

05話 試験合格。そして・・・（後書き）

シアン

「よく考えれば、容姿も分からないのに“口にする”なんて表現は拙いんじゃない？」

私もそう思ったけど他にじっくりくる表現が無かったんでそれにしといた。

シアン

「ようするに文章及び語彙力皆無ということですね」

黙っとれ（汗）

06話 Good・Bye！（前書き）

ようやく完成した〜

シアン

「遅いですよ。最近なんかありました？」

高校の勉強がハード化してきたぜ

ハーブ

「バカの作者には耐えがたい苦痛ね」

君には言われたくない（きつぱり） それと活報でちよつと言つたことなのですが、この更新が終わった後一週間半程消えようと思ひます。ご了承お願い致します。

シアン

「戻ってきたらシメてやる戻ってきたらシメてやる戻ってきたらシメてやる戻ってきたらシメてやる戻ってきたらシメてやる（ry）」

怖いっ！（涙） ま、まあ感想の返信くらいはしようと思ひますんで（汗）んでは最新話どうぞ

06話 Good - Bye!

「合格、おめでと〜う!」

シアンとハーブが帰ってきたときの、ギルドメンバーの第一声はこれだった。

だがシアンもハーブも妙に釈然とした態度を見せない。

「あ、ああ。有難う御座います」

「何だか大したことをしてない気がするけど」

そう生返事になる。

無理も無い。光の泉で、物騒極まりないことを言われたのだ。

『汝は、時空の歪みにより、進化できない』

光の泉にて、ハーブはいきなりそう言われた。

「え、ええ!?! 何、時空の歪みって!?!」

声は、ハーブの間に答えずに説明を続けた。

『汝の存在が空間に影響をもたらしている。それ故汝は進化出来ない。汝の後の者もまた然りだ』

泉の言葉はシアンを指していた。急に話を振られ、シアンは少し戸惑う。

『ここは光の泉。進化したい者はまた来るが良い』

そう言っつて声は消えた。気が付くと、泉に差していた光も無くなっている。

「じ……時空の歪みってなんだろう……」

ハーブが心細げに呟く。シアンは宝箱を拾い上げた。因みに中身はセカイイチである。帰りながら見た時は、親方様らしいな、とシアンは感嘆もした。

「ちよつと……心配だな……」

シアンの表情は重苦しい。前に時によって消滅すらもしたので、

時にニユアンスの似た時空がまた面倒事が起こると踏んでいるのだ。
「まあ、大変なことが起こっても、うるたえずに日常を生きていく
それだけだ」

強がりのようにそう言うと、元来た道を引き返し始めた。

シアン達の回想はそこで途切れ、気が付けばペラップが二人の肩
を上機嫌な様子で叩いていた

「そんなことないよ！　なんたって、御前達は悪の大魔王を倒した
んじゃないか！」

「何故それを知っているんです？　出会わずにそのまま宝を持ち帰
ったってこともあるじゃないですか」

シアンが言うとペラップが『うっ』と声を詰まらせる。

「それに」

シアンはキマワリの頬を指さした。

「その痣はどうしました？　実は光の泉で悪の大魔王の子分とか名
乗ってるキマワリの頬を殴ったんですよね」

「キャ！？　べ、べべ別に、これは探検中に敵にやられただけです
わ！　子分とか九卿とか、ワタクシ全く存じませんわ！」

シアンが問い詰めるとキマワリは頬を抑えて慌てふためきながら
弁解した。だが、自分が致命的な一単語を言ったことに気付かない
……キマワリ、どうして九卿なんて言葉を知ってるの？」

「というかキマワリさんだけじゃなくて皆どこかしらに怪我を追っ
てるみたいなんですけど」

シアンとハーブが訝しむのを、ペラップが

「とととにかくっ！　お前達はこれでギルドを卒業だ。これから
はギルドの厳しい仕来たりに縛られず、探検隊の活動ができるんだ
よ」

と遮った。途端にハーブが顔を輝かせた。

「ホント！？　じゃあ依頼の報酬も十割全部貰えるの！？」

プクリンギルドの仕来たりとして、弟子は報酬の僅か一割しか貰えない。残りは全て親方であるプクリンの収入としてギルドの運営にあてられる。ギルドの仕来たりに縛られないというのはそれすらも無い、ということだ。シアンもハーブもそれは嬉しかった。収入が今までの十倍になる、ということだから

「残念だが、報酬の件は従来そのままとさせてもらう」

そこに割って入ったペラップの言葉。

「はっ!?!」

「ええっ!?!」

その理不尽な扱いに、二人は叫び声をあげた。続いてあげられることが想定される文句を抑えるかの如く、ペラップは翼を前に突き出して二人を抑制すると、彼の頭程もある大きな袋を置いた。相当の数のコインが入っているのだろう、ジャラ、という音が重い。

「親方様あつてこそこのチーム：ブライトだからな。まあその代わりといつてはなんだが、探検隊経営の為に寄付金を渡す」

シアンは目を見開き、紐を緩め袋を開いて中を確認する。一瞬間、顔をあげると素っ頓狂な声をあげる。

「い、10000ポケ!?!」

その額はチーム：ブライトの所持金の約八割である。

「そ、そんな大金、貰っていいの!?!」

ハーブも驚いて慌てて訊く。

「勿論、全然オツケー　寧ろその為に用意したんだし」

「あ、有難う御座います……っ」

シアンは袋を持ち上げようとしたが、できなかつた。重さが重さだ。あまり力が強くないリオルという種族で、しかも普通のリオルよりも華奢な体躯である。持ち上げるのは諦め、プクリンの話を聞くことにした。見れば既に卒業式の雰囲気。祝福のような儼かな雰囲気漂っている。

「おめでとう、ブライト。君達はギルドをめでたく卒業したんだよ。これから辛いことがあると思うけど、頑張っつてね」

「ギルドを卒業できるなんて凄いでゲス！ これからも頑張るでゲスよ！」

「お二人とも、力を合わせて幸せになって欲しいですわー！」

「おめえさん達が卒業しちまうのは寂しいけどよオ。まアたまには道具のトレードにも来てくれよなア。グヘヘ」

優しく、力強くかけられる、激励の言葉。プクリンだけでなく、ギルドの皆も激励の言葉や、祝詞を送ってくれた。住み慣れたギルドを後にするというのに寂しくはなかったのは、その言葉があったからである。

「皆さん……有難う御座います」

「有難う。私達これから頑張るよ！」

シアンとハーブは仲間達に頭を下げ、仲間、という言葉の大切さを噛みしめるのであった。

シアンとハーブはこれから何処に住むか話しあっていた。卒業したのでギルドではもう寝泊まりできない。色々と考えた挙句、結局サメハダ岩で寝泊まりすることにした。

雨風は防げないし、天然の洞窟なのでセキュリティシステムすらも無い。

「仕方ないけど、今日からここで寝泊まりしようか」

「寧ろ僕達の探検隊活動が終わるまでここに厄介になると思っけどね」

シアンが苦笑い気味に嫌味を言った。数少ないサメハダ岩のメリツトは、広々として、大人数を収容できることだろうか。尤も、シアンは隊員を集めるつもりはさらさらない。

「せっかく卒業したんだ。さっさと探検隊活動を始めよう」

シアンの声は素っ気ない。だが、卒業できたことが嬉しくてたまらないのは感じ取れた。

06話 Good・Bye！（後書き）

シアン

「僕達卒業したんだね」

ハーブ

「実感湧かないわ……」

ダメじゃないか。君達は一流の探検隊として羽ばたいていかないといけないんだぞ。

シアン

「そういう作者もこの前中学校卒業しましたよね」

ハーブ

「ちゃんとした高校生活おくれるの？」

うっ……ん、ま、まあ……（汗）

シアン

「アホ（汗）」

07話 際立つ氷塊（前書き）

はあ……疲れた。

シアン

「なんか大変ですね」

とりあえず書くところまで書いてみたよ

07話 際立つ氷塊

「……とりあえず、この依頼を選んでみようか」

シアンは伸びをしながら一枚の依頼書を掴み、ハーブに手渡す。

「う……」

ハーブが見たのはお尋ね者の依頼。しかも今までで最高位のレベルのお尋ね者だった

「シ、シアン。違うの選ぼうよ」

ハーブは青ざめた顔で依頼書を突き返す。だが、シアンは首を振った。

「逃げるつもりかい？ 神と呼ばれたポケモンを倒し、あまつさえ名門ギルドを卒業した僕達が」

そう彼が言くとハーブはグツと声を詰まらせた。

「……嫌なら辞めようか」

シアンの顔に一瞬恐怖が走る。彼も少し怖いのだろうか。だが、強気な態度をとった以上は退けない。ハーブとしても、嘲った相手を見返すのに絶好のチャンスだ。

「良いわよ。場所は……“風の霊峰”ね」

チーム“ブライト”の二人は依頼場所の風の霊峰へと向かっていった。

そこは、強い風と神々しい風景がマッチしていた。まさに“風の霊峰”と呼ばれるに相応しい雰囲気であった。

「今回は、ここに居座っているオニゴーリを捕まえてくればいいのよね」

ハーブが依頼内容をボソリと呟く。それに対してシアンは交戦的な笑みを浮かべる。

「相手は氷タイプだ。殺されないように注意しなよ」

ハーブはムツとしたが、影ながら彼女自身のことを心配しているのがみてとれたので黙っておくことにした。

「行こうか」

シアンがそう言いながら歩きだす。チーム“ブライト”の始めての独立探検隊としての活動が始まった。

開始五分。シアンは即座に選ぶべき依頼を間違えたと悟った。

「っ、シャドークローー！」

「マジカルリーフツ！」

二人の技がピジョットに炸裂する。だが、マジカルリーフで止めを刺しきれなかったのか、ピジョットはまた起き上ってきた。

それもその筈、ピジョットは飛行タイプを持つ。草タイプ技のマジカルリーフはピジョットにはあまり通らない。

「失敗したな……」

彼が悟った失策は、相性の問題だった。風の霊峰は飛行タイプのポケモンが多く生息している。格闘、草タイプで構成されているチーム“ブライト”にとっては苦しいダンジョンだった。

それでも、彼等は進んでいく。

ダイクネビュラ

「暗黒星雲！」

「原始の力！」

紫色の閃光が襲って来たフワライドを貫いた。ハーブが原始の力を当て、フワライドは倒される。

「依頼書によると、オニゴーリはこの辺なんだけど……」

シアンが依頼書を取り出し、周りの風景と依頼書とを交互に見た。「飛行タイプばかりの場所に氷タイプのオニゴーリがいたら目立つわよね……」

ハーブがぼやいた。だが、シアンは

「それはない」

と、キツパリ否定した。勿論、根拠があつてのことである。

「何で？」

「オニゴーリも地面から浮いているだろう。かえって見過ごす可能性の方が高いと思う」

シアンがそう言うと、ハーブは『成る程』と言いたげな顔を見せた。気が付けば、頭脳戦はほぼ彼に任せきっているハーブである。

「でも……どうしよう……」

「探し回るしかないだろうさ」

シアンは少し苦笑いを浮かべた。

しかし、オニゴーリを探しだすのにそこまで苦労は要らなかった。貴方ですね。お尋ね者、オニゴーリ」探していた相手は岩肌が黒い場所にいた。オニゴーリという種族は氷により、白い色をしているので黒い所にいると流石に目立つだろう。

「お、御前ら、探検隊か」

オニゴーリが鋭い眼光で二人を睨む。

「そうよ。悪いけど大人しくしてもらおうわ」

今度はハーブが前に出て、ニツと好戦的な笑みを浮かべる。

(……まずいな……とりあえず、相性の良いチコリータの小娘からぶっ殺すか)

オニゴーリは逃げようとしているフリをしながら、勝算を見繕っていた。

(逃げる気か？ いや、それにしても身が退いていない……逃げようとしているフリをしているな)

だが、シアンの方が一枚上手であった。

それに対し、ハーブはオニゴーリがなんらかの攻撃を仕掛けてくると自身に予告していた。奇しくも、その計算は当たっていた。

「冷凍ビーム！」

オニゴーリは、ハーブに焦点を当て、技を放つ。だが、その前にハーブが動いていた。

足に力を籠め、大きく跳躍すると同時に蔓の鞭で地面を叩く。

「押し掛かり！」

「ぐあっ！」

オニゴーリはいきなりの衝撃に断末魔をあげる。ハーブが飛びのいた。

「何？」

オニゴーリは違和感を覚えた。このまま自分を拘束しておくかと思つたら、すぐに飛びのく。このチコリータの少女の為すことが理解できない。そう思つた瞬間、

「気合い珠あつ！」

橙色の珠が飛んできた。ハーブが飛びのいたのは、これによる被弾を防ぐためだったのだ。

後にもっと大きな一撃が飛んでくる。だが、時すでに遅し。オニゴーリは苦手技を喰らって気絶していた。

お尋ね者のオニゴーリをジバコイル保安官に引き渡し、賞金を受け取った後、ハーブは先にサメハダ岩に帰っていった。

一方、シアンは暫くトレジャータウンで買い物をしていた。

「……あれ？」

シアンは首をかしげた。

「何だかいつもより人通りが少ないな……」

帰りにパッチールのカフェを訪れてみたところ、こんなものを見た。

『パッチールのカフェにて大ニュース！ 詳しくは当店へお越し下さい』

「……なるほどな」

トレジャータウンのポケモンがやけに少なかったのはカフェに来ていたからか、とシアンは判断した。

07話 際立つ氷塊（後書き）

シアン

「いや、なんか特に最後がグダグダ（汗）」

とりあえず疲れた……。

シアン

「いつまで言ってるのだろう……」

08話 最高峰の頂上へ（前書き）

ふふふ、空ダンをプレイしてる人は分かりますよ。

シアン

「最高峰の頂上へ、ですか」

イエス。今回私が一番書きたかった話の一つです。

シアン

「そうですね。んじゃまあどうぞ」

08話 最高峰の頂上へ

パッチールのカフェは、いつも以上に賑わっていた。重大情報発表というのは、トレジャータウンの皆の興味を惹いているようで、いつもは見ないような者さえいた。

「何があるんですか？」

シアンはカフェに入りざま、近くにいたチーム“かまいたち”の隊員、サンドパンに呟いた。

「さあ？ 重大情報らしいぜ」

サンドパンも特段何かを聞かされているというわけではないらしい。首を横に振った。

因みに、かまいたちの他にチーム“はっぴーず”と“マックロー”が来ていた。

「え〜皆さんお集まり頂き有難う御座いますう」

カフェの中が時間をかけ鎮まっていく。やがて皆話さなくなったのを見ると、パッチールは話を始めた。

「今回、プロジェクトPにて新発見がありました！」

プロジェクトPというのはパッチールが遂行中の計画である。探検隊が不要な道具を店員のソーナノ達に渡し、ソーナノ達はその道具を未開拓地の開拓の資金としていく。そして開拓によって発見された宝が探検隊達の元に還ってくる、というシステムのものだ。

そのプランで一大発見があったらしい。シアンを除く全員が好奇心の目を寄せている。シアンはあまり内心の興味を表に出すことはない。

「皆さんは空の頂きというダンジョンを御存知でしょうか？」

言った瞬間、聴衆が表情に見てとれる疑問を浮かべる。その中で、カフェの常連の一人であるバリヤードが手を挙げた。

「あ、それ知ってる。東の方角にある世界で一番高い山のことだよ
ね？」

「はい、バリヤードさん良くご存じです。その通りです。お話にあった通り、空の頂きというのはダンジョンの一つで、同時に世界一の高さを誇っております。」

「……」
「かつてはその登山道もなく、秘密に覆われた地でしたが、今回その登山道の開拓に成功しました！」

シアンは段々聞く気を失ってきた。恐らくこの話の流れからすると、次に展開されるのは“皆で登山に行こう！！”というものだろう。彼としては、重い荷物を背負ってゴツゴツした道を行くより見返りも望めるいつもの依頼をこなすほうが良いのだ。

だが、彼の望みに反して周囲からは歓声や拍手が沸き起こり、登山ムードとなっている。

「それだけでなく、山の麓に小さな隠れ里まで発見しました！」

「隠れ里？」

「はい。なんでもシェイミというとても可愛らしいポケモンが住んでいるそうです。」

パッチールのこの発言は更に周囲の興味を惹いた。もうこうなるとシアンとしてはカフェを出て、何も無かったことにするしかない。

「さあ、皆さん！ 新発見盛り沢山の登山へ！ 出発しましょうー！！」

幸い、この手の話に興味を示しそうなハープはいない。今カフェから逃げ出して、サメハダ岩まで逃げ帰れば

「シアン、どうしたの？ 面白そうな話があつてる最中に出ようとするなんて」

聞き慣れた高い声が聞こえてきた。

「……」

シアンの顎から冷や汗が滴り落ちる。数秒間、黙りこくつた後、苦笑いを含んだ声で呟く。

「……い、いつからそこに？」

「始めから」

「何でいるの？ サメハダ岩に帰ってた筈だよな？」

「シアンが遅いから迎えにきたのよ」

「……登山、行きたい？」

「今からでも」

パッチールが『パンフレットをお配りします』と言っているのが遙か遠くに聞こえる。おそらく、パッチールが配っている紙キレの一枚を彼女は持っているだろう。

「……仕方、無いな……」

シアンは明日の分の収入を生贄に捧げる覚悟をした。

当然のこと、今日中に空の頂きに向かおうとする者は一人とていなかった。時刻は午後六時である。今からいけば電車を使ったとしても真夜中だろう。

「出発は明日の六時とするか……」

「早起きしないといけないわね」

「僕はいつも同じくらいに起きているんだけど」

シアンはすっぱりと切り返すと、不思議な地図を広げ、パッチールに教えてもらった空の頂きの正確な位置を確認した。

「トレジャータウンから、東北東の位置……地図上では約10cmだから実際の距離は……50kmか。電車を使った方が良いかね」

シアンは、傍らで明日の準備をしているハーブをチラリと見た。視線が合いそうになって、慌てて地図に目を戻す。すると、パッチールが配っていたパンフレットが視界に入ってきた。拾い上げて、内容を確認する。

『空の頂き…全十合。出現ポケモンは、フワライド、ピジョット。さらにフシギソウ、ウツドンなどの飛行タイプや草タイプが多い。頂上には秘宝が眠っているとのこと！？』

“秘宝”という単語を目にした瞬間、シアンの顔色が変わった。

「秘宝……ね」

シアンは少し目を細めて、サメハダ岩から見える、夜の海の景色

を見つめる。隣では、準備を終えたらしいハーブがすやすやと寝息をたてていた。

08話 最高峰の頂上へ（後書き）

シアン

「だるい……行きたくない……作者ああ〜」

怖いよ（汗）

シアン

「何である場にハーブを連れて来たんですか!？」

ハーブ

「私達が行かなかつたら話が始まらないと思うけど」

09話 最高峰の麓の住人（前書き）

今回、シアンが中心となります。ハーブの影は、前作の遠征帰還後のチップ並みに薄くなりますWWW

09話 最高峰の麓の住人

「ここがシェイミの里のようだね」

バクフーン鉄道の駅を降りて十五分ほど歩いたところにシェイミの里はあった。長閑な草原が広がり、気持ちを落ち着かせてくれる。

「ほのぼのした所ね」

ハーブが胸いっぱい息を吸い込む。そこへ、チップが走り寄ってきた。

「あ、シアンさん、ハーブさん。来られたんですね」

チップは、大人びたシアンと違い、どこか子供っぽさを感じさせる。あるポケモン（二十五歳）がチップに恋心を抱き、“シヨコ”と呼ばれたことさえある。（本人は意識していない）

「こつちですよ」

チップは朗らかな表情でシアン達を案内していった。その際、シアンは一人のポケモンを目が合った。

「む、シアンかの？」

老翁のような言葉使用とは裏腹に、澄みきった高い声。その声の主は一人のキルリアであった。

「あれ、由祈？ 来てたんだね」

キルリアの名前は相原由祈^{あいはら ゆき}。整った顔立ちで、トレジャータウンの中で人気があるが、彼女の心の中には既に一人のライチュウの少年が宿っている。だが、そのライチュウの少年は一年ほど前から行方不明である。

「面白そうじゃったからの。登山などしょっちゅう参加するわけでもあるまいし。そうそう、ゼアンも来ておったぞ」

由祈は笑顔でペラペラ話すと、すぐに登山道に入っていった。チップも、ブライトの二人から離れ、別の探検家と談笑を始めた。

「ゼアンも来てるんだ……って、よく見れば結構来てるね」

ハーブの言うとおり、そこには五十弱ほどのポケモン達がいた。

そして、その半分ほどは緑色の小さな四足歩行のポケモン達だった。小さな顔や、顔の横に咲いている花が可愛い。

そう思いながら辺りを見渡していると、不意に一人のポケモンと目が合った。どう見ても、この住人ではない。黒い体に刀を思わせる鍵爪。ニューラ、というポケモンである。ニューラはシアンを見るなり、高圧的な姿勢を取り、顔に嘲笑を張り付けた。

「へっ、宝を採るのはこの俺だ。御前らみたいな低能の探検隊は黙って雑用でもしている」

「……」

シアンは、表情すら変えなかった。だが、ニューラが最後の『ろ』を言い終えた瞬間に彼の額に太い青筋が浮いた。

「……君、挑発をしているつもりかな？」

「へっ、聞くまでもないだろうが。ってか、聞かないと分からないのかよ」

「君の言動が幼稚過ぎて、阿呆の戯言にしか聞こえないんだ」
「なっ……」

ニューラが咄嗟に顔を真っ赤にし、宝は渡さないからな、とだけ言っただけでその場を立ち去った。

因みに、ハーブは探検隊マックローと談笑していたためこのことは知らない。

「あのー、探検隊の方達ですか？」

シアン達の後から、声が聞こえた。振り返ると、そこにはそこかしこにいる緑色のポケモンと同じポケモンが落ち着いた物腰を構えていた。

「そうだけど……君が、伝説のポケモンと言われるシェイミ？」

シアンは訝しげに訊ねた。伝説、というからにはディアルガやグラードンのようなデカブツを想像していた。だが、セレビィやユクシーなどの例を思い出し、訝しげな表情はすぐに消した。

「はい。私はシェイミです」

シェイミはそう微笑んだ後、ここにいるのは皆シェイミなんですからね、と付け加えた。

「シェイミって……。仲間と区別して呼び合っていたりしないの？」
ハーブがうるたえる。シェイミは苦笑い気味にこう答えた。

「勿論、個人の名前はありますよ。私の名前はラン。ラン＝ミラーノイズです」

ランと名乗ったシェイミはペコリ、と頭を下げた。
「良い名前だね」

シアンは優しげに唇の端を持ち上げる。そして一步前に進み出て、
「僕はシアン。探検隊“ブライト”の一員だ。よろしくね」

と、名乗った。後に戻る。

「……………」

シアンは視線を横に流して、黙ったままにいるハーブを肘で突いた。

「えっ、あ、ああえーと、私はハーブ。私もチーム“ブライト”の一員よ。よろしくね」

ハーブの自己紹介はシアンに比べて幾分ぎこちない。だが、ランがそれを言及することはなかった。

「よろしく願います。……しかし、驚きました。いきなりこんなに沢山のポケモンがやってくるんですから」

シアンは、ふと心の中に疑問を抱いた。世界一高い山であるというのに、何故ポケモンが来なかったのだろうか？ 知名度も、昨日の時点ではバリヤード一人が知っていたという程度。すこし違和感を感じる。

「いきなり……。今までは来なかったのか？」

「はい。昔は登山の為にここに来たポケモン達の案内役をしていたのですが……。地震により、ここまで来る為の道が塞がれてしまったんです」

ランが目を伏せ、悲しげに語るのを聞いてシアンは納得がいった。

PPOは何をやっていたのか、と疑問が首をもたげはしたが、気にしないことにした。

その時、シアンの視界にニューラの姿が映った。ガルーラ像での準備を終え、今すぐにも登山に突入できる状態である。だが、一向に突入しようとしなない。

(……何のつもりだ)

シアンは苛立ちから、ニューラを睨めつけた。その瞬間、こちらに向かって嘲笑を浮かべたニューラの顔がフラッシュバックし、シアンの悔しさは絶頂に達した。

(……落ち着け落ち着け。まずは、正確な情報を手に入れよう……) シアンは、ハーブの楽しげに話しているランに訊いた。

「ねえ、この山には秘宝が眠っている、と聞いたんだ。別に、君達が困るのであれば教えてくれなくてもいいけど……最低ラインまでは知りたい。教えてくれないか？」

すると、ランは意味あり気な含み笑いを見せた。

「ふふ、それはどうでしょう。この山を登る主役は貴方達。私達はそれを支える衝立ついたてでしかありません」

「なら、本当のことはこの山に登れば分かる、と言っただね？」

「面白そう。シアン、私達も登ろうよ」

ハーブが邪気の無い瞳で見上げてくる。ここに来た理由は元々この山に登ることではなかったのだろうか。

「そうするか……」

シアンが憂いを帯びたような顔で頷く。すると、ランが嬉しそうな顔で進み出た。

「では、私が貴方がたの案内役をかってでてよろしいでしょうか？ 別に、異論の理由などは無い。

「勿論よ！ よろしくね、ラン」

「はい。こちらこそよろしく願います」

09話 最高峰の麓の住人（後書き）

シアン

「ニューラむかつく……」

たまにはいるさ。そういう奴も

ハーブ

「そういや、作者の学校は来週文化祭なんだよね」

シアン

「そうだった。確か一週間後のリアルタイムですよね？」

その時には爆睡中だろうね

10話 最高峰に登る途上 ? 恋し始めの案内役 (前書き)

すみません、一週間以上も間を開けてしまっ；；

今回、ggdggdです。更に読者様が納得できない箇所があるかと思
います。書いていたらこうなっ；；

10話 最高峰に登る途上 ? 恋し始めの案内役

シェイミ達はかつて空の頂に訪れた旅人に案内役をしていた。

旅人達は、彼らの案内のお陰で山の中でも遭難することもなく無事にダンジョンの搜索を終え、シェイミの里は旅人によって潤った。だが、そんな日々が無常に続くはずもなかった。

ある年、大地震が里を襲った。地震は大量の犠牲をだし、里へ続く道路は閉ざされ、空の頂を訪れる者はいなくなった。そう、まことしやかに伝えられている。

しかし、シアン、ハーブの二人が山を登っていることから分かるように、近頃里への道が新たに開拓された。シェイミの里に、数百年の歳月を超えて光が差し込んだのだ。

「ねえラン。山頂はまだ？」

「ハーブさん、まだ一合目ですよ」

登山開始五分後、既にハーブが音をあげはじめ、ランにたしなめられていた。

「はあ……だから登山なんかいやだって言ったのに……」

柔らかい表情のランとは逆に、シアンは呆れた顔だ。これでハーブのことを想っているというのだから凄い。

「はい」

ハーブは嫌そうな顔を一つもせずに戻した。

「一合目までもうすぐだよね……」

「はい。ただそこまでに強力な野生のポケモンに遭遇する確率が高いので注意して下さい」

ランの忠告に、シアンは一抹の不安さえ見せない。かなり自信がある表情だ。

カッコいい……

その表情は、ランに切ないまでの羨望と憧れを抱かせた。

ランは、シアンの顔を見つめながら、同時に胸が強く痛く疼くのを感じていた。

「そうか。強いつて言うところのくらいかな？」

シアンの問いに答えたのはランではなくハーブだった。

「実際に訊くより体験してみたほうがいいんじゃないかしら？」

彼等の前にいたのは、ベイリーフ、ラッタ、オニドリル、ビードルだった。

「あ、き、気をつけて」

ランがオロオロしながらシアンとハーブに注意を促す。だが、二人はランを庇うように立つと戦闘の構えをとった。

「だ、大丈夫なのですか！？ このポケモンは一筋縄ではいかないのですよ！？」

「大丈夫よ。一筋縄でいかないのは私達も同じなんだから」

ハーブの声は、自信に満ち溢れていて力強かった。

「ラン、君も気をつけていて」

シアンは一言、ボソリと呟くと、銀の針を投げつける。その針は、シアンのシャドークローの力を受け、“ダークネビュラ暗黒星雲”となった。それだけでなく

「回った！？」

シアンの耳に、ハーブのものとも、ランのものともとれない声が響く。暗黒星雲を取り巻く黒いオーラが、形を変え、銀の針の周囲を回転し始めた。

「ダークネビュラ暗黒星雲・スバイラル輪廻！！」

オーラは、銀の針を先行し、ベイリーフに突き刺さった。攻撃を受けたベイリーフは動きを止められた。そこに、銀の針が刺さる。

「毒づき！」

痛みで動けないベイリーフに、シアンの技は効果が絶大だった。ベイリーフはすぐに倒された。

「原始の力！」

ハーブが目の前光景に目を奪われているオニドリルに岩タイプの技を打ち込む。倒れるまでには至らなかったが、気にしない。蔓の鞭で地面を一打ちして飛び上がると、ビードルに押し掛かりを加えた。ビードルはハーブを弾き飛ばそうともがいた。ハーブはエナジーボールをビードルに放つ。

「グアアッ！」

小規模の爆発が起こり、ビードルは動かなくなる。ハーブは空中で向きを変えると、自分を襲おうとしていたオニドリルに原始の力をもう一回放った。

「やああっ！！」

原始の力により飛ばされたオニドリルはラッタにぶつかった。

「瓦割り！」

シアンはここぞとばかりに、よろめいたラッタに全力の一撃を加えた。

すごい！！

ランは、彼等の戦闘を見て感嘆のため息を吐いた。同時に一つの考えも纏めていた。

あの方達なら……姉さんを助けられるかも……

「お、お疲れ様です、シアンさん、ハーブさん」

ランは、戦闘を終えたシアン達に労いの言葉をかける。そして、二人の眼を交互に見つめる。

「……ん？」

「な、何？」

二人共あまり見つめられることに慣れていないのか、戸惑いの表情を見せる。

「あの……お強いんですね」

「ああ、いや、今のは運が良かっただけさ。普段はもっと修行が必要なくらいだよ」

「いえ、運のよさだけであんな高度な戦いはできません」
「そうかしら……」

ランはの頭の中に一つの説がよぎった。

そう言えば……この方達の探検隊名は“ブライト”だったよね……一年くらい前に世界を救ったとか、いって騒がれた探検隊の名前も……たしか“ブライト”！！それに、リオルとチコリータのコンビ！！間違いない！！

「あ、あのっ！！」

ランは身を乗り出して叫んだ。

「何かな？」

「実は、私には姉がいるんです。名前はハイネスです」

「い、いきなり何かしら……」

ランの言うことを理解できず、戸惑うハープ。だが、シアンはいつも通り冷静だった。

「そのハイネスさんを、助けて欲しいのかな？」

瞬間、ランの顔に光が満ちる。

「別に構わないよ。僕達はこれでも探検隊の端くれなんだ。君の姉さんは、絶対に助けてみせる。な、ハープ？」

「えっ、え！？ う、うん！！」

急に話を振られたハープの声は、若干浮っていた。

「へえ、数日前から行方不明ね……」

シアンとハープは、ランからハイネスの、出来るだけ多くの情報を聞きだした。

それによると、ハイネスはランと同じ家に住んでいた。

「でも、朝起きたら姉の姿は無くて……里の皆に訊いても、誰も姉を見てないって言うし……」

シアンは困惑した。これは、紛うこと無き神隠し。だとしたら、ハイネスの手がかりはゼロ、ということになる。

「本当？ ラン、それ以外に手がかりは？」

ハープがランを急ぎたてるように言う。それに対し、ランは俯いて押し黙っているだけだ。シアンは少し勘案した後、訊ねた。

「ラン、ハイネスさんの特徴を教えてくださいませんか？ 顔立ちとか……性格とか」

ランは、それならとばかりに話し出す。

「えっと……言うまでも無いんですけど、種族はシエイミです。顔は明るくはつきりした感じで、性格はボーイッシュな感じでしたね……すみません」

「いや、良いんだよ。さつき言っただろう。僕達も探検隊の端くれだって」

ランは彼の言葉を聞いて罪悪の念に駆られる。

「そうじゃないんです……元々私達はこの山に登る方々をサポートする役目の種族です。なのに……そのサポートする方々の役にも立たないばかりか、あまつさえ依頼を申しつけてしまうなんて……」

シアンとハープは、暫し黙りこむ。やがてシアンは口を開き、ランに励ましの言葉をかけた。御世辞のような薄っぺらいものでなく、あくまでも自分の本音を。

「いや、良いんだ。僕も今日は登山なんかじゃなく、いつもどおりに救助活動を行いたかったんだ」

「え、でもシアン、私は ムグ！？」

余計なことを言いかけたハープの口を塞いで続ける。

「だから、構わないよ。依頼活動の一つくらい頼まれても文句は言わないさ。寧ろ大歓迎だ」

10話 最高峰に登る途上 ? 恋し始めの案内役 (後書き)

補足

元々、シェイミに性別という概念は存在しないので、ハynesのことを姉、と呼ぶのはおかしいじゃないか、と仰る方もいるかと思えます。

しかし、今回のハynesイベントに関して、やはり兄弟姉妹があるということ、中性であると困るのです。ですので、今回敢えてシェイミに性別の概念を持たせました。

今回、ランがシアンに恋情に近いものを抱いたのもそういう設定の上です。ご了承ください

11話 最高峰に登る途上 ? 引き裂かれた者達 (前書き)

シアン

「やっと更新だよ……」

いや、遅れてごめんごめん。

シアン

「謝る気ゼロですよね」

うん それから、エメラルドのツイートで言っていたのですが、
本日よりローテーション方式での執筆を始めます。詳しくはツイ
トの方をご覧ください。

シアン

「それから今日は作者の誕生日ですよね……厄日だ」

オイコラ。最後失礼なこと言っただろ

11話 最高峰に登る途上 ? 引き裂かれた者達

「成る程、ボーイツシュでさっぱりした、明るい性格、ね」

シアンはどこからか手帳を取り出すと、ランから聞きだした、有りつ丈のハイネスの特徴をそこに書きだした。

「ほ、ホントすみません」

ランは申し訳無さから、顔を赤くして俯いてしまう。

「はは、さつきも言っただろ。構わないで」

シアンが気さくに微笑むと、その顔は一層赤くなった。シアンは、それがランの照れによるものであることに気付かなかった。

「……」

ついでに言うと、ハーブが折角の登山を邪魔されたことに怒って拗ねた表情をしていることにも気付いていなかった。

「……シアンさん、ハーブさん、気をつけて下さい」

一合目を過ぎて、二合目に差しかった。少し登ったところで、ランがただでさえ低い身を更に低くして二人に警告する。

「ど、どうしたの？ ラン」

ハーブは、ここがランにならって身を低くする場であると気付かずに、キョロキョロと辺りを見渡す。

「ハーブ、そこは伏せるべきだろう？」

シアンが苦笑い気味に嫌味を言う。瞬間、ハーブが飛びあがった。「キャア！ つ、蔓の鞭！」

彼女が悲鳴と共に叩いたのは一匹のピジョットだった。

「み、見つかってしまいましたか……」

すでに無駄だと踏んだのか、ランが身を起こす。シアンもそれに倣う。

「しょうがないな……気合い珠！」

シアンが両掌を向かい合わせると、そこに橙色のエネルギー弾が現れた。それを放つ。だが、ピシヨットは風起こしで気合い珠を跳ね返した。

「し、しまっ」

気合い珠は三人の足元で爆発を起こす。一番足もとの悪い所に立っていたシアンが、宙に放りだされた。

「わあああああ……」

彼は、そのまま崖の下に落ちていく。

「シアン！」

ハーブが蔓の鞭を伸ばしたが、届かない。シアンの叫びは、徐々に小さくなっていき、やがて消えた。

「……」

「あ、あの……大丈夫ですか？」

空の頂きの岩道で、一人のシェイミがリオルに話しかけている。

そのリオルの名はシアン。

「お、起きて下さい」

シェイミはシアンの体をゆさゆさと揺らす。すると、今まで死んだように動かなかったシアンから反応がでた。

「う、うーん……」

眩くような呻き声。そして、目を開けると一瞬で跳ね起きた。

「ひゃっ!？」

「ぼ、僕は何を……そっか、気合い珠に当たって崖から落ちたんだっけ……」

「崖から落ちたんですか!？」

シェイミはまさかの話に、語調を強める。シアンは、ようやくそのシェイミに気付いたらしく、その方を向いた。

「僕を起こしてくれたのは、君？」

「あ、はい」

「そっか……」

シアンは少し困ったような表情を見せると、シェイミの方を向いた。

「ここが何処か分かるかな？」

シアンが、この山の頂上まで登りたいという旨を付け加えると、シェイミは急に背中を向いた。

「えと……すみません。口ではうまく説明できませんので、私に……」

着いてきて下さい、と言いたかったのだろうが、最後の方はモゴモゴして聞いて聞き取れなかった。相当シャイなようだ。

「有難う。名前を聞いてもいいかな」

「……イナ……です」

「アイナ？」

シェイミは違うように言ったのだが、シアンには、シェイミがアイナと言ったようにしか聞こえなかった。

「い、いえ。そうじゃなくて……」

「よろしくね、アイナ。僕はシアン」

アイナは弁解すらも出来ず、名前を間違っただけで認識されたままシアンの案内役をする羽目になった。

(む、むう……里の皆とはうまくやっていたのに……)

アイナは口を尖らせて内心でボソボソと何やら言っていた。

(でも、このポケモンさん、どうも案内役とはぐれたっぽいよね？
だったら私の子が見つかるまで案内役をしないと……)

アイナはそう思って、何か話題が無いか、と思考を巡らせ始めた。そして思いついた話題がコレ。

「あ……あの、シアン、さん……」

「ん、どうかした？ アイナ」

アイナは既に自分にかけてられた誤解を解くのは不可能だと感じたのか、名前の間違いを正しはしなかった。

「空の贈り物、とか御存知……ですか？」

その問に対し、帰ってきたものは随分とぞんざいだった。
「知らないよ」

アイナのシアンに対する初見のイメージは優しい繊細な美少年、
という感じだったが、案外無愛想な性格なのだろう。

「……何？ このダンジョンの名物とかかな？」

「ええと……似て非なるものです。箱の形状をしているんですが、
拾った方が開けても空っぽなんです」

「それじゃ意味無いよね？」

シアンが呆れたような口調で相槌を打つ。アイナは少し尻込みな
がら続けた。

「でも、拾ったポケモンが善意を以って他のポケモンに贈ると、そ
こから何かが出てくるんだそうです」

アイナは「大事なものは、感謝の気持ちなんです」と付け加えた。

「……良い物だね」

シアンが嬉しげにボソリと呟いた。

そうこうしているうちに五合目に辿りついたようだ。

「あ、あれ？ なんか様子が変だな……」

シアンが、五合目の様子を見るなり、違和感を口にする。アイナ
はつられて、シアンと同じ場所を見る。

普通なら、ここはガルーラの像やリフトなど、様々な施設がある
筈のだがそれらが見当たらない。それだけでなく、遠くから喧騒
が聞こえる。

「あ……」

シアンはその喧騒の方向を見て、急に間の抜けた声をあげる。

「おう teme e……^{ポケモン}人の縄張りに入っというて、御免の一言もなしかよ
お？」

五人程のポケモンが、一匹のポケモンに絡んでいた。

絡んでいる方は蔓のような腕に万力をも思わせる大きな黄緑色の

顎。マスキッパというポケモンだ。

絡まれている方は黒い中に所々混じる紅蓮の毛。そして、断頭台の刃のような鍵爪。既視感を覚える。というか、恨みで忘れきれない。

「ニューラか……フン、あんな連中に囲まれて、いい気味だ」

その光景を見ながら呟くも、集団で纏まらなさと強くなれないマスキッパ達に挑発の念を送り続けたいシアンであった。

11話 最高峰に登る途上 ? 引き裂かれた者達 (後書き)

シアン

「なんか……グダグダで分かりにく……」

ごめん。最近休む暇なくてさあ。かなり集中力削がれた中で執筆してるから……

12話 最高峰に登る途上 ? 〱身勝手な巡回者達〱 (前書き)

今回、ハーブとランは全くと言って良いほど出ませんWWW

ハ・ラ

「「え？」」

シアンとアイナを中心に考えてるから。

ハーブ

「ちよつと……」

ラン

「作者さんで、オムニバス形式よく使いますよね……」

まあ、ね……同時進行とか今の私の実力じゃ無理だから

12話 最高峰に登る途上 ? 身勝手な巡回者達

「あいつら……」

シアンはマスキツパを卑怯だと思った。だが、戦闘を仕掛けたところでニューラは逃げ出してしまっただろうし、アイナは正直役に立つかどうか分からない。

つまり、最悪一人で五人を相手にする必要があるのだ。しかも格段に有利とか力が強い、というアドバンテージもなく。

しかし、山頂へ続く道は彼等の後ろに控えている。やはりマスキツパ達はどうかする必要があるだろう。シアンがどうマスキツパを料理しようか考えていると、不意に後ろからあどけない声を浴びせられた。

「シアンさん？ どうしたんですか？」

「何やってんだオメーよお。間抜けみたいにつっ立ってるぜえ」

後ろを向くと、そこに立っていたのはチップとゼアン。そして、クチート、キノガッサ、ゴリキーの見知らぬ集まりだった。

「チップにゼアンさん……後ろの三人は？」

「え、探検隊、“フロンティア”の方々……ですよね……？」

シアンの間に、アイナがフロンティアの代わりにボソボソと答える。

「ふろんていあ？」

この場でそのチームを知らないのは、無論シアン一人のみである。チップとゼアンが立て続けに説明を加える。

「御前フロンティア知らねーのか？ あいつら、この山までの道を開拓して」

「何と言っても、その実力が凄いですよ。中堅のダンジョンにいるポケモン程度なら軽く」

「んで、パッチールに雇われてこの道開拓したんだと」

「あのちよっと、同時に喋られても困るから」

シアンが困り果てて二人を制止する。フロンティアの三人も、チップとゼアンのはっちゃけぶりに少し失笑している。

キノガツサがマスクッパ達に目配せをした。

「で……五合目まで来てみりゃ、なんだコイツら？」

「あ、……あの方達は」

アイナが何か言いかけたが、ボソボソとしか喋らないので誰もそれに気付かず、止まろうとしない。

「ちよつとアンタ達！ 大勢で寄ってたかって、卑怯じゃないかい！？ 今度は私達が相手になるよっ」

キノガツサが威勢のよい美声を轟かす。マスクッパとニユーラが後ろを向いた。

「ああん？ 何だテメエら？」

「コイツが俺達の宝を盗ったんだよ。大勢だなんて関係ないじゃないか」

マスクッパ達はそう言うなり、シアン達に突っかかってきた。

「うわわ……」

「殺されてえのか？ 柄の悪い奴等じゃねえか。ヒツヒツヒ」

チップが後退り、ゼアンが肉薄的に笑う。もつとも、ゼアンの「柄の悪い奴等」というのは彼自身にも当てはまるが。

「ちよ、や、やめ……」

場の状況を見たアイナがオロオロしながら割って入ろうとしたが、ボソボソとしか喋らないので、どちらも止まる気配を見せない。

「チャンス……！」

ニユーラは、マスクッパの注目が自分から外れた瞬間、山頂の方へ逃げ出していた。シアンはそれを見ていたが、今は特段咎める気も無い。

「二分……」

「あ？ 何だ？」

彼がボソリと呟いたのを一人のマスクッパが聴きとめる。シアンは冷ややかな目でこう告げた。

「二分あれば、それで十分。貴方達を泣かせられます」
ブチリ

マスキッパ達のこめかみから、鈍い断裂音が聞こえた。

「テメエ！ ぶつ殺す！」

マスキッパの一人が、大口を開けて襲いかかってきた。シアンはしゃがんでかわすと上に蹴りあげる。

「グボツ！」

彼の足に変な感覚が走った。

「ヒヤアツハツハツハアー！ 壊すぜ殺すぜぶつ飛ばすぜえーッ！
！！」

「10万ボルト！！！」

ゼアンがマスキッパをタコ殴りにしながら奇声をあげている。

チップは電気技を放ったが、相性の関係からあまり効果はなかった。

拳で敵を殴り飛ばしたシアンが、気合い珠を打とうと手を振りかざした。その瞬間

「や、止めて下さいっ！！！」

突然、甲高い声その行動を遮った。彼の心臓は、一打ち撥ねた。
「……………」

シアンは苛立ちの感情を籠めた目で、先程の声の主のアイナを睨めつける。アイナはその視線にビビりまくって、縮こまっていた。

その姿を見たマスキッパが声をあげる。「おおー、シエイミじゃねえか！ 久しぶりだなあ」

シアン、ゼアン、チップ、チームフロンティアの皆が目丸くする。咄嗟にシアンが話を振る。

「アイナ、知り合いか？」

アイナは、さっきのシアンの目がまだ瞼の裏にこびり付いているのか、彼を何処となく敬遠した様子で返事する。

「は、はい。この辺を縄張りに行っている方々です……………根は良いんですが、ちよっと素行が悪くて……………」

「お、おいおい。つれねえじゃん。俺たちやあの宝泥棒をとつちめようとしただけだぜ？」

アイナのあまりな言い方にマスクッパの一人がしょんぼりと肩を落として言う。シアン達からすれば、自業自得だ。

「はあ……とんでも無い馬鹿ですね。シェイミに叱られて、終いにはその宝泥棒を逃がすなんて」

「そ、そんなこと言ったって……ん？ 逃がす？」

目を丸くしたマスクッパにシアンは更に告げる。

「ニューラのクソ野郎なら、さっきどさくさに紛れて逃げて行きましたよ」

「なっ!？」

マスクッパ達は、シアンの指した方向を見て、素っ頓狂な声をあげる。だが、時すでに遅し。

ニューラの背中中は遙か彼方にあつた。

「あ、あの野郎オオオ!!」

マスクッパ達は悔しがって蔓のような腕で地面をぺしぺし叩く

「まあ……仕方ねえな」

やがて肩を落として立ち上がると、シアン達の方に向き直った。

「あー……ゴメンな、お前ら。シェイミも」

シアンだけ、氷雪のような瞳で彼等を見つめていたが、他の皆はもう彼等を受け入れたらしい。

「いやいや、私達こそ勝手に攻撃仕掛けちゃって、悪かった。これからは気をつけるよ」

「ああ。頼むな」

マスクッパ達はこう言い残して、その場から去った。

「さて……俺達も早く行かないとな」

5合目のど真ん中で、残された者達の一人のゴーリキーが呟く。

「そうだね。なら私達はもう行くよ。向こうで基地作っておくからクチートがそう言っつてフロンティアの皆を従えて行った。

「俺達もさっさといくしかねえな」

「うん。ここにいっても仕方ないしね」

ゼアンとチップも山頂に向かいだした。

「……あ、シ、シアンさん、私達も行きましょう」

アイナが先程のシアンの目を思い出しながらおそおそと言いつ。すると彼は

「そうだな。よく考えればハーブ達も探さない」と

と言いつて歩き出した。

12話 最高峰に登る途上 ? ～身勝手な巡回者達～ (後書き)

ただいま、とある小説にてエメラルドの一周年の記念のイベントの募集をしております。

その小説のURLを貼っておくので、是非おいで下さいますようお願いいたします。

<http://ncode.syosetu.com/n44444u/>

シアン

「宣伝かよ(汗)」

13話 最高峰に登る途上 ? く忍びよる闇の象徴 (前書き)

13話、書き上げました……眠い、寝よう。

13話 最高峰に登る途上 ? 忍びよる闇の象徴

「アイナ、山頂まではどれくらい?」

五合目を登り始めてちよつと経つてから、シアンは彼の前を歩いているアイナに尋ねた。やはり、山の案内役とあつてか登山に関してはシアンより達者だった。

「そうですね……今半分を過ぎた頃ですから、シアンさんが登り始めてからの道のりがもう一回繞り回って考えられると良いです」

そう答えると、シアンは嫌そうに顔を歪めてみせた。だが、への字に曲がった口からは弱音の一言もでない。

「そうか……でも、その前にハーブ達と合流する必要があるな」

シアンは、山頂に着くまでには合流したいという思いを少し口にした。その声は、アイナの耳にしつかり響いていた。

「あーもう、シアン何処に行ったの……!!」

ハーブとランはつい先ほど、シアンを探すのを諦め登山を再開していた。

「登っていればそのうちひょっこり出てくるかもしれませんよ?」

ランがおっとり口調で言うのを見て、ハーブの焦りもいくらか鎮まった。

「そつだと良いんだけど……」

だが、彼女はそのまますつとした表情で黙り込んでしまった。

突然、ヴォキヤブラリーが欠如した雰囲気、ランは対処しきれず、とりあえず話題を探した。

「あ、あの……シアンさんとはいつあつたんですか?」

すると、ムスツとした表情は消え、口元には微笑みすら浮かべかけていた。

「えっと……2年前だったかな。私がまだ、とんでもない臆病者だった頃だよ」

「臆病者？」

ランはその言葉の信憑性を疑った。郷に来てからのハーブのイメージは、クールで聡明で、探検もバトルも何でもこなすしっかり者だと思っていた。でも、実際には違う。それどころか、頭は悪く、臆病で少しも戦うことが出来なかった。それは彼女自身の主観でもあり、他の者からハーブを見た時の印象であった。

「うん。シアンと会ってから、だいぶ改正はされたんじゃないかな、って思うけどね」

その言葉は、ランの胸を突いた。

シアンとハーブ。それは互いに惹き合い、求めあう存在なのだ。この時から、ランはシアンに抱く想いが邪恋であると思いはじめていた。「でも、たまに思うの。彼がいると、どうしても自分に甘えが生じてしまうって。私は、一年前からまた一人で生き始めた。でも、一人で生きていると、どうしても二年前のあの頃に戻ってしまったの」

ずっと、二人一緒にいたから、一人のとき、耐えられないほど悲しかった。

ハーブの瞳は、そう物語っているように見えた。

「そう、だったんですね……」

ランはそう言ったとき、目を伏せてしまっていた。だが、ずっと瞳の角度をあげて言った。

「さ、五合目です。あと半分ですよ」

「まだ半分しか行ってないのね……」

この瞬間、ランとハーブのテンションは、空の頂きの頂上と麓よりも大きな差があった。

「あ、あれ？ 無い……」

先程、数匹の敵がシアンのところに襲いかかってきた。さつさと追
い払い、一旦一息ついてバッグの中を開けてみた。

「どうしました？」

急に呆けた声を出すシアンに、アイナが尋ねる。

「いや、さつき綺麗な箱を拾ったからさ、とっておこうと思ってバ
ッグの中に入れてたんだけど……」

「失くしちゃったんですか？」

シアンの最後の言葉をアイナが代弁する。彼の言う、“綺麗な箱”
というのがなんなのかは見当がついていた。

「ああ……」

「そうですね……一旦戻って探してみますか？」

アイナが出した提案に、シアンは暫し考え込んでいたが、やがてこ
う言った。

「戻っても、迷惑はかからないよね？」

「ええ、全く」

「じゃあ、ちょっと今来た道を引き返すよ」

シアンはそう言うが早いか、踵を返した。アイナが後から慌てて追
いかけてくる。

「五合目はすぐそこだったよね……」

「シアンさん！」

アイナが絶叫をあげる。シアンが何事かと思つて振り向くと、アイ
ナは傍らでぶるぶると震えていた。シアンの瞳は急に虚ろになり、
彼女の振動の元となつている者達を見た。彼等は紅い顎と銀色の角
を黒い体に生やしたポケモン、デルビル。そしてヘルガー。

「ラン、今はどこら辺？」

ランはこの類の質問を十回程受けた。登り始めた時はやる気満々だ
ったあのツラは何処行つたんですかと逆に訊きたくなつたが、元来
そんなことをする性格でもないのでやめておいた。

「ええと……もうすぐ五合目、という辺りです」

「じゃあ、もうあと半分ね」

ハープがパツと顔を輝かせる。そこは“まだあと半分もある”という言い方が普通だろうが、そこに気付くハープではない。

「えっと……さっき、五合目で戦闘が起こりかけたって情報が入りましたので、注意してくださいね」

「分かったわ。心配しないで」

ハープは自信ありげにそう言ったが、ランはそう言いながら不意を突かれて深手を負ったシェイミを何人も見ているので安心はできなかった。そしてそれは、今回も然りであった

「ハープさん、危ない！」

ランが叫ぶ瞬間、ハープの時間が一瞬だけ止まった。それからさつと振り返ると、ランにあのような声を出させたポケモンを認める。

灰色の体に黄色の瞳。鋭い牙を持ったそのポケモン達の名前はポチエナ、グラエナ。

13話 最高峰に登る途上 ? く忍びよる闇の象徴 (後書き)

来月13日は、私エメラルド「スターダストが「小説家になろう」にユーザ登録した日です。

ただいま、とある小説にてエメラルドの一周年の記念のイベントの募集をしております。

その小説のURLを貼っておくので、是非おいで下さいますようお願いいたします。

<http://ncode.syosetu.com/n44444u/>

14話 最高峰に登る途上 ? 〳合流と鋭利な機転〵 (前書き)

数話程前の、ランの姉のこと、覚えていますか? 忘れてしまわれた方多いんじゃないでしょうかw

シアン

「いや、なんていい加減な(汗)」

まあそう言うナイ。最後に登場します。期待裏切りまくりの展開か
もしれませんがw

シアン

「それでは、14話目開始です」

14話 最高峰に登る途上 ? 合流と鋭利な機転

『逃げろっ!』

意思が疎通し合っているわけでもないのに、別々の場所にいるシアンとハーブが同時に叫び合う。アイナとランは、それぞれに手をとられ、シアンとアイナは五合目に向かって下り、ハーブとランは五合目までもうダッシュで駆けあがろうとしていた。

「シ、シアンさん! このままじゃ追いつかれます!」

アイナは後ろのヘルガーが迫ってきているのを見て珍しく大きな声をあげる。

「その位分かつてるっ! でも、積極的に戦いたくはないし、かと言って良い案も見つから」

ない、と言いかけたところでシアンの足が、足元の石に引っ掛かった。何が起こったか考える間もなく、シアンの背筋を嫌な汗が滑り落ちた。

「う、わあああああっ!」

タガが外れたタイヤのように、シアンとアイナはゴロゴロと山道を転がり落ちていく。

「ハーブ、さん、もう、少し、遅く走って、頂けます、か、?」

ランは、ハーブが彼女を蔓の鞭で掴んで闇雲に走る為にブンブンと振りまわされていた。

「な、何言ってるの! 追いつかれちゃうじゃないいいいい!」

ハーブは少し涙目で、錯乱しながら答える。こんな走っているのに、よくここまで喚けるもんだ、とランは別の意味で感心した。

「それより何で襲ってくるのアイツら!」

「多分、縄張りを侵されたと思ったんです　　ん？」
その時、ガチンガチンと妙な音が聞こえた。後を振りかえると

「きゃああああ！？　ハーブさん、もつと速く走って下さいっ！」
ポチエナが、自分の直後5cmで噛みつきを連打していた。それを見たランも、ハーブ以上に錯乱し始める。

「りゅおーかいいい#\$%&¥!!!」
ハーブの最後の言葉は、もはやポケモンの域を越していた。

「く、そつ！　瓦割り！」

予想通り、というか、遂に追いつかれたシアンとアイナ。シアンは拳を技を当てて、デルビルを牽制する。そして、五合目へまた猛ダッシュを始める。アイナもそれについていく。

「宿り木の種！」
アイナが投げつけた種は、一瞬にして成長して草の壁を作った。
「ナイス！」

シアンはそう叫んだが、同時に後ろからパチパチ、と草を焼き払うような音が聞こえたのも事実だ。

「だ、大丈夫なんでしょうか！？」
「まずいかな……！！！」

そう言っただけを振り返った瞬間、シアンの体は大きく吹っ飛んだ。書きまわされる視界の中に、緑色の物体が映った。そして、聞こえてくる声。

「邪魔よー！」

「後ろ、どう!?　ランー!!」

五合目を過ぎて、ハーブはいくらか落ち着きを取り戻した。

「あ、あと30cmってところですよ」

ランの方はいつ襲われるか、という不安から声が震えている。

「ラン、もし危なかったら、攻撃して良いのよ？」

「もし触発しちゃったらどうすんですか!？」

ハーブの提案を、ランは即座に切る。ハーブは既にその提案のとすら忘れていたが。

その時、前方から何かが迫ってくるのが見えた。緑と白の小さな物体と、群青色の、細長い物体。青い方は彼女達の進路を阻む場所にいたので、ハーブは、それが何か確認することもなく、群青色の細長い物体を蔓の鞭で弾き飛ばした。

「邪魔よ!」

直後、なかなかいきり立っているヘルガーと目があった。

「……………グルルルル」

「……………あ、あはは」

「ハーブさん、おろして下さい」

ヤクザのような連中に睨まれていて、ランが平気そうな顔をしているのは、彼女が後を向いた状態でハーブに掴まれているために今の自分の状態が分かっていないためだ。その要望が伝わったのか否か、ハーブは蔓の鞭を緩めてランを放した。

「ふう……………きゃあ!？」

ランは自分がおかれた状況を見て悲鳴をあげる。

「ハーブ、今僕を突き飛ばしたのは君？」

後ろから、聞きなれた声が聞こえてくる。

「シ、シアン!？」

思わず振り返った瞬間、シアンと、
一番いて欲しくない、
グラエナ、ポチエナというポケモンのオンパレードが見えた。

「全く、僕を突き飛ばした拳句、余計な奴等まで引っ提げて来るなんて、どういっつもりだい？ 仕事が増えたじゃないか」

こちらこそ、合流して早々、相方の愚痴を聞かされることになると思ってもみなかった。そう言っただけでやりたいが、前からはヘルガー、デルビル、後ろからはグラエナ、ポチエナの凶器隊が迫ってき

ているので、無駄口は叩いてもらえない。

「さっさと片付けるしか無くなったな……ラン、アイナ。準備は良い？」

「は、はい。 え？」

「ちよ、ちよっとシアンさん」

ランとアイナが互いを見て、素っ頓狂な声をあげたが、お互い言いたいことが言い終わらないまま戦闘が始まった。

「水平斬り！」

シアンの右手から青い閃光が伸び出て、それが一閃、ポチエナ達を傷つける。

「原始の力！」

ハーブの飛ばした光の塊がデルビル達に襲いかかる。

「負けるなあ！ 悪の波動」

それぞれの頭領と思しきヘルガーとグラエナが、それぞれ、黒い塊の波を飛ばす。

『エナジーボール！』

ランとアイナが、深緑の珠でそれを相殺する。

シアンとハーブは背中合わせに近寄った。

「ダイクネビュラ 暗黒星雲・ギャラクシー 銀河！」

そして、シアンがシャドークローの力を籠めて銀の針を投げつける。闇のオーラは銀河のような形をとりながら回転し、ポチエナ達を薙ぎ倒していった。

「火炎放射！」

デルビルの一人が炎技を放ったが、ハーブは光の壁でそれを防いだ。

「おい、グラエナ共！ コイツらは俺達の領土の侵犯だ！ 邪魔すんじゃないええ！！」

デルビル達の頭領が、グラエナ達に気付いたのか、彼等に向けて叫んだ。それに対し、グラエナも叫びかける。

「違う！ コイツらは俺達の縄張りに侵入したんだ！ 俺達が片付

ける！」

「いや、俺達だ！」「俺たちだ！」

そんな言い合いが続いている間、シアンは両方が膠着状態になっていて、動いていないことに気付いた。

このポケモン達、話は通じるんじゃない？

そう思ったシアンは、かけてみることにした。

「違う！ 僕は領土侵犯じゃない！」

その凜とした声が響き渡り、グラエナとヘルガーを黙らせた。

「僕は、ただの冒険者だ。貴方達の縄張りを侵そうとか、そんなことは微塵も考えていない」

「……………」

両者とも、考え込んでいて何も言わない。

「この山の頂上まで登り詰めたら、僕はすぐ退却する。だからここは黙って見逃してもらえないだろうか」

シアンの様子に、何も変わったところは見られない。だが威圧感が異常に強い。ランとアイナはおろか、ハープまで圧倒されてしまっている。だが……

「……………証拠はあるか？」

「な……………」

勝ちを確信していたシアン表情が、グラエナの言葉を聞いて急に焦りを帯びる。だが、アイナとランがそれをカバーした。

「証拠は、私達です」

そう言って、ランが前に進み出る。

「……………シェイミ？」

ヘルガーが呟く。

「はい。私が案内をするのは、どういう方が知っていますよね？」
アイナの確認がグラエナとヘルガーの表情から感情が消える。

「……………」

心清き登山者。その答は、この山に住む者として、暗黙の了解らしい。ヘルガーもグラエナも、シアン達を信用したらしく、部下を

引き連れて帰っていった。

「……た、助かったあ〜！」

ハープが、ホツと安堵のため息をついて地面に崩れる。シアンがアイナとランを見て微笑んだ。

「有難う。君達のお陰で助かったよ」

「いえ、き、気にしないで下さい……」

「登山者が安心して山を登れるようにするのが、私達の仕事ですから……で、」

ランは爽やかに微笑むと、急にアイナを睨んだ。

アイナも、顔を強張らせてランを見つめる。

「ラン、ここで何やってるの？ ボクの目の前に出た時は驚いたよ？」

ボ、ボク!?

シアンが、アイナの一人称が変わったと気付いた瞬間にランが叫んだ。

「それは私の台詞よ！ ハイネス姉さん！」

14話 最高峰に登る途上 ? 合流と鋭利な機転 (後書き)

シアン

「……………エ？」

はいこれ以上詮索禁止。

ハーブ

「ラ、ラン、今あの子みてハイネスって……………」

シアン

「いやいや、アイナって名乗ってたよ？ それに一人称がいきなりボクに変わって……………どういうこと？」

ラ・ア

『えーと、それは……………(強制終了)』

詮索禁止だつて。では、次回をお待ち下さい。

15話 最高峰に登る途上 ? 〽倒れていた好敵手〽 (前書き)

更新です。

シアン

「遅いよ。前の更新から一週間経ってます」

いや、やっぱりローテーションだから……順番変えよっかな？

15話 最高峰に登る途上 ? 〽倒れていた好敵手〽

「ハイネス、つて……どういうことだ？」

シアンは、ランが叫んだ瞬間に自分の耳を疑った。さつきアイナと名乗っていたシェイミはハイネスと呼ばれ、彼女自身もそれを認めているようだった。

ハイネスは、彼の方を見ると、急におどとした様子で

「えつと……私は、アイナじゃなくて、ハイネス、です……。シアンさんの聞き違いなんですよ。そ、それから、私、初対面の方だったら気が小さくなってしまふみたいで……」

「えつ……」

シアンの理解は徐々に追いついてきた。ハイネス。アイナ。二つとも、語呂ゴロが似ている。彼女は、内気気味で、ボソボソとしか喋らない。ランに、ハイネスは明るい性格じゃなかったのか、と問いただそうとしたが、初対面相手に性格が変わるのもよくある話だ。

「……そういうことか」

ハープは状況の一部しか知らないので、シアンと一緒に行動していたシェイミがハイネスという名前であることしか理解できなかった。

「姉さん……なんで急にいなくなっちゃったりしたの？」

ランが、心配していた証拠である、八の字に歪まゆんだ眉を見せながらハイネスに尋ねる。ハイネスは、苦しげな表情で慟哭どくのように叫ぶ。

「だって……！ い、いきなり知らないポケモン達がぞろぞろ郷さとに来て……それで、顔なんて合わせられなくて……それなのに、郷にいられるわけじゃないか！」

シアンとハープは顔を見合わせて、同時にハイネスを見て、沈痛な面持ちになった。

今回、空の頂きへの開拓が成功したのは輝かしいパッチール達の

実績だと思った。だが、その裏で、苦しんでいる者だって、少なからずはいるのだ。ハーブは、それで喜んでばかりいた自分を責めた。自分のことしか考えないのに、何が世界を救った探検隊だ。そこから悪事を働くお尋ね者と何ら変わらないではないか。シアンは一つ、大きなため息を吐くとハイネスに向き直った。

「古くからの知り合いじゃないと、饒舌じょうぜつに喋れない、というのは変えたくないかな？」

「か、変えるだなんて……そんなこと、私には無理です……」

ハイネスは縮こまって、顔を伏せた。シアンは、困ったというように頭を掻き毟むしつたが、彼女の顔を起こすのは不可能とみて、そのまま言葉を紡いだ。

「変えたら、今みたいに逃げずに済むようになる。自分を救ってくれる人は、自分が逃げずに向き合ったときに、始めて姿を現してくれるんだ」

ハイネスは、そんなことはできない、と言うように、伏せた顔を思いつきり悲哀に歪めた。その表情を、見ずに察知したのか、はたまた偶然か、次のシアンの言葉は彼女の心に強い響振を与えた。

「でも、あの時崖から落ちた僕を起こしたとき、変わり始めていたのかな……」

ハイネスの顔が自然と上がる。暫く、口をパクパクさせていた彼女は、やがて必至に声を絞り出した。

「わ……私、いやボクも、頂上まで一緒に行つていいですか」

「勿論さ。ね？ ハーブ」

「うん。一緒に頑張ろう、えっと……アイナ」

「アイナじゃなくてハイネスです」

ハイネスに突っこまれるハーブを見て、大丈夫か、と心配になるシアンであった。

「さ、ラン、早く行こう」

「あ、はい。六合目はもうすぐですよ。頑張りましょう！」

ランは晴れやかな笑顔で皆を励ました。

六合目にも、チーム：フロンティアは基地を作っていた。だが、チームメンバーのゴリキーによると、この先からは積雪の影響で基地を作るのは困難であるらしい。

「すまないね。私達も頑張ってみたんだけど……七合目はガルーラ像を設置するのが精一杯だった」

キノガツサがペコリ、と頭を下げる。その横にゴリキーがいるが、チームリーダーのクチートがいない。

「いえ、良いんですよ。それだけでも助かりますし」

シアンは愛想笑いを浮かべて彼を弁護する。その時だった、ザクツ、ザクツ、ザクツ、という、雪を踏みしめるような音が聞こえてきたのは。

「た、大変だよ！」

シアンとハイネスにとつては聞き覚えのある声。クチートである。

「あのポケモンは？」

「チーム：フロンティアの方なんですか？」

彼等に会っていないハーブとランが疑問顔をする。シアンは、肯定の返事を短く返して、急に真剣な面持ちになった。クチートの口調から見ても、表情からみても、彼女のそれは一流の探検隊の落ち着いたリーダーのものとは明らかに異なっている。

「どうしました？」

シアンの声も、当然厳しくなる。

「せ、説明は後だよ！ 早く七合目まで来てくれ！」

クチートの男勝りな声に急かされて、チーム：ブライト、フロンティア、そして二人のシェイミは足を踏み出した。

七合目に到達するまでの道のりは、今までのような硬い地面で敷き詰められてはおらず、高く積もった雪に覆われていた。

少し前まで吹雪が吹き荒れていたらしく、寒く、凍えてしまいそ

うで、更に降り積もった雪も深く、足をとられてしまい、ここまで到達した者がいるのかシアンは不明になったが、恐らく、到達した者はいたのだろう。クチートが血相を変えて走ってきたのがそれを物語っている。また、途中に出てくるポケモンも手強いものとなっており、進むのに苦勞を強いられた。

「何が起こっているんだ……」

目の前に転がっていた、半径だけでも十メートルはありそうな雪玉を爆裂の種を数発投げることで無数の氷雪の欠片に変え、更に突き進んでいくこと数分、

「見えた！ 七合目だ！」

急にダンジョンを抜けた。前方に見えた、黒い物体。それは、ニユーラというポケモンに見え、雪の上に倒れているようだった。

15話 最高峰に登る途上 ? 〽倒れていた好敵手〽 (後書き)

シアン

「え； ニューラ倒れてるしWWW」

え、そこ笑いながら言っただ(汗)

ハイネス

「ボクのことがかかってよかったよ」

ラン

「姉さん……(汗) 皆に迷惑かけたのに……」

それではっ

16話 最高峰に登る途上 ? 〳立ちはだかる樹氷〵 (前書き)

更新です。

シアン

「え、嘘。更新が早い……やばい、明日嵐と雪が同時に来る！」

失礼な。私だって更新の早いときくらい……あるといいなあ

シアン

「え、願望形に変わった(汗)」

16話 最高峰に登る途上 ? 〳立ちはだかる樹氷〵

シアンは目を見開いた。あんなに大胆に啖呵を切っていたニューラが、ここまで早くやられようとは思っても寄らなかった。

「ニューラー!!」

「アンタ! 大丈夫かい!？」

シアンとクチートが焦りを帯びた足取りでニューラに走り寄る。傍に近づいて、彼を見てみると、その胸の辺りが規則正しく上下しているのが見てとれた。

「よかった……息はしているな」

だが、体の所々に、ニューラの黒い体でも分かるような痣や、傷が見え、決して安全な状態でないことも容易に推測できる。

「一体、どうしたんだ……」

「恐らく、この傷から見てこの付近を縄張りとしているユキカブリ達に襲われたんだと思います。ボク達でも、下手をすれば攻撃されるので……」

冷静な推測をハイネスが述べる。

「とにかく、このままじゃ危険だ! シエイミ達、ここから最短距離で暖をとれる場所はないか?」

ゴリキーが剣幕を暗く、指示を出す。その様子に、ハイネスは怯えきってしまった。代わりに、誰相手でも上手に振舞えるランが応じた。

「そうですね……この一つ上の八合目……そこにデンリユウというポケモンが住んでいるんです。あの方ならあるいは……」

「なら、そこまでコイツを運んでいくぞ! お前達は、ユキカブリ達が現れた時の為に整えておいてくれ!」

ゴリキーがチーム：ブライトに的確に指示を出す。次の瞬間、彼は自身の身長的一半はあろうかというニューラを担ぎあげ、八合目へ続く道に足を踏み入れていた。後からキノガッサとクチートが

二ユーラを支える。

「僕達も、行こうか」

シアンが強張った面持ちで言うと、ハーブも、ランもハイネスも頷いた。

いっどこから襲ってくるか分からないユキカブリの群れは、シアン達にとって脅威だった。だが、それと同じく、七合目から八合目に至るまでの道に潜むポケモン達も手強かった。

「瓦割り！」

「マジカルリーフ！」

シアンがオコリザルに拳を浴びせ、強力な跳躍力を使って、跳び上がる。

怒りのやり場を見失ったオコリザルに、ハーブの必中の葉がシヨートした。マジカルリーフ

「よし、良いぞ！」

それを前方から肩越しに見るゴリキーが叫ぶ。シアン達は、先を行っていた彼等にすぐに追いついた。

「このまま、何も起こらず八合目に到達できりゃ良いんですけどね」

『そうはいくか』

シアンが倦怠気味に呟いた瞬間、低い険しい声が七人の耳を突いた。

「だ、誰!？」

ハーブが声の主に叫びかける。だが、声の主が何処にいるのかすら分からない。

「まさか……ユキカブリ!？」

『我等の縄張りに侵入して、ただで済むと思うな』

ユキカブリ、とシアンに推測された者は、その問には答えず言葉を続ける。道の周囲から、十数匹程のポケモンが飛び出て来た。白い円柱体に、円錐体。ユキカブリと呼ばれる種族だ。

「しまった、逃げ」

「ま、待って下さ」

チーム：フロンティアは戦いを避けようと、八合目に向けて逃げ出そうとしたが、そのすぐ目の前に、大きな塊が落ちてきた。ユキカブリを三回り程大きくした巨体。彼等の進化系のユキノオーである。

「ぐわあ!?!」

「わあ!」

「きゃあ!」

フロンティアの三人共が衝撃に吹き飛ばされる。思わずニューラを取り落としてしまいそうになった。だが、シアンが無意識的に飛び出していた。おぶるような形で、彼を背中に受け止める。そのまま滑ると、ユキカブリとユキノオーが為す円陣の中から出ていた。

「邪魔よっ!」

ハープが二本の蔓の鞭でランとハイネスを強引に引っ掴み、ユキノオーに原始の力を放つ。

「うぬっ……」

原始の力は直撃こそしなかったものの、ユキノオーを怯ませることはできた。

「危なかった……」

ハープは、円陣を抜け出てシアンの所へでた。

これで、ゴリキー達がユキノオー・ユキカブリの円陣に囲まれ、シアン達がニューラを背負い、八合目まで到達できる状況になった。「クチートさん、僕達がニューラを八合目まで連れて行きます。なので、貴方達はユキノオーが僕達を追えないよう食い止めていて貰えますか」

クチートは、頷くだけの返事をした。シアンも、それに頷いて返すと、八合目へ足を向ける。ハープが、シアンの負担にならないようにニューラを蔓の鞭で支える。

だが、勿論それをユキノオーが見逃す筈がない。

「逃がすな、追え!」

彼が命令を飛ばし、二人のユキカブリが円を外れシアン達を追い出した。

「ラン、ハイネス、やっちゃって！」

「えっ……」

冒険者の案内のみで、戦いには全くの素人の二人はハーブの指示に戸惑った。とりあえず何か技でも出そう、と考察していたが、ユキカブリ達が円陣を外れた瞬間に、その必要はなくなった。

何故なら、道の右手からは電撃が。左手からは流れ星のように速い弾丸が飛んできたからだ。

「だ、大丈夫!？」

「ヒヤッハツハア！ 面白そーなことやってんじゃねえか！！ 俺も混ぜろやあー！！」

電撃の元はチップ。弾丸（石）の元はゼアンだった。

「チップにゼアンさん！ そいつらを引き留めて！ 一人たりとも逃がさないで！」

シアンはそう叫ぶと駆けだす。ハーブも、それに合わせてニューラを落とさないように走りだした。

「ハアハア……ラン、後、何か見える？」

「いえ、今のところは何も……」

走りだして十数分。ランが振り返って答えた。八合目まで、ざっと二十分。それまで後方で彼等が頑張ってくれば良いのだが……。「大丈夫かな。ゼアンさんだっているんだし」

シアンは、時の歯車争奪戦の際にゼアンと戦って彼の強さを嫌と云うほど思い知っている。いや、あれさえ、彼の本気の十パーセントを満たすかどうか分からないのだ。ユキノオー達が全滅させられることはあれど、彼等が負けることはあるまいと確信していた。

「ヒヤッハツハア！！ いーねえいーねえ！ おめえさん、良いくらいに俺を手こずらせてくれるぜえ！」

巨体にローブを被った人間は、ユキノオーに拳の奔流を叩き込ん

でいた。ユキノオーは何とかその一発一発を薙いでいる。ほぼ、ユキノオーが追い詰められた状態だ。

「いくよっ、スカイアツパー！」

キノガツサがユキカブリを一体殴り上げ、上空に吹き飛ばす。苦手タイプの大技を叩き込んだので、倒せているだろう、と思っただが、落ちてきたユキカブリは痛そうな表情こそしていたものの、平気であるという様子だ。恐らくレベルは互角、若しくはそれ以上だろう。

「放電！」

チップは辺りに電撃を撒き散らして敵の牽制を図る。だが、それではゴリキー達が攻撃できない。

「馬鹿、動けねえだろうが。ったく、メガトンパンチ！」

ゴリキーが放った渾身の一撃は避けられ、更にユキカブリが放った氷の礫を当てられ、拳を凍らされた。

「クソッ！」

ゴリキーは悪態混じりに拳を打ちつけ合わせ、右手の氷を打ち砕く。

「ヒヤッハ！ 加勢するぜえ！」

刹那、ゼアンがゴリキーと対峙していたユキカブリを殴り飛ばした。

「ゼアン、ユキノオーはどうした？」

「まだぶっ殺せてねーんだけどな。おめーら見てたら危なっかしくて、一発当って来んだ」

見ると、ユキノオーはお腹を押さえて蹲っている。

「さあさあ、殺戮はまだここからだ。ぶっ飛んでいこうじゃねえか。ヒヤッハアー……！」

17話 最高峰に登る途上 ? 〳戦いと救出の終り〳 (前書き)

更新です。今回はちょっとグダグダでした；

シアン

「グダグダなんていつものこと」

酷い(涙) その言い方は無いでしょ。

シアン

「それでは、どうぞ(最早無視)」

17話 最高峰に登る途上 ? ー戦いと救出の終了ー

シアンの行く手は、段々雪が少なくなり、地面が剥き出しになっているところも部分的に見られた。

「随分歩きやすくなったな。あとのくらいだ？」

シアンは振りかえらないまま、ランとハynesに尋ねる。

「えと……あと五分ぐらいのところですよ」

「ボ、ボクが行ったときは、ここまでくればあと一息なので、もうちょっとですよ」

ハynesは、舌が回っているのか疑問になる程の早口で答えた。

普段のシアンだったら、微笑ましさに頬が緩んでいただろうが、今は呑気に笑っている暇ではない。

「シアン、大丈夫？ きつかったら変わるわよ」

「いや、大丈夫。それに、あまり時間を浪費できないし」

シアンの様子を気遣ったハーブに、彼は柔らかかにその提案を退けた。

「もうすぐ……あ、見えてきました！ 向こうですよ！」

ランが声をあげた。二人が進行方向を見ると、山の岩肌が露出しているところのある一点に、焚き火と思しき紅の光が燈り、一筋の煙が上がっているのが見えた。山頂の高さと比べてみても、八合目でもおかしくない位置だ。

「あの焚き火……あれがデンリユウの居場所か？」

「は、はい。そこですよ」

「そうか……ハynes、先にデンリユウのところまで行って事情を説明してきてくれ」

「あ、は、はいっ」

ハynesは、答えるが早いか飛び出した。

「ラン、後……誰もいないか？」

「大丈夫です。今のところ、ユキカブリ達の姿は見られませんよ」

ランの答に、シアンは安堵のため息を吐いた。

「ヒヤアツハツハツハー！　いーぜえいーぜえ！！　もつともつと足掻けやあー！」

一方、七合目と八合目の中間あたりでは、チーム：フロンティア達がユキカブリ達を圧倒していた。否、圧倒しているのは偏にゼアンの実力で、他は一人一体という感じでユキカブリに当たっている。

ユキカブリは、八人でゼアンと向かい合って、一人一人出て、危ない、と感じた瞬間に控えと交代する、謂わば攻撃と防御を見極める戦いだ。だが、それでも確実にユキカブリ達の数は減っている。

勝敗の決するは、時間の問題だろう。問題は、彼等を束ねるユキノオーの存在だった。先程、ゼアンが鳩尾に拳を叩き込んだが、既に回復したらしく、丸太のような大腕を振るったり、氷の礫を放つて牽制している。正直、厄介どころか手強すぎる。

「吹雪！」

「しまった……」

「やらせねえぜ。雨珠！」

ユキノオーの繰り出した寒風は、ゼアンの右手に握られている不思議珠で潰された。

「更にい……！」

ゼアンはあまりのできごとに怯んだユキノオーに拳を幾つも叩き込む。それは、さながら数多の影で、避けることは不可能だった。

「んがあっ……」

「ユ、ユキノオー様！」

「ヒヤッハアア！　タマヤー！」

ユキノオーと、駆け寄ってきたユキカブリに、ゼアンは爆裂の種を両拳に握り締め、瞬間的に両者にぶつけた。

ババババンツ……！！

彼の両手から爆発が起こる。その元となった手は少し焦げている

が、何ら問題はない。

「クソッ……」

ユキノオーはよろげさま、右腕を彼から見て左から右へ振った。困め、という合図。それに際したユキカブリユキカブリ達九人がゼアンを取り囲んだ。

「オーケーオーケー。……ヴチツ壊すぜ!!」

「ゼアン、加勢するぞ」

ゴリキーが拳を鳴らしながら近寄ってくる。

「僕達の方はすんだよ」

チップの頬がビリビリと電気を帯びる。

「おーすまねえな。ま、ぶちっ壊すだけだ」

ユキカブリ達を囲む者達の眼光が鋭く光る。勝敗は決したようなものだ。

数分後

「さて、これで良いかな……」

シアンは、オレンの実の果汁を含ませた布でニューラを一頻り拭いた。傷はだいぶ治った筈である。

ニューラがライバルであるのは分かっていた。でも、放っておけなかったのだ。

どういうことだろう？

昔の自分とは、確実に何かが違う。冷酷な一面を持つ自分とは。

そう考えていた脳を、声が乱した。

「シアンさん、ハーブさん！ 大丈夫ですか！」

驚いてそちらを見ると、チップが走ってきている。ハーブが驚きの声を漏らした。

「チップ！ 大丈夫？ ユキカブリ達は!？」

「そいつらなら心配ねえぜ。ユキノオー共々葬ってやったからよ」

物騒な台詞と共に、ゼアンが現れた。続いて、チーム：フロンテ

「イアも見えた。」

「よかった、無事で」

シアンは安堵のため息を漏らす。恐らく、誰も死んではいないの
だろう。ただ一人、ニューラが危険な状態だが。

「んで、ニューラはどうだい？」

「顔色は良くないな……」

キノガッサがニューラの顔を覗き込んで言う。ニューラの傍にい
た、黄色い長身のポケモンが答える。

「体の局部に怪我をしてるね。でも命に別条はないよ」

サメハダーのヒレのような手に、水晶の珠が先端に付いた、縄の
ようにしなる尻尾。彼がデンリユウである。

「よかったな……」

ゴリキーが呟いた時、ニューラがうめき声をあげた。数秒間
瞼がピクピク動いたと思ったら、付き方の悪い目が姿を現した。

「お……俺は？ 確か、真っ白な奴等に襲われて……」

そのまま、焦点の合わない目を全員に向けた。ゴリキーが低い
声で、ここが八合目であり、ニューラは七合目で倒れているのを発
見され、暖のとれるここに運び込まれたと説明した。

「貴方を運ぶのは大変だったんですよ。ちょっとは感謝して下さい
な」

シアンが、侮蔑も、憐憫も込めたような眼差しをニューラに向け
る。それを聞いたニューラは、訝しげな表情を見せた。

「運ぶって……お前がか？ っつ……」

「ちょっと、動いちゃダメだよ」

ニューラが手を動かさそうとして、顔を歪めたのを見て、クチート
が穏やかにあやす。

「僕だけじゃなくて、ゴリキーさんやハーブも手伝ったんですけ
どね」

シアンは吐き捨てるように言うと、デンリユウに向き直った。

「それでは、僕達はここでお暇しますね」

「ああ。何か困ったことがあったらまた来な」

デンリュウが人の良さそうな笑顔で応対する。そこに、ハーブが割って入った。

「え、でもこのまま行って、ニユーラに何かあったら……」

「彼には別状はないって言っただろう。これでも僕は昔は名の知れた医者だったからね」

デンリュウの言葉を聞いて、ハーブはいくらか安心したらしく、引き下がった。

「それじゃ、フロンティアさん達はどうします？」

「ん……俺達はニユーラの容態を見てからここを発つ」

と、ゴリキーが答えた。一方、ゼアンとチップは別行動をとるようだ。

「俺はちよいその辺うろついてから頂上目指すな。俺よか先に着かなかつたら恥だぜ？」

「僕も、ニユーラさんを見てから行くよ」

彼等がそれぞれに答えると、シアン達は手を振りながら八合目を後にした。残りは九合目、そして頂上だ。

「……百里の道も九十九里を以って半ばとす。皆、油断するなよ」
シアンはハーブを流し見する。彼女が頷いているのが分かった。そして、ランとハイネスが引き締まった表情をしているのも。

18話 最高峰に登る途上 ? 最高峰の最高峰へ (前書き)

シアン

「更新遅い」

ごめんなさい； これでも急ピッチで仕上げたんだよ。

ハーブ

「ってことは、展開は？」

かなりペース早いよ (汗) 誤字脱字も否めないし、何があったか分からない部分沢山あると思う。

シアン

「読者様方、分かりにくければ、気兼ねなく仰って構いません。作者に説明させます。では、18話。行きましようか」

18話 最高峰に登る途上 ? 最高峰の最高峰へ

シアン達は九合目に到達し、いよいよ残りは頂上へ登るだけとなった。周りを雲が覆っていて、視界が悪い。

「もう少しだな……油断しないように行こうか。高山病だってあるんだし」

水筒の水を飲んでいたシアンが立ち上がって言った。ハープも、かじっていたリンゴの芯を何故か地面に埋め、シアンに続いた。

「ラン、ここから先は一本道かい？」

「はい。もう頂上は目の前ですよ……？ どうしたの、姉さん」

ランが答えた折、ハイネスが彼女をつついて振り向かせた。

「いや、なんだかさ……嫌な予感がするんだ……ボクだけかな？」

「嫌な予感？ うーん、私はしないけど……」

ランは眉根に皺を寄せて首を傾げる。

「どうした、二人共。早く行こう」

「あ、はい」

先に行ったシアン達の後を、ランとハイネスはとてとて着いてきた。と、思ったら、シアンは急に歩みを止めた。そして、呼びかけた。

「……由祈？ それにミュウ？ 来てたのか？」

「わあゝ。二人とも、来てたのね」

ハープが朗らかに笑う。シアンが見た相手は、キルリアである相原由祈。それにミュウの二人組だった。

「うむ、ブライトの二人か……お主ら、シェイミの案内役が二人もついておるのか？」

「いや、これは色々成り行きがあつてさ……」

由祈の言葉に、シアンは苦笑い気味に抗弁した。ミュウが楽しそうに目を細める。

「シェイミは草タイプですから、炎タイプや飛行タイプが出た時の

対処に困るのではないですか？ シアン殿」

「寧ろ格闘タイプも飛行タイプに弱いからな……ところで二人はどうしたんだ？ 頂上から降りてきたみたいなんだけど」

シアンが疑問に思ったことを突くと、由祈は急に困ったような顔をしてみせた。

「そのことなのじゃが……少々困っておるのじゃ。実はの……」

「いえ、百聞は一見に如かずとも言います。ここは実際にご覧いただいた方がよろしいでしょう」

由祈が言いかけたのをミュウは塞いだ。シアンが眉を下げ、真剣な表情になった。

「……頂上で、何かあったんだな」

「はい。着いてきて下さい」

ミュウと由祈が背中を向けて走り出す。シアン達もそれに着いて行った。

「この先じゃ」

周囲を覆う雲が晴れ、気温がどんどん下がってきた頃、由祈は、崖に設置された石段の前で立ち止まった。

「ワシらは用があって五合目まで戻るが、用を終えたらすぐに戻ってくる。ワシの力が必要なら待つておくのじゃ」

由祈はそう言うと、テレポートを使ってその場から消えた。ミュウはその後を追おうとして、ふと思いついたように動きを止めた。

「この先、頂上なのですが……得体の知れないものに汚染されています。更に、強力なポケモンの気配が感じられます。十分お気を付け下さい」

ミュウの警告は、チーム：ブライトの二人と小さな二人の案内役に戦慄を抱かせるには十分だった。だが、シアンの顔色は簡単に変わらない。いつも通りの強気な言葉で返した。

「大丈夫です。貴方達が戻ってくるときにはそいつらを片付けてお

きますよ」

「そうですね」

ミュウは少し笑みを見せると、レポートで消え去った。頂上から五合目というのはレポート一回で行ける距離ではないから、恐らく数回ほど重ねて戻るつもりだろう。

因みに、麓から頂上まで、登る時は一度もレポートを使っていない二人だが、シアン達が気にする範疇ではない。

「さて、登ろうか」

シアンは相棒と案内役を振り仰いで、準備が整っていることを確認した。そして、石段に一步を踏み出した。その瞬間、上から漂ってくるウイスキーにも似た、生ゴミの芳香が鼻を突く。

「え、何なの、この臭い……」

ハープが顔をしかめて言うが、シアンは気にせずに登っていく。

「来たよ、頂上だ……！！」

始めに頂上を見たのはシアンだった。彼は、その有り様を見るなり、愕然とした。次はハープ。彼女は飛び上がってオーバーに驚いた。最後にランとハynes。「ああ……」と残念そうな溜め息がシアンの後方から聞こえた。

空の頂きの頂上。そこは、ヘドロが辺りに散乱し、悪臭を放って周囲の空気を悪くしている、謂わば天空の地獄だった。

「こ、この様か……」

「仕方ないです……。ボク達も、長い間ここに来なかったので……」
ランとハynesが懺悔のように頭を頂垂れた。

「で、でも、誰なの？ こんなことをしたのは」

「静かに。敵の気配がする」

ハープが言いかけたのを、シアンが忠告によって遮った。瞬間、四人全員が硬直した。やがて、ゾゾゾ、という気味の悪い音と共に、幾つもの塊が這い寄ってきて、シアン達を取り囲んだ。

「べとべとだあ〜」

「汚いのだあ〜いすき〜」

低い声で言うその声の主は、ベトベターにベトベトン。両方とも固体が液体に変わる途中の紫色の体をしている。見た目的に、著しく清潔感に欠けている。

「な、何？ この汚いの……」

「ミュウが言っていた“得体の知れないもの”っていうのはコイツらか……確かに、得体は知れない……いや、知りたくないな」

シアンが嘲気味に呟いた。ランが前に進み出て言う。

「ベトベター、ここは貴方達の住処じゃないでしょう。早く出て行って」

だが、ベトベターはそれに応じる姿勢を見せようとはしなかった。五体満足、という概念を持たない体つきの彼等は、頭らしき部位を横に振る。

「ええ〜？ やだよぉ〜」

くぐもつていて、相手を馬鹿にしたような響きのある声に、シアンの苛立ちが揺さぶられた。不機嫌を顔色に表し、戦闘体勢をとる。

「ハープ、ラン、ハインス、戦うか？」

「えっ……」

「はい。彼等には少し目を覚まして貰う必要があります」

戸惑うハープの傍らでランが冷静な見解を述べた。ハインスも、元来低い体を更に低くしている。

その後ろから、誰かが来る足音が聞こえた。足音からすると四人恐らく、八合目に残してきたチームい：フロンティアとチップだろう。

「な、何だ、これは!？」

ゴリキーは山頂の惨状を見るなりに目を見開いた。

「酷いわ……」

「何てこつたい……」

クチートとキノガツサも、不快そうに顔を歪め、それぞれの感想を述べた。

「うわぁ……こんなんじゃここまで登ってきた意味が無いよぉ……」

チップが事の犯人と思しきベトベター達を睨みながら頬を膨らませ、そこを帯電させた。

「説明してる暇は無い。今はアイツらを倒すのが先だ。オーケーか？」

シアンが呟くと、チーム：フロンティアの三人とチップは打ち倒す敵を見繕った。

「綺麗な奴は追っ払っちゃうぞぉ〜！」

ベトベトンの猫撫で声がシアンの耳を突き刺す。苛立ちを抑えきれなくなった彼は、そのベトベトンを蹴り付けた。それが、戦闘を開始する合図となった。

「電撃波！」

チップが黄色の波動を放ち、ベトベターに当てた。

「んべべべ」

「メガトンパンチ！」

ゴリキーが、痺れたベトベターに一発を当てた。

シアンは、二人のベトベトンに挟み撃ちにされた。

「くそ……進化前が二人なら楽なのに」

シアンは、入れ替わりで前後のベトベトンと当たっていく。瓦割りを打ち込むと、即座に影分身を繰り出して回避行動をとる。牽制の為に気合い珠を地面に打ち付け、小規模の爆発を起こし、敵を牽制する。その間に跳び上がると、ベトベトンの片割れにムーンサルトキックを喰らわせる。

『ヘドロ攻撃！』

「水平斬り！」

両側から迫ってきた攻撃を、水平斬りの一回転で薙ぎ払う。片方に、パンチを二、三発喰らわせてもう片方を対処しようとするのを向いた瞬間、急に吐き気が襲って来た。

「毒々じゃあ〜」

口を抑え、下を向いたシアンの視界に見えたのは、紫色の地面だった。そこからけばけばしい色の泡が上がってきている。

毒々。それは通常の毒と違い、苦しみを徐々に増していく毒を与える技。シアンは一気に形勢を不利にされた。

「おい、止めを刺すぜ」

「了解だあ〜！」

ベトベトン二匹分の物理的打撃が迫る。だが、シアンはこの瞬間に勝利を確信した。

「……………アツッ！！ 空元気……………っ！」

シアンは突然顔をあげると、拳を振りまわして、ベトベトン達を攻撃した。その拳は、緑のオーラに纏われていた。

「んぐわあ……………」

シアンの状態以上の為に、威力が二倍に跳ね上がったその技は、ベトベトン達をぶち飛ばした。

ハーブは原始の力でベトベターを次から次へと攻撃していた。勿論、戦いに向かないシェイミ二人を庇いながら。

「ヘドロ爆弾！」

そのうち、ベトベターはシェイミが弱点と見て、シェイミに技を飛ばした。不潔感を凝縮したような塊がランに飛んでくる。

「蔓の鞭！」

ハーブは対抗せんと、首の付け根から蔓の鞭を伸ばして、彼女自身と、ランとハynesを守るようにぐるぐると渦捲かせた。蔓の鞭のバリアはヘドロ爆弾を全て弾き飛ばした。

「吹っ飛びなさい！」

彼女がバリアを解くと同時に、蔓の鞭が広がって、ベトベター達を叩いた。

「……………馬鹿にしないでね。私の蔓の鞭、軽く三十メートルにはなるのよ？」

ハーブは目力を籠め、敵を睨む。それに怯えたベトベターを、蔓の鞭で叩き潰した。

「くそおお、泥爆弾！」

「原始の力！」

ベトベターの泥爆弾に対して放たれたハーブの原始の力は土の塊を突き破り、光の閃光としてベトベターを倒した。ホッと一息ついたハーブの目の前に、一人のベトベトンが落ちてくる。

「ハーブ、そいつをやるぞ！」

苦しそうな表情のシアンが、右手に空気を構えながら走ってくる。「了解よー！」

ハーブは、蔓の鞭を出して準備する。

「くそおお！ 負けるか！ ヘドロ爆弾！」

紫色の塊が、シアンを襲う。だが、その時見えたのは幾重にも重なるシアンの残像。影分身だった。ベトベトンが驚きに硬直する。

シアンの残像の一つが、そこから漏れ出て実体を持ち、本物のシアンとなった。

「いくぞ、空元気！」

「蔓の鞭！」

両端から二匹分の技を受けたベトベトンはひしゃげた様な体になって気絶した。

「うおおおおお！ 爆裂パンチ！」

ゴリキーの拳がベトベターに連続で炸裂する。ベトベターは毒タイプ故に、格闘タイプの技はあまり通らない。だが、爆裂パンチは脳内を掻きまわされるほど強烈な打撃を喰らわせる技。致命傷を負わずとも、安心ではないのだ。

「む、ああ。頭がくらくらするよあ」

ベトベターが変な動きをしている間に、キノガッサが後ろからスカイアップパーを喰らわせた。飛び上がったベトベターを、クチートがジャンプして、顔の後ろの缺で叩く、ベトベターがぶつかつたのは、地面ではなく、その間にゴリキーが投げていたベトベトンであった。ベトベターとベトベトンは空中で交差すると、呆気なく目を回した。

「こ、これで最後だ！ 気合い珠！」

シアンは、両掌で抱える橙の塊を、ベトベトンに打ち付けた。

これで、戦闘は終了を見せた。

18話 最高峰に登る途上 ? 〳最高峰の最高峰へ〳 (後書き)

補足

この世界のポケモンは、「社会の一部分としてのポケモン」の
場合は数え方が人、「固体としてのポケモン」の場合は数え方が匹と
なります。

19話 最高峰に到達して（前書き）

今回挿絵付きです。

……で、私としたことがその挿絵でミスをやらかしやがりました、今回シアンオンリーを書いたんですがその中に致命的欠陥を発見した所存なんですよ。
まあ、間違い探し程度で探してやって下さい。多分簡単に見つかります。

19話 最高峰に到達して

「うわあああ〜!!」

戦闘の終了と共に、ベトベトン達はボロボロの体を引きずるよう
に後ずさった。あのヘドロは、体の一部ではないと思っていたシア
ンはそのギャップに少々顔を曇めた。

「ベトベター、ここは貴方達のねぐらじゃないでしょう。おうちへ
帰りなさいな」

ランが一步前に進み出て少し語気に苛立ちを籠めて言う。それを
聞いたベトベトン。少し、呆けた表情になった。

「ええ〜? どういうことお〜?」

その、少し間の抜けた相手をおちよくなるような語調に、シアンの
こめかみからブチリという音が幾度も連立して、あたかも輪唱のよ
うに轟いた。

「こ、ここは山の頂上だよ。君達のねぐらは八合目だよね?」

ハインスが少しおどおどしながら言うと、ベトベター達は辺りを
見渡した。そして、そのうちの一人が足元を見て（彼等に足とい
うものは付いていなさそうだが）、一輪の花が下を向いているのを見
た。それは、グラデシア。麓が頂上にしか咲かない花。勿論、ここ
が麓でないことは分かりきっている。つまり……

「ああーっ!!」

のんびり口調が一斉に放った叫びに、全員、ビクツと体を痙攣さ
せた。シアンなどは、目頭を思い切り逆立て、憤怒の形相を作っ
ていたが、それに気付く彼らではない。

「ここ、頂上じゃないよ!?!」

「げえ、ホントだ。俺達何時の間にかここ汚してたんだなあ」

「うわあ、早く立ち退かないと」

「分かったんならさっさと去りなよ阿呆」

ベトベター達言い合う終わり際にシアンが低い声で漏らした呟

きはランの耳に届いていた。ランは、いつもの冷静な態度の壁を崩してシアンを流し見た。だが、直後にその怯えを笑みの薄皮一枚裏に隠して続けた。

「わ、分かったなら早く行ってくれるかな？」

「うん。ごめんね、シエイミちゃん達」

不定形の紫の塊は悪臭を放ちながら頂上から去っていった。彼等の姿が見えなくなったとき、シアンが頭をガクツと下げて溜息を吐いた。

「どうしようもない奴らだな」

その言葉を聞いて、ランは少しホツとした。シアンはベトベター達に嫌悪こそ抱いているかもしれないが、あからさまな殺意は抱いていない。寧ろ、この程度の邪魔を入れられた程度で殺意を抱く方がおかしい、という良識はシアンも携えているが、ランから見るとシアンは不思議な部分があって、思考を読みとれないことが多いのだ(と、言いつつランはシアンに恋情を抱いてしまっている)。

「……で、どうする？ この汚れてしまった山頂」

傍らで、ゴリーキーがボソリと呟いた。あまりにさり気なかったので、下手をするところにいる全員の意識からはみ出てしまっていたかもしれない。

「ああ、そうですね。今から掃除したところで、どの位かかるか分かりませんし……洗濯珠の持ち合わせも無いんですよ。残念ながらシアンの鬱屈そうな答を最後に場に降りた沈黙は、しかしすぐに破られた。

「あ、だ、大丈夫です。ボク達、汚れなどを浄化する力を持ってます」

名乗り出たのはハイネス。ちょっと自信ありげな表情は、隣のランも作っている。

「よ、汚れを浄化できるの？」

ハーブがオウム返しに訊いた。ランが首を縦に振った。

「はい。“シードフレア”という炎なんです。技タイプは草ですけ

どね。ちょっと下がっていて下さい。危ないですから」

解説を終えたランはシアン達に退却の指示を出した。技を使うという合図だろうか。

ランとハイネスは目を瞑って精神を集中する。やがて、周囲からどす黒い紫色の煙が出て、シェイミ族が体の両端に付けたグラデシアの花に吸い込まれていった。煙が吸い込まれていく程に、辺りの汚れは消えていく。それと遂になるように、グラデシアの花は段々と紫に染まっていく。周囲のヘドロや悪臭が消えていき、そこにどんな花が生えていたのか明瞭に分かるようになってきた。変色が酷いが、足元一面にはグラデシアの花が咲いている。そして、そして、穢れはあと半分かというところで二人のシェイミが覚醒した。

『シードフレア!!!』

二匹の叫びが山頂に木霊し、彼女らを中心に光が広がっていく。光はたちまち山頂の全てを覆い尽くし、全てが見えなくなった。

光が晴れて、シアン達の視界は晴れて細やかに見えるようになった。

「わあ……!!!」

誰のものともつかない感嘆のため息がこぼれ出る。足元の、鮮やかな花畑。涼やかに吹く風。崖の近くに来たハーブがシアンを手招きで近くに来させた。

「どっした……」

シアンは崖際に立って、言葉を失った。

眼下に広がるのは、永の絶景。雲が影を落とす地上は、木々や林や平原で覆われ、その中を湖が偏在し、川が貫いている。空を見上げると、宇宙に近いのか碧空が空色と群青色を混ぜた色になり、そこにはさながらラピスラズリの宝石のように、星の光が散りばめられている。

まさに絶景という表現が当てはまる。ここに来て始めて、シアン

は登山をして良かったと思えた。

> i29792—1837<

「この山に眠る秘宝って……この光景のことだったんだな」

喜びを瞳に湛え、目を細める。ハープも、大きな眼を更に大きく見開き、嬉しそうな表情でその景色を瞼に焼き付けるように見つめている。永遠に忘れない思い出を残すために。シアンが、前を向いたまま言う。

「ハープ。実はさ、渡したいものがあつたんだ」

「えっ！？ 何？ 何？」

ハープが、出張から帰って来た父に土産をねだる子供のような目で見つめる。シアンは、少し切ない目をして、目の前の絶景から目をそらさずに言った。

「フフ、時制を考えてみなよ。渡したいものが“あつた”んだ。つまり、今は失われてしまったってことだよ」

ハープが、その言葉にシュンとした。だが、すぐに表情を変えて、トレジャーバッグから一つの箱を取り出した。

「それって……空の贈り物……！」

シアンが目を見開く。入手した本人が蓋を開けても何も起こらないが、誰かに感謝の気持ちを以って渡すとその中には想いの詰まった品が入っているという、空の頂きの特産品。ハープはそれをシアンに渡した。

「私の方は渡すものはあるんだけどな」

そのいたずらっぽい目に、シアンは受け取ることを躊躇ったが、ここは素直に貰っておくのが礼儀というものだ。手を出して、掌にその箱を置かせた。静かに蓋を開けると、その中には何の変哲もないオレンの実が。だが、シアンは日ごろの感謝の気持ちで受け取っておいた。後で知ることになるのだが、ハープは空の贈り物を拾ったとき、その使い方を知らずに一度箱を開けてしまったという。そ

の箱の中にオレンの実を適当に放り込んでそれをシアンに渡したぞうだ。

「シェイミ達、色々有難う。世話になったよ」

「うん、私達はここで休暇するわね」

帰り際、空の頂きの麓でシアンとハーブはシェイミの姉妹に別れを告げた。

「あ、えと、ま、また来て下さいね。待ってますから」

「いつ来ても、私達は歓迎しますよ。それから……シ、シアンさん……」

ランはシアンの名を呼んだ後急に黙り込んでしまった。よく見ると、俯いた顔が真っ赤だ。

「ん、何……」

それを見たシアンは、ランが心の中でどう思っているか悟った。数秒黙り込んだ後、辟易した表情で対応する。

「うん、いつか暇が出来たらまた来るよ。な、ハーブ？」

「え、あ？ ええと、うん」

何が起こっているのか、四人の中で唯一分からなかったハーブもある意味辟易していた。

「じゃあ、私達はこれで」

ハーブはそう言って背を向けた。

「じゃあね」

シアンは手を振ると、名残惜しそうに二の足を踏んでいたが、ハーブの遠くなる背を見て置いて行かれると思ったのか、慌てて歩き出した。

チーム：ブライトのささやかな休憩の時間は終わり、またいつも通りの慌ただしい日常が舞い戻ってくるのであった。

シアン達の背中が見えなくなるまで、ランとハイネスはその場に佇んでいた。彼等が点になって、風景と化して やっと、ハ

イネスの方が動きを見せた。

「ラン、帰ろうか。ボクも久しぶりに里の皆と会いたいし」

そう言っつてランの顔を覗き込んで、不意に真剣な面持ちになった。

「……ラン」

彼女の瞑らな瞳に、涙の粒が浮かんでいる。

「……会えなくなるのが寂しいって思えることは、幸せなんだよ。

泣いちゃダメだ」

姉は妹を慰めて、その小さな手で頭を撫でた。

19話 最高峰に到達して（後書き）

シアン

「あのさ、作者さん。今何日と思ってるんですか？」

……パソコンの画面の右下に二十四日って書いてある。

シアン

「はい。そしてこの小説の最終掲載日は九日となっていたわけです。これをどうするつもりですかこのクソ野郎」

ごめんごめん。忙しくてさ； パソコンでのんびりしまくってたから学校の課題とかあつて全然書く暇とかないわけよ；

シアン

「だらけ腐ってるくせに課題とか；」

だらけ腐ってるとか言つな。その通りだけどさ。

因みに、この話を投稿する日に鏡花水月とユザネを変えました。

さて、長かった空の頂き編も終わりを迎えまして、次から新章

と、行きたいのですが、次と次の次の話はちょっとしたコメデイで行きたいと思います

20話 素直じゃない子の物語（前書き）

さて、今回は本編では初になる、一人称です。因みに誰視点かはサ
ブタイから悟って下さい

チップ

「……予想はついたよ」

バタフリー

「私事です」

うん（苦笑） じゃ、いってみようか。

20話 素直じゃない子の物語

「課長」

「そのだらしない呼びかけを改めなさい。ここは一応職場なんだから」

PPPO捜査課事務室内。神経を逆なでさせそうなバタフリーの呼びかけに、アタシは指摘した。こういう、間延びした声で話かけられると妙にいらつくのよね。

「あ、すみません。今度からこの口調はカフェにいる時だけにします」

「自由になさい。で、要件は何？」

「あ、えつとですね」

バタフリーは片手に持っていたバインダーのプリントの中からその一枚を取り出し、アタシに渡した。これは？

「ダークネス・ナイトメア社？」

胡散臭いことこの上ない名前をした企業のチラシだった。銀の針とか鉄の棘が黒い紙にプリントされ、青い文字で「Darkness Nightmare」と言う文字が書かれている。何よコレ？

「はい。何でも、東の方に拠点を置いてる企業で、業績とか株とか、大手も凌駕するくらい凄いらしいんですよ」

「え？」

おかしい。バタフリーの言葉を聞いた時、反射的にそう思った。業績、株価の双方で大手を上回る企業だったら、普通は有名になる筈だ。でもアタシはこんなチラシは見たこと無い。バタフリーの様子を見ると、コイツも知ってる風じゃないわね……？

「課長、知りませんか？」

「知らない。でも、おかしいわね」

「あ、流石課長です。気付きましたか」

「ええ。ダークネス・ナイトメアなんてどう見ても売れなさそうな

名前使うなんて」

答えた瞬間、アタシの机の天板とバタフリーの頭がなかなかの速度で触れ合って、ゴンという鈍い音をたてた。

「全然的外れですよーっ!？」

「分かってるから大声出さないのアホ。あれでしょ？ どうせ事務所の皆にこの会社知ってるか訊いてきたんでしょ？」

「はい。そうです。そしたら皆知らないって言うんですよ。……怪しいですよね？」

「業績ランキングで上位にいるのに無名。闇企業の特徴よ」

アタシが推測を述べてあげると、バタフリーは息急き切って身を乗り出した。

「そうでしょう!？ そう思いますよね！ 課長。すぐにでも戦闘課の方達を総動員させましょう」

その案には賛成できない。いくらなんでも、闇で、しかもかなり規模の大きい組織にこう軽率に挑むのはアタシとしては好きじゃない。い。

「落ち着きなさいバカフリー」

「課長今“タ”って言うべき所を“カ”って言いましたよね？」

「そして黙りなさい。今ここで戦力を投入しても、多分うまく行かないわ。闇企業を相手にするのを忘れないでね」

するとバタフリーは心なしか嬉しそうな笑みを浮かべた。アタシがその表情を見て悪寒を覚えるのは何故かしらね。

「じゃ、まず推薦するのはチーム：ブライトですよね、課長」

「……だから何よ」

「シアンさんに会えますよ？」

「だからどうしたのよっ!！」

「愛するあの方と一緒に」

余計なことを言われて動揺させられる前にアイアンテールで叩き潰しておいた。手遅れとは言わせないわ。絶対。

「バタフリー……バタフリー……よし、起きないわね」

馬鹿蝶々が数時間は目覚め無いであろうことを確認してから、アタシはトレジャータウンへ向かった。

「何よこの体たらくはーっ!!」

チーム：ブライトがいる所に着いたのはその日の夜遅くになって
だった。その有様を見るなり、アタシは叫び声をあげてしまった。
いや、これはあげて当然よね。だって、夜中十二時にパッチールの
カフェを覗いただけなのに十数匹のポケモン達がドリンクを飲みま
くって、数匹がテーブルに突っ伏して爆睡してて、シアンは橙色の
ジンジャーエールが入ったグラスを傾けながらザングースと柄にも
なく大爆笑しあってハーブが何か頭抱えて愚痴ってる由祈を苦笑
い気味に励ましていてチップが床でどこぞのオッサンみたいにいび
きかいててゼアンがソーナノとオクタンとトランプしながら高笑い
しててミュウがボウルを持って、中身を泡立器で混ぜてるけど勢い
が強すぎて中身の大半をその辺にぶちまけてる光景を目にするなん
て思いもしなかったんだから。

「……シアン、これは何？」

その時、偶然ザングースとの談笑が終わって一人でドリンクを飲
み始めたシアンにアタシは訊ねた。

「ん、レイナ？ 今日来てたっけ？」

「今日？」

コイツの口調からすると、今日なんかあったらしい……けど、ア
タシには関係ないし。いいか。

「いや、パッチールのカフェの常連の皆で登山に行ったんだよ。空
の頂きっていう、世界一高いっていう山。知ってる？」

「知らないし、興味ないわよ」

そうよ。世界一高い山なんてアタシの興味の範疇じゃないし、登
りきったところで何になるっていうのよ。胸の奥が妙にソワソワし
てるのは気のせいよ。

「それで、打ち上げなんだよ今。ハハッ」

シアンはジンジャーエールを一気に飲み干した。よく見ると、変にテンションが高い。酒類は前にコイツが暴力事件を起こして無期限販売中止になった筈。ということは、寝不足による神経の異常現象かしら。たまにあるわよね、こういうの。

「で、何か用？」

「ああ、それがね、こういう会社知っ」

「ふあああ……あれ、レイナ？ どうしたの？」

アタシが要件を言おうとしたところで後ろからかけられるあどけなさの残る声。振り向くと、後に寝起き顔のチップが立っていた。

「ちよっと所用があつて来たのよ。さっさと済ませたいから邪魔しないで」

「シアンさんに会いたくなつたの？」

「違うわよこのアホリス！」

何て事を言うのこイツは！ 「会いに来た」、ならまだ良いけど、「会いたくなつた」って何よ！ アタシがシアンのことを好きみたいな感じじゃない！

「違うの？ レイナのことだからってつきりそうかと。だって、好きなん」

危険なことを言いかけたアホの口に、傍にあつたグラスの中身を流し込んで黙らせる。窒息して、四肢をばたつかせているのは気にしない。顔が熱いけど、きつと気のせいよっ！ ……シアンの方を見ると、今度はバリヤードと「カスとクズの違い」という果てしなくどうでも良さそうな議題について議論していた。よかった。今の会話は聞かれてないみたい。

「で、閑話休題」

「ん、どうしたの、レイナ？」

「それがね」

今度は邪魔者^{チップ}が入って来ないように、手短かに用件を話した。東の方に拠点を置く、ダークネス・ナイトメア社が不穏な動きを見せて

いる。本社に潜入して情報収集、可能であれば本社を壊滅させてほしいとだけ言った。

「と、いうわけ。どう？ 協力してくれるかしら？」

「うーん……」

シアンは顎に手を当てて何やら考え出した。

「ちよつと、世界を救うぐらいの探検隊なんでしょう。この位の依頼は簡単な筈よね？」

アタシは、報酬として五万ポケ渡すと書かれた正式な依頼書を手渡した。五万ポケ。プリンギルドの親方の取り分に差っ引かれたとしてもコイツの手元には五千ポケ残る。

その事実はシアンの心に左右を決めさせたらしく、彼の瞳が大きく揺らいだ。

「やってくれるかしら？」

ここは上目遣いに見つめてやるつか、とも思ったけど、アタシは目つきが良い方ではないから効果は薄い。それにそんな羞恥プレイはしたくないと諦めた瞬間に思った。

「えつと……まずはハーブとチップに了承を貰わないと。それに、僕達疲れてるから今日明日は多分受けられないよ」

ブチリ、という音がこめかみから響いてきた。シアンがビクツと方を振るわせたのを見ると、多分相当怖い顔になっている。どういう類で怖いのかは知らないが、普通のポケモンが見たら多分アタシは相当覇気を出している。

「わ、分かった分かった。受けるよ。だから二、三日待ってもらえるかな？」

結局それでアタシは承諾した。

20話 素直じゃない子の物語（後書き）

はい、次ですが、また一人称で行こうと思います。次は誰視点でしょう？ 因みに時間軸がちょっと変わります。予定としてはシアン達がギルドを卒業するちょっと前です。あくまで予定ですgry

21話 Another side love (前書き)

さて、今回も前回同様駄作です。いつもいつも駄作じゃないかとか
言わない

それと、今回はちょっと展開の移り変わりが早いです。ご了承ください
さい。

21話 Another side love

「何故、お主は強さにこだわるのじゃ？」

私がそう訊いた時、彼は難しそうな顔をして答えた。

「野球選手が、どこまでも野球がうまくなりたいと思うのと一緒だ」
「いなくなつて、二週間。私を感じた時間はそれだけだった。でも、神楽は一度人間とポケモンが共存するパラレルワールドへ行つて、この世界の二百年前の時間に戻ってきた。それを二週間の間にやってのけたらしい。」

「由祈……変わっていないな。その変な言葉づかいも。仕草も」

私の口調は、大分前に死んだ祖母に影響されたせいで、かなり老成している。でも、そのお陰か、神楽は私を見た時、すぐに私だと分かつてくれた。

でも、再会したとき神楽はもう二週間前の神楽ではなくなっていた。

シャワーズのクレア。彼女は神楽と共に同じ道を歩み、シアン達同様、世界を救つたらしい。

「ああ、救助隊ヴレイフェルだな」

ゼアンに訊くとそう答えた。それが、神楽とクレアのチームの名前。

二百年も前に結成されたチームで、世界を救つたことで名高い救助隊なのだそうだ。

つまり……。

神楽はある時、忽然と姿を消した。

その際に、ある世界へ転生した。その世界とは、人間とポケモンが共存する世界。

神楽はそこに、人間と変化してやってきた。

そしてまた、今度はこの世界へ戻ってきた。その際には、またピカチュウへと戻された。彼がこの世界に戻って来た時、私達が住

む世界の二百年前の時代だったそうだと。

そして、何故か現代に来て、トレジャータウンを襲撃した。こういうことなのだ。

神楽がクレアと出会ったのは、この世界に戻って来たとき。チームブレイフェルが結成されたのもそのときだ。

尤も、これは全て「ポケモン」と名乗る謎の者から聞いたことだけだ。

「……そうか。ワシはもう帰るぞい」

神楽の言葉の返事に、まともなものが見つからず、私は帰ることにした。

「……」

今日は疲れていたらしく、私がベッドに入り込むとすぐに意識が遠退いた。

「来たのう……」

私が最近見るようになった夢。神楽の経緯も教えてくれたあのポケモンの夢だ。このところ夢は見なかったけど、今日は、ポケモンは夢の中に来てくれた。丁度良い。訊きたいことがある。

「お主……自身のことをポケモンといったじゃろう？　一つ訊きたいのじゃが……お主は本当にポケモンか？　仮にポケモンだったとて、種族は何じゃ？」

ポケモンと名乗る者は、いつ見ても目映い光に包まれていて、顔立ちは愚か種族すら分らない。

「……貴方から、このようなことを訊かれるとは思いませんでした……。由祈様、貴方はキュウコン伝説をご存知でしょうか？」

「キュウコン伝説？」

そんな単語を聞いたことはない。そういう意味を籠めて聞き返した。すると、ポケモンは優しい声で語り始めた。

こことは違う世界。人間とポケモンが仲良く暮らしていた。そんな世界に住んでいたある少年は、ある時出来心からキュウコンの尻尾を掴んでしまった。キュウコンの尻尾は、触れた者に千年の呪縛をかけるという。この少年も例外ではなかった。だが、呪縛を受けたのは少年ではなく、少年が所持していたポケモン、サーナイトだった。サーナイトは、主に対して非常に忠実なことでも有名だ。その忠実さは、ガーデイにも引けをとらない。禁忌タブイとされていたことをやっつてのける、愚かな少年だったが、サーナイトはそれでも忠義を感じるのだ。彼を庇って、代わりに呪縛を受けた。

キュウコンはこのとき、少年に訊ねた。

『汝はこのサーナイトを助けたいと思うか？ このものを助けるために、全てのものを捧ぐ覚悟があるか？』

だが、少年は是と答えずに逃げた。それを見たキュウコンは、こう予言した。

『あの人間は何れポケモンになる。そのとき、世界を破壊する災厄が動きだすだろう』
と。

サーナイト……？ 種族が、私の進化後ということに、妙に畏れを感じた。

「もしや、貴方は……!!」

「はい。私はキュウコン伝説のサーナイトなのです」

そう言って姿を現したサーナイト。確かにサーナイトだった。だが、私にとってはとても大切なポケモン……。

「婆様？」

私の祖母と、全く変わらない顔立ちだった。孫を持ちながら、未だに妙齡な雰囲気を醸し出し、美人と湛えられていた。尤も、それは七年前の出来事。

「久しいのう。由祈。おんし、ワシが完全に死んだと思うたじやろう」

「……………どうということじゃ？」

私は、祖母の言ったことに驚きを隠せなかった。ワシが死んだと思うたじやろう……………それって、つまり……………

「婆様……………？ まだ、死んでおらんのか？」

すると、祖母は美しい顔に、垢の無い笑みを浮かべて言った。

「ワシは『救世主メシアの導人ルカス』となって人間の世界で生まれ変わったのじゃ。おんしの婆様じゃった時の記憶を持つてのう」

「それは、やはり死んだということじゃろう？」

私はそれだけ返事をした。救世主の導人とは何か、人間の世界へ生まれ変わるとはどういうことか、詳細を訊き出したかったが、それしか言えなかった。

「確かに死んだ。じゃが、おんしの婆様じゃったという記憶は確かに残っておる。ワシは言ったじやろう。完全に死んだと思うたか、と」

「生きていた証は残っておるといふのか」

そう言ったとき、不意にシアンのが思い浮かべられた。彼もまた、消え際に「自分は生きていた証を残した」と言っていたらしい。

「……………しかし、神楽がおんしを覚えたいたのは不思議じゃのう」

「え？」

「いや、なんでもないぞい」

今祖母が言ったことを、私は野放しにできなかった。神楽が……………

「私を覚えて……………いること……………が……………不思議？ 婆様、どうということじゃ？ 神楽はワシのことを忘れねばならぬのか？」

「……………」

実の孫娘の視線には耐えきれなかったのだらうか。苦虫を潰したような表情を浮かべるとポツリと言った。

「忘れておるのじゃ……………やつは、人間界からこの世界に戻る時、一

切の記憶を消したのじゃ」

「なんじゃと!？」

嘘でしょう!？ だったら、何故神楽は私のことを覚えているの!？

「……もしや」

神楽は、私のことを覚えているフリをしていたのかもしれない。そのことを私は祖母に話した。

「……神楽の性格なら有り得るかもしれんう。確かめてみたらどうじゃ」

「確かめる？」

「記憶のあるときの神楽でしか答えられない質問をしてみい。しかし」

祖母は焦らさせるように、一息をついて私に告げた。

「飯にやつが答えられなかった場合、お主はそれを受け入れる覚悟があるかの？」

「……」

私はその言葉に答えることが、できなかつた。

翌日、クレアと一緒にいる神楽を見た。刹那、衝動にも似た感情が胸を満たし、顔を反らしてしまった。

神楽は私を見ると、笑って手を振ったが、私は微かに頷くのが精一杯だつた。

容易に信じることはできない。もしかしたら、記憶を失って分からないのも隠しているだけなのかもしれない。

「神楽……」

「どつした？」

「……いや、何でもないのじゃ」

勇気を出して訊いてみようとしたが、その瞬間に涙が込み上げて来て、何も言えぬままに終わってしまいそうになった。いけない。

「このままじゃ。本当のことを知らないよ。」
「お主、あのことを」

21話 Another side love (後書き)

さて、今回、「探検隊」に、「救助隊」の要素を入れてみました。

実は作者の妄想では、救助隊の二百年くらいあとの世界が探検隊の世界だということになっています。

色々謎が多く、わけわからんという方もいるでしょうが、何分パロディ話ですので「愛敬を

22話 Darkness Nightmare (前書き)

今回、グロテスクな描写があります。ちょっと血が流れるとかそういうのも無理、という方は即座にブラウザバックされることをお勧めします。

とはいえ、この話を読まれないと次話の内容は理解できなくなりませんがorz

22話 Darkness Nightmare

「ダークネス・ナイトメアね……」

午前六時半。胡散臭いことこの上ない会社名を呟きながら、シアンは早朝のパッチールのカフェの片隅でグラスに注がれたオーレを口に流し込んだ。甘味の中に、苦りが混じった少しメカニック染みた味。彼の好きな味ではなかったのか、顔を顰めてグラスをテーブルに置いた。グラスの底面とテーブルの天板が触れ合って、コンと小気味良い音を立てる。その音と重なるように、シアンの視界とは真反対の方向から、誰かが訪れた気配を感じた。

「……レイナ？」

「約束した時間に来ていてるわね。よろしいよ、よろしい」

「そう言っても、約束の時間はあと一時間もあるし、ハーブとチツプはまだ来ていないよ」

レイナは、シアンの要領を得ない答に機嫌を悪くしたのか、唇を尖らせて眉を逆立てた。

「うっさいわね。そう言うならアンタは何で後一時間もあるのに来てるのよ」

「他にすることが無いから……ところで、何でレイナもここに？ 他の仕事はいいの？」

瞬間、レイナは不意を突かれたとでも言いたげに目を見開いた。

だが、直後に頬を紅色に染める。

「べっ、別に良いじゃない！ ア、アタシは、ただ……」

「ただ？」

途中で言葉を詰まらせたレイナを、シアンはのほほんとした表情を崩さぬまま急がす。それがレイナの頬の赤みを更に深くするのだった。

「ええいつ、何でもないわよ！ 黙りなさい馬鹿！」

なんか、いつものことだけど、感情の変化が激しいな。

シアンは困惑の表情を表すべく、眉毛の外側の端を下げた。だが、その既成した表情は不完全で、口元が緩んでいた。

「はは、しょうがないな……」

シアンは、目の前の課題である甘苦いオーレを片付けた。その約四十分後に、ハーブとチップはやって来た。チップは、店員以外誰の姿も無いカフェに二人きりでいたことでレイナをからかっていた。当然のことながら、最終的に痛い目を見ることとなったのだが。

果ての湖。

ダークネス・ナイトメア社の本拠地としてレイナがチーム：ブライトのメンバーを案内したのはそう呼ばれるダンジョンだった。

「アンタ達、水晶の洞窟行ったときのこと覚えてる？ 畔から道が伸びてて、湖のと真ん中に小島があったでしょう？ この湖もそれと同じよ」

レイナの解説を、シアンが理解する。

「その小島に、ダークネス・ナイトメア社の建物が立っているってわけね」

「正解」

そのとき、瞳を不安そうに揺らしながらハーブが訊いた。

「わ、私達だけで行って大丈夫かな？」

「一応、戦闘課のやつらを数十人送ってるけど……」

レイナがそう言っているうちに、小島へと続く道が現れた。

「良い？ 行くわよ」

レイナの間に、シアン、ハーブ、チップの三人は頷いた。

小島への道は、湖の畔から中心まで伸びているようで、そこそこの長さがあった。彼等が建物の中に入ると、その視界に映った光景は

「う、嘘でしょう!？」

レイナがあげた声。その裏には信じられないという響きが籠って

いた。レイナにとっては見覚えのある、戦闘課のポケモン達。皆、体の局所から血を流して倒れている。チップが、一番近くで倒れているニドリーノをつついて反応があるかどうか確かめる。その時、彼等の耳に叫び声が飛び込んだ。

「おい、また侵入者が出たぞ！」

声の主はダイノーズ。赤い鼻が高く、頭部に綿のような毛を生やした岩石のポケモンである。

「み、見つかつちゃった……」

ハーブが戦慄する傍らを、シアンは歩き抜ける。戦闘課のポケモンが落としたであろう剣を拾い構える。

八双の構え。剣の構えの一つで、右手を鏝際に持ち、口元に持つてくる、さながら野球のバッターの右打席でのポーズのようなものである。

そこへ、呼びだされたポケモン達の一人であるケンタロスが猪突猛進の勢いで迫る。シアンはそれをヒラリとかわし、斬撃を叩き込む。

致死を免れさせるべく、急所を外し、外の痛みを感じさせる部分だけ切り裂く。バランスがよろけた瞬間に、ハーブが蔓の鞭を叩きつけた！ ケンタロスは十数メートル程吹き飛ばされ、壁に激突すると動かなくなった。

「くそ、次！ かかれ！」

ダイノーズが号令をかけると、今度はワンリキーがかかってきた。シアンは、八双から剣を縦に振るい、彼の両手の甲を、脈を外して切り裂いた。使い慣れた武器とも言えるものを失ったワンリキーは今度は足を振りまわして来た。だが、シアンがその足を蹴りあげる。殆ど、股を限界を超えて開く形となったワンリキーは、痛恨を表情に表すと悶絶して意識を失った。

「一斉にGO！」

ダイノーズはいらついたのか、雑に号令を出す。瞬間、数多のポケモン達の奔流がシアンを包み込んだ。

「くっそー、放電！」

チップは、迫りくる濁流を払おうと放電を放ったが、それでダメージを受けるのは敵ばかりではない。

「ちよつと待ったチップ！ それを使ったら僕達もギャアア！？」

『きゃあつ！』

シアン、ハーブ、レイナに電撃が炸裂し、形勢は一気に敵側に傾いた。

「くそつ、チップのアホが……」

シアンは、死なない程度に敵に斬撃をぶつける。だが、忍耐が限界を超えた一線が迫った。

「て、めえら……鬱陶しいんじゃあ！」

怒声をあげ、目の前のナツシーを蹴り飛ばす。

「そらよっ！」

そして間髪いれずに斬りつけた。手加減も加えずに。

ナツシーの腹が裂け、鮮血が舞った。

「ふん、俺をキレさせてただで済むと思うな」

最早一人称すら変わってしまったているシアン。直後に振り向くと、後方に控えていたハツサムに刺突を喰らわせた。ハツサムの体から力が抜け、劔が刺さった部分から血が流れる。

本来、劔は二、三回斬ると血肉や脂で斬れ味が格段に落ちる。だが、シアンの手握られている劔はそんなことは関係ないように見えた。無理も無いだろう。彼自身記憶こそないが、人間だった頃は劔技に長けていたのだから。さらに、怒りのあまりにタガを外し、殺さない程度の斬撃ではなく、本気の斬りを入れていまでは制限もあつたものではない。

ハーブは、目を吊り上げ、殺さんばかりに劔を振るい続けるシアンを恐れ混じりに横目で見ながら蔓の鞭を振るっていた。渦を巻かせて彼女の体を繭のように覆わせ、あらゆる攻撃を防ぐ。そして、機が熟したと見えると繭を一気に解き放つ。無論、そのとき蔓は豪速で回転する。その回転で周囲の敵を吹き飛ばす。空の頂きでも何

度が使った方法だ。更に、マジカルリーフでオクタンに攻撃。拔群のダメージを喰らったオクタンは何ら抵抗もせず倒れた。因みに、喋っている余裕はなかったようだ。

「シアンのやつ……タガを外したわね」

レイナはアイアンテールをぶつけながらシアンの様子を鑑みていた。因みに、彼女がまともに見える技はアイアンテールと手助けくらいしかない。彼女は即座にチップに手助けをかけて自分は戦いに集中した。

「アンタ達、さっさと抵抗しなさい。でないと公務執行妨害になるわよ」

目の前のリザードに語りかける。その目はなかなか気迫が籠っていた。

「いやだね。そもそも、たった五人で乗り込んでくるようなやつらに負けるか」

リザードも負けじと言い返すが、次のレイナの言葉に固まった。

「そう？ 後ろの光景を見て同じことを言えるかしら」

リザードは後を振り向いて、顔をひきつらせた。飛び散る鮮血。

時々光る刀身の閃光。死に至るポケモンこそいないだろうが、恐怖には十分値する。

チップの、少々抑え気味の放電が炸裂する。周囲の水タイプのポケモンは倒された。だが、地面タイプや草タイプのポケモンが残る。

「甘いよ！ 必殺前歯！」

チップは前歯を鋭く尖らせ、サンドに噛みついた。

「うぐ……」

「十万ボルト！」

チップが放った技は、効果は極めて薄い。しかし、放電と必殺前歯のダメージと重なると、十分だった。

「いくよっ！ 目覚めるパワー！」

チップはそう叫ぶと、右手から光の軌跡を生み出す。それは青白く光り、キレイハナに直撃した。

チップの使用する目覚めるパワーは氷タイプ。威力はかなり高い。それも相まったのかキレイハナは安易に倒すことが出来た。恐れをなしたか、周囲の草・地面タイプのポケモンがかかってきた。

「え、ちよっ、うわあああ!？」

流石に、チップもこれは想定外だったのか、放電と目覚めるパワーを闇雲に繰り出した。幸を奏して、なんとか全滅させた。

22話 Darkness Nightmare (後書き)

はい、グロテスクな描写でしたね。

シアン

「ん、僕でもタガを外すことはあったんですね」

ハーブ

「今更気付いたの!？」

シアン

「え?」

wwww 実は「時の記憶」が間欠してからこっち、シアンの裏モーターが発動していなくて、ちょっと無理矢理ですが入れた次第です。

さてさて、それではっ。

23話 悪夢を見せる(前書き)

うおおお……ここまで書いたのは久しぶりだなあ。5000字突破
したよ；

シアン

「……テスト期間なのに、余裕ですね」

毎日一時間ずつ書いていたら更新できる量になったのsry

シアン

「……こいつ、大学入試も失敗するんじゃないかな。では、23話、
べじぞろ」

23話 悪夢を見せる

「……これは」

シアンは、倒れた敵が落としたりらしい物体を見ていた。青く塗られた鉄の塊。飾り気が無い四角錐に、側面の一つに取っ手とトリガーが付いている。

銃？

直感的にそう思ったが、どうも違うようだ。弾丸が飛び出すところは球体の機械がついている。だとすると、別の用途で使用されるのか、シアンは試しに拾い上げると恐る恐るトリガーを引き絞った。「な、何だ、これは……!?!」

すると、機械の、本来弾丸が飛び出る部分の周りに、ごうごうと音をたて蠢く黒いオーラが巻き起こった。びっくりして思わず手を離す。そして周りを見て実験台になるポケモンを見繕う。周囲には、彼等が倒したポケモンの群れ。少々視覚的にグロテスクだが、それでもしないとシアン達と同じ目に遭っていたのだと思えば仕方ない。「よし、コイツにするか……」

シアンは傍に倒れていたワンリキーに銃を突き付けた。その瞬間にワンリキーは目を覚ました。傷ついた体で動けないらしく、目だけをシアンの方にやると、彼が銃を突き付けているのに気付いた。その瞬間、顔を引き攣らせて慌てだした。

「げっ!?! ま、待て、それはやめてく」

だが、その言葉はシアンの耳には入らなかった。ワンリキーが言い終わらないうちにシアンはトリガーを、今度は勢いよく引き絞った。

「んぎゃ あああああああ!」

「うーん……毒ガスじゃなかったみたいだから死なないっぽいけど……」

ワンリキーがどうにもなっていないければ、そこじゃねえんだよ!

というツツコミが帰ってきそうなシアンの言葉。因みに、足元から這い上がってくる断末魔は気にしない。銃の先端からあふれ出るオーラはワンリキーの頭の周囲で蠢いていた。シアンが手を離すとオーラは消えてワンリキーも再び目を瞑った。だが、どこか違う。再び眠りに就いたワンリキーは、顔を苦痛に歪め、息を切らせている。時たまうめき声をあげ、さながら悪夢を見ているようだった。

なんなんだろう、これ。

シアンは銃らしき物体を調べまわしたが、それは中断せざるを得なかった。

「くそがああああ！」

「！！！」

いきなり聞こえてくる咆哮。そちらを見やると、ダイノーズが苛立ちを瞳に燃やして咆えている様子が視界に飛び込んできた。目の前で、ハーブとレイナとチップが構えている。

いけない、まだアイツが残っていたのか……！

シアンは銃を手を持ったままレイナの横に並んだ。さっき拾った銃……うまく使えばやつくらいは簡単に下せるかもしれない……！！

ダイノーズは、新たに増えた敵をもともしない様子だった。

「ふん……暗黒銃を持ち出したか……無駄なことを」

暗黒銃。断片的に聞こえてきたダイノーズの台詞。シアンが片手に握っている銃の名称だろうか。ダークネス・ナイトメア社はこれを製品化しているのか？ いや、まさか……。そう思っていたシアンだが、レイナも同様に考えていたらしい。横目でシアンが持つ暗黒銃を見て言った。

「……何処から出た代物かも分からないけど、コレを売り飛ばしてやるわけ？ その辺に五万と転がってそうだから、アンタをぶち倒した後でじっくり調べさせてもらおうね」

そして、何処からか書類を取り出して突き出した。いつの間に入れたのだろうか、それは検挙状だった。PPO総長の名を以って、発行される命令文書。しかし、破られる、燃やされる、ないし

紛失してしまえばそれに効力はない。ダイノーズは、それは知っているらしい。

「戯けたことを、貴様を倒して奪って破りすててしまえば手立てはあるまい」

だが、その弱点を突かれた筈のレイナは頬を緩め、殊更嬉しそうに言った。

「あら、アタシを倒せるとでも思っているの？　今も襲撃されてるって言うのに」

その言葉を聞き終えたのか、聞き終えなかったのか、判断もつかないうちにダイノーズの後頭部に衝撃が走った。

「んが……っ!？」

揺らく視界の中で確認すると、先程大口を叩いていたイーブイの仲間らしきパチリスの姿がブレている。

「一応、とんぼ返りを使ってみたんだよ。効果はあつたかな」

パチリスは、この場の緊張感にそぐわない笑顔で返す。だが、敵にわざわざ手の内を晒す程幼くもないようで、それ以上はただニコニコするだけで何も言わなかった。

因みに、チップの今の行動は、その場でとんぼ返りしてダイノーズの後頭部に回り、スパークを当てる。即座にとんぼ返りで元の位置に戻る、というものだ。中等技術だが、なかなか洗練されている。

「とんぼ返りだか何だか知らぬが……甘いわ。いけ、チビノーズ」

ダイノーズは、彼の周囲で公転しているチビノーズと呼ばれる小型のダイノーズを操り、それをシアンに突撃させた。

「おっと、危ないな……」

シアンが水平斬りで弾き返す。そして、直後に高速移動でダイノーズの眼前に接近した。

「瓦割りっ!」

「鉄壁!」

「マジカルリーフ!」

シアンが打ち付けた拳はしかし、ダイノーズの鋼鉄の体に阻まれ

る結果と終わった。ハーブが間髪すら入れずにマジカルリーフを飛ばす。

「ストーンエッジ！」

虹色の葉を阻むがごとく、地面から岩が幾つもせり上がった。

「チップ、ぶっ壊して！」

「うん、エレキボール！」

レイナの的確な指示を受けたチップが、岩を破壊する。

「いっけえええー!!」

ハーブが叫ぶ。瞬間に、マジカルリーフがダイノーズにヒットした。そう、ハーブが確信した瞬間だった。

「電磁浮遊」

バチバチ、とダイノーズが電気を帯びた直後、ブワツと浮き上がった。その後、三メートルほどの高さのところまで上下に揺れながら浮遊している。マジカルリーフは、数枚掠りはしたようだが、それで致命傷を与えられるほど破壊力がある技でもない。彼女は、悔しそうに歯がみをすると、蔓の鞭を伸ばして叩きつけた。それは、今度こそストーンエッジで弾かれる。今度はチップがフォローする隙も無かった。

「甘いと言っただろう。小手先の技で勝てる相手でないと知っておくべきだな」

ダイノーズが嘲笑を見せる。電磁浮遊の影響でレイナ達より高い位置になるので、目も自然と見下す感じになる。それが嫌味感を更に強く見せている。

「ふん、嫌なやつ……」

そう言うレイナは、シアンの動向を気にしていなかった。彼が暗黒銃を手に、密かにダイノーズの背後に回り込んでいることに気付いたのは、彼が奇襲をかけようとしたまさにそのときだった。

「あ、シアン……」

「よっ……喰らえっ！」

シアンはジャンプしてダイノーズに飛び乗ると、ダイノーズに暗

黒銃を突き付け、勢いよくトリガーを引き絞った。

「ぐああああ!?!」

ダイノーズの、苦しみ悶えるような声が響く。だが、ダイノーズはそれで倒されるほど弱い敵ではなかったようだ。

「ぐお……っ、チビノーズ!」

ダイノーズが操ったのか、シアンがトリガーを引いて数秒も経たぬ間に、チビノーズが凄まじいスピードで突進してきた。

「危なっ……」

シアンは、暗黒銃を撃つのを中断せざるをえなかった。敵に銃を突き付けながらその敵の攻撃を難なく防げるほど洗練された技は持っていない。ダイノーズの頭上から飛び退ると、暗黒銃でチビノーズを弾き飛ばし、ダイノーズの後方に着地した。飛ばした技の流れ弾がシアンの直撃することを懸念したのか、ダイノーズを挟んで向こう側にいるハーブ達は技を放つてこようとはしなかった。

「舐めるなよ。私にその銃は容易く通じぬぞ」

敵の見下げ果てた言い方が、癩に障る。シアンのこめかみには、いくつも青筋が浮いていた。勿論、相手はシアンが後方にいるのは把握しているだろう。この状態から真空波の嵐を巻き起こせば……ハーブ達を巻き込む結果にはなるが、あるいは……! だが、その思考が果てまでいかにないところで、ダイノーズが先制を仕掛けてきた。

「岩石封じ!」

「!?!」

「しまった……」

かわす間もなく、シアン達の周囲に巨大な岩が聳え立ち、彼等を閉じ込めるように並んだ。岩と岩の間のスペースが極端に狭く、遠距離を駆使し、且つ小柄なチップでないと打ち破るのは難しいようだ。

「安心して、僕が打ち破るよ!」

チップがその由を伝え、放電を放とうと力を籠めた瞬間、ダイノ

ーズの第二波が襲ってきた。

「地震！」

「しまった……チップ、気をつける！」

シアンは忠告したが、時すでに遅し。チップの絶叫が聞こえてきた。

「くそ……チップ！」

スペースが狭く、腕を振りかぶって拳を打つのも困難な状況。更に、地震により立っているのも覚束ない。一瞬、倒錯しそうになったが、持ち前の特性である精神力を発揮した。

落ちて着け、この状況を打破する策がある筈だ……。なんだ、どうすればいい……

シアンは、揺れの中で定まらない視界の中、ふと暗黒銃を見る。すると、今まで気付かなかったが、銃身につまみが付いているのが見えた。それぞれ、『解除』『安静』『呻き』『意識消失』『破壊行動』とある。因みに、つまみは現在『呻き』を指している。

これは……暗黒銃をかけたポケモンの状態を操作するのか？ だから、僕が銃を撃ったワンリキーは呻いているのか……これ、複数のポケモンの状態を操作するにはどうするんだろう……。

そう考えた所で気が付いた。その推測が正しければ、『破壊行動』につまみを合わせた時、ワンリキーは文字通り破壊行動に出る……この岩を打ち破ってくれる、よりよければ、あのダイノーズを打ち倒してくれるかもしれない。だが、そうすると自分達がワンリキーに攻撃される恐れがある。自由になつたあと、つまみを『破壊行動』以外のどれかに合わせれば良いわけだが……。

ええい、一か八か、賭けてみよう！

半ば投げやりな気持ちで、つまみを『破壊行動』に合わせた。途端に、岩の向こうから咆哮が飛んでくる。

「なっ、あの野郎、悪夢操作機能オブレイトに気付きやがったのか！？」

それと共に飛んでくる悪態。どうやら、彼が使用したのは悪夢操作機能オブレイトと呼ばれているようだ。そんなにペラペラと企業秘密染みた

ことを自分達に教えて大丈夫なのか？ と不安になるが、今は意識の片隅に置いておくことにした。気を引き締めて目の前の岩を見つめる。状況を理解していないハーブやチップ、レイナは襲撃を喰らったらず不意打ちでやられてしまっただろう。

「頼む、破壊するならまずこっちに……！」

祈りは届いたのか否か、分からないまま時間が過ぎる。唐突に、打突音が響くと、視界が開けた。その向こうに立っていたのは、理性を失った色の瞳を顔に湛えるワンリキーだった。

シアンは一瞬、ワンリキーの後方に、ハーブ達を拘束する岩が未だ俄然と立っている様子を確認する。だが、それもつかの間、ワンリキーが拳を振り上げる。咄嗟に、シアンはつまみを『安静』に合わせる。

「……」

そして、銃を盾にして身構える。数秒経って相手に攻撃する色を見受けられなくなると、岩の中から出た。ワンリキーは、地面に倒れて安らかに寝息をたてている。

「き……貴、様」

ダイノーズの、最大級の苛立ちを孕む視線がシアンに突きささる。シアンはそれに臆することなく拳を構える。

「甘いのは貴方だよ。僕は、否、僕達はこの程度のヤワなポケモンじゃない」

シアンがそう言っつて、ダイノーズが何かを言おうと口を開きかけた瞬間、ハーブ達を閉じ込めている岩がガラガラと崩壊した。

「何!？」

土埃が全身にまみれたハーブとレイナ、先の地震で相当体力を消耗したチップが姿を現す。レイナが、しめた、とばかりに唇の端をあげる。因みに、司令塔的な役割をしている彼女は戦闘に参加していない。

「くそ！ ならばもう一度閉じ込めるまで！ 岩石封」

「甘いわー！」

ハーブは、マジカルリーフを仲間たちに向けて放った。しかし、虹色の軌跡はシアン達に掠りもしない。そのまま、せり上がった岩のみを切り裂く。

「うう……じゅ、十万……ボルト！」

チップの放った技は、ダイノーズにかすりすらもしなかったが、彼の周囲の大気を弱く帯電させることはできた。電磁浮遊で浮いていたダイノーズが地面に落ちる。さながら、羽を落とした墮天使のように。

「や、やった……まだまだ……」

チップは戦おうとこそしたが、手を床につき、動ける状態ではなくなっていた。

「形勢逆転だな。同じ手に、何回も引つ掛かりはしないってこと……さっ！」

シアンは、一瞬にして高速移動でダイノーズに肉薄すると、水平斬りで斬りつけた。直後に瓦割りを打ち込むとサツと距離をとって、ハーブの横に並ぶ。

「ふざけんなあ！ 岩雪崩！」

ダイノーズが叫ぶが、何も起こらない。何があったのか、と思うと、レイナが叫んだ。

「上よ！」

シアンは後方に二、三回バック転をしてかわし、ハーブは上方にリーフストームを繰り出すと、自分に襲い来る岩を全て切り刻んだ。そのまま、リーフストームをダイノーズの方へ飛ばす。

「あまいわ、ストーンエッジ！」

床からせり上がる岩で嵐を防ごうとしたダイノーズ。しかし、技が発動することはなく、ダイノーズは麻痺に捉われた。

な、に！？

焦りが心を支配する。そのまま、リーフストームに包まれ、耐えがたい痛みが全身に走る。轟々と音をたてる嵐の中、リオルの少年の解説が途切れながら聞こえる。

「簡単なことだよ。縛り珠で奴の動きを止めただけさ」

縛り……珠……。

自らの愚策を呪いながら、ダイノーズの意識は闇の中に滑り込んでいった。

24話 始動(前書き)

さて、更新です。因みに今回、あのチームが登場です。

シアン

「あのですね、あのチームと言われても分かるわけないと思うんですよね」

……えっと、あの二チームが登場です。

シアン

「数を言えば良いとか一言も言っていないんですが」

そして片方は初です。

シアン

「嗚呼、無視ですか」

24話 始動

「さて、邪魔者も倒したし……アンタ達、出てきなさい」
『はいっ！』

シアン達以外に気がなくなつた一階のロビー。レイナが誰ともつかぬ者達に指示を出す。すると、子供のものと思しき高い声で軽快な返事が幾つも飛んできた。

「レ、レイナ……彼等は、何？」

一瞬驚きを声に含めたシアンが尋ねる。駆け寄つて来たのは六人のイーブイ達だった。

「アタシの部下よ。探検隊チーム『アダプター』を雇つたの。ハーブとチップ、あの時岩石封じが一人手に崩壊したの、おかしいと思わなかつた？」

「えっ……」

言われて始めて思った。チップもハーブも、ダイノーズが放つた岩石封じに特に攻撃を仕掛けたわけではない。ワンリキーの怒号に気をとられて、そこまで意識がいかかつた。だが、何もしていないのに、確かに岩は崩れた。今思えば、不思議である。まさか？

「そうよ。アンタ達の予想通り、この子達がぶつ壊したのよ」

「そ、そうだったの。有難う」

「うん、助かつたよ」

ハーブとチップが礼を言つて頭を下げると。一番先頭に立っているイーブイが、

「いえ、どういたしまして」

と言つて頭を下げ返した。見た目年齢は十三。まだ声変わりしないところを見ると、実際の年齢もそれくらいのようにだ。後ろに控えている五人のイーブイも男女様々でこそあれ、皆十二、三歳位とみえる。五人は、前に三人、後ろに二人と一応集団行動のように並ん

ではいるが、個々が辺りを見渡したりシアンの顔をジッと見つめていたりして、まとまりが無い。

「……レイナって、まさかシヨタコンじゃ……」

シアンが思いつけたことを言い終わらないうちに、レイナの制裁が飛んできた。

「ぶへほっ!? 違うの!? じゃあ、ロリコン?」

第二波発射。頬を紅潮させたイーブイの少女から二発のアイアンテールを喰らったシアンは暫く床に伸びていた。

「アダプター、アンタ達は一階の戦闘課の奴等を回収しておいて。アタシ達は上の階に行くてくる」

レイナが指示を出すと、アダプター達は四方にサッと飛び散り、自分達の仕事についた。レイナは、シアン達を促す。

「さ、行きましょう」

「待った」

それにシアンが制止をかける。レイナは予想外の行動に驚いたのか、苛立ったのか、眉根を寄せた。

「さつき、ちよつと覗いてみたんだけど……上の階からはダンジョンになつているみたいなんだ」

「だから何よ」

「いや、周到に準備する必要があるだろう。何せここは敵の本拠地。油断は最大の敵なん……無視!？」

シアンが御託を並べている間に、レイナ達はダンジョンに突入していた。シアンは、慌ててその後を追った。

同じ頃、ダークネス・ナイトメア社のビル内で一つの戦闘が終了した。

「ふん、雑魚が。数で圧せると思ったのか」

銀の針を片手に、頬をバチバチと帯電させている黄色をベースとしたポケモン。ギザギザの尻尾が生えている彼は、言わずもがなピカチュウ族だ。彼の名は、カグラ。隣にいるグレイシアはクレア。二人で結成されるチームの名は、グレイフェル。かつて二百年ほど前に、世界を救ったと言われる伝説の救助隊である。

「プクリンギルドの掲示板に貼られていたことは本当だったのか…

…」

「そう、みたいね。こんなに堂々と建っているのに闇企業だなんてボソリと呟くカグラに、クレアが尋ねる。彼等がいるのは、地上三十二階。入ってくるのときに見たロビーの蛍光版では、ビルは百階建て。まだ半分もいつていない、ということだ。

「お好きな潰し方で潰して下さいと言っているようなものだ……ん？」

カグラは皮肉を言いながら、自分達が歩いている廊下に接する部屋のドアから何やら話し声が聞こえてくることに気付いた。

「何だ……？」

「何かしら」

カグラとクレアはドアに耳を付け、聞こえてくる会話に耳を澄ませる。

『おい、侵入者は今どうしている』

『現在三十二階で活動中の部隊を全滅した、とのことですよ』

これはカグラ達グレイフェルのことだろう。自分達の動向なら自分達が一番よく知っている。

「聞くまでのことじゃなかったか……」

カグラがそう言う間にも、ドア越しの会話は聞こえてくる。

『更に、先程ロビーから別の侵入者の報告がありますよ』

『「何だと!？」』

しまった、とカグラが心の中で思ったときには既に遅かった。

『ん? 今外で誰か何か言わなかったか?』

「……しまった……」

「カグラの馬鹿」

クレアの罵倒以上に、ドア越しの敵を専ら気にするカグラ。

『ちよつと見て来い』

「行くぞ」

「え!？」

ドアの中の者が出て、侵入者撃退と敵を大勢呼ばれる前に、自分から部屋の中に入入していく。勿論クレアを連れて。

「見に来る必要はないさ。ここに姿を現してやった」

部屋の中にいたのはバンギラスと、上司と思しきボスゴドラ。両方とも、啞然としている。彼等に、クレアはいきなりハイドロポンプを放った。

「ぐおあ!？」

水圧に圧されたボスゴドラはひっくり返って目を回した。

「なつ、テメエら、侵入者が……」

バンギラスが言い終えて何かをする前に、カグラは右手に構えた銀の針を投げつけた。あらかじめ帯電させて置いたそれは、電気の残滓を引いてバンギラスに向かっていく。

フレミング・ジュールガン
「直線電磁砲!」

バンギラスは、かなりのスピードがあつたそれを叩き落とした。

のだが……。

「ぐおあつ!」

直線電磁砲の中に溜まっていた電気は、一瞬にしてバンギラスの体内から床へと逃げて行った。それにより、バンギラスの体内には電撃のダメージが走る。

「くそが、調子に乗るなあ!」

ボスゴドラはだいぶ怒り狂ったようすで咆えると、拳から一つの銀色の塊を放った。ラスターカノンである。

「喰らうかつての」

だが、カグラはそれを片手で造作も無く振り払った。電気タイプの彼には、鋼タイプの技のダメージは少ない。

「ちょっとだけ、大人しくしてもらおうね。カグラ、引っこんでいて。……波乗り！」

カグラの退避を確認したクレアが叫ぶと、彼女の周りに大量の水が発生した。それは瞬く間にバンギラスとボスゴドラを巻き込んだ。「ぐあああああ！」

波は上に二メートル近く伸び、そのまま二人に叩きつけられる。水が全てクレアの体内に収まったとき、バンギラスとボスゴドラは地面に伸びていた。カグラは、二人に電磁波をかけると、その動きを止めた。

「敵を呼ばれたら何かと厄介だからな。大人しくしてもらおうぞ」麻痺状態になった彼等を見て、カグラは嘲りを含めた声で言った。だが、その声がボスゴドラの顔に笑みを貼り付ける。

「ふふふ……なら、敵を呼ばれたら俺達に勝ち目があるというのだな……」

「俺が今電磁波をかけておいた。敵など呼べぬだろう」

カグラは、ボスゴドラの言葉に戦慄を覚えながら、背中を向ける。その時、クレアが何かを察したらしい。何かに弾かれたようにあらぬ方向を向いた。

「どうした？」

「向こうから……ポケモンの気配がする」

「何!？」

カグラが険しい表情を浮かべる。いつの間に敵など呼ばれたのだ? と疑問に思う。彼等二人は誰かを呼ぶ行動などあっただろうか。「ふん、馬鹿めが。これだけ派手に暴れれば俺達が望まずとも追手が来るに決まっているだろう」

ボスゴドラに続いてバンギラスが言った。

「……そうか、そういう……そういうこと、だったのか」

カグラは焦りを見せながらも、諦めの表情は決して表に出さない。

アダプターのリーダー、セレントは戦闘課の人員の回収、及びP
POから直接派遣された業者に引き渡し、彼等を無事に帰還させた
ことを確認すると、所持しているトレジャーバッグから携帯電話を
取り出した。レイナの番号を表示し、会話を繋ぐと、数回のコール
の後、レイナは対応した。

『ん、セレント？ 戦闘課の奴等はPPOに帰した？』

レイナはダンジョン内にいるのだろうか、電話の向こうからはレ
イナの声と共に何かの打撃音と、シアンというリオルの少年の嘲っ
たような声が耳に流れ込んでくる。

「はい。全員回収しました。後はどのように？」

『そうね……とりあえず、ダンジョンの中を探索していなさい。何
か情報を掴んだら連絡して。くれぐれも、途中でやられちゃだめよ
じゃあね』

そう言つて、通話は切れた。セレントはバッグに携帯電話をしま
うと、アダプターの隊員を集めた。彼を含めて総勢六人。探検隊の
公式の活動ではパーティーは四人までと制限がかかっており、それ
以上の人数では公式の活動とは認められていないが、彼がそれを気
にしたことは今日まで未だ無い。

「リーダー、レイナさんは何て言つてた？」

アダプターのメンバーの一人、ミクリアが尋ねると、セレントは
指示通りに答えた。ハクというメンバーの少女が、蛍光版を見上げ
ている。

「……当ビル、百階建てのようです」

そう呟いた瞬間に、今度は少年のルカエトが弱音を吐く。

「ええ〜！？ それはキツイよ」

スタミナが少なく、持久戦に向いていない彼は、百階建てを登る
には少々厳しいだろう。だが、真面目な優等生フェイスの少女、フ
アーリンが注意する。

「キツイとか言わないの。貴方も探検隊員の端くれでしょう」

「はい……」

ふてくされた様子のルカエトを、カイティスがフォローした。

「まあまあ、俺だってキツイって言えるよこれは。だって百階建て、だもんなあ？」

だが、ルカエトかファーリンがそれに答えないうちに、セレントが痺れを切らして言った。

「あのさ、早く行かないと僕達レイナさんに怒られると思うんだけど」

24話 始動(後書き)

さて、今回チーム：ヴレイフェルが登場です。さらに、チーム：アダプターが初登場です。

因みに、アダプターの隊員の名前……気付く人は気付きますw 実
はあるキャラクターシリーズからとってるんですよw

ハクの名前が出て微笑したその貴方はお答えが分かるかとw

25話 二本の線は交わずに（前書き）

またもや意味不明なサブタイだね（蹴

シアン

「なんででしょうね？　うちの作者、ネーミングセンス破滅的な気がするんですよ」

お黙りなさい。アンパサーンド、今回はまさかの五千字越え。これをボリユームたっぷりと思うのかグダグダと書きつづっているだけだと思うのかは貴方次第でしょう。

25話 二本の線は交わらずに

チーム：アダプターの最大の武器は“チームワーク”である。探検隊であればそんなものは基本中の基本だ、と疎かにする者も多々いるが、それ故に失敗する探検隊も多い。

「ミクリア、補佐お願い！」

「はいよっ！ 手助け！」

六人のイーブイと、一人のウィンディが対峙している。セレントの声に対し、ミクリアが反応。彼女の両前足が光り、その光が燈つた両手をミクリアが叩き合わせる。すると、セレントの体から光が弾ける。

彼女が使役した技は、セレントだけでなく、他のチームメンバーの技の威力をも強める。

「有難う。電光石火！」

セレントは俊敏にウィンディにぶつかって、即座に元の位置に戻った。ファーリンが補助するように、彼の横を彼より速く突き抜け、ウィンディの目の前で真上に跳躍した。ウィンディは視界を攪乱される。

だが、ファーリンは今空中にいる。ウィンディにしてみればかっこうの位置だ。更に、彼女は上下逆さまでウィンディの方に後頭部を向けている。

「ふん、ちよつと攪乱したからって良い気になるなよ？」

即座に火炎放射を放ってまずは彼女から屠ろう、そう思って技を放った。

「ファーリン、危ないですよ」

だが、ハクが咄嗟にバトンタッチで彼女と場所を入れ替える。何が起こるか分からなかったファーリンと彼女の危機を察知し、事前に頭の中で何をするか決めていたハクとでは対処の方法が全く違う。「守る」

ピカア！ と緑色の壁が出現し、ハクを灼炎から庇護する。炎が消えると、ハクは迅速な動きでとんぼ返りをして後方に下がる。

「ちっ、炎の渦……っ!？」

ウインデイが技名を言い終え、炎の渦を発動させようとしたまさにその時、カイティスとルカエトがいきなり眼前に飛んできた。アイアンテールを仕掛けるか、と思ったが、予想は外れた。

『影分身!』

その瞬間、二人のイーブイの少年の分身体が沢山現れる。

「くそ、オーバーヒート!」

ウインデイは、影分身達を全て洗いだし、同時に少年二人を焼却しようと体から爆発を出す。だがしかし、爆発が晴れた時にはカイティスとルカエトは平然と立っていた。鼻先数センチのところかわされたのか。

「エコーボイス!」

「エコーボイス!」

カイティスとルカエトが、一瞬だけ時をずらして攻撃する。エコーボイス、すなわち使い続けることによって反響し続け威力をあげていく技。それを放った二人は咄嗟に両脇に飛びのく。そして、両前足を光らせる。

「何だ……?」

エコーボイスを、衝撃の余波を受けつつ蹴散らして見ると、中央の可愛らしい顔立ちのイーブイ以外は全て両前足が光っている。それをウインデイが確認した瞬間、五匹のイーブイ達は皆両前足を叩き合わせた。同時に、件のイーブイの体から光が弾け飛ぶ。

「目覚めるパワー!」

手助けだな。ウインデイはそう直感した。そして、今も自分に迫る目覚めるパワーを打ち消そうと炎の準備をした。

「ハク、お願い」

「了解しました」

目覚めるパワーを放ったセレントは、ハクに向かって目配せをし

た。すると、事前に打ち合わせしたかのような整ったタイミングでハクは返事をして、バトンタッチを発動した。

「あ？ どういうことだ？」

炎を放とうとしていたウィンディは、自分の視界にいきなり、幼げながらも軽薄そうな顔立ちのイーブイが現れたことに辟易した。因みに、そのイーブイとはカイティスのことである。

「まあいい。お前からぶっ殺」

ハクは、バトンタッチで元々ウィンディがいたところにいた。勿論のこと、セレントの目覚めるパワーが当たる場所である。だが、チームメンバーの誰も危ない、と思いはしなかった。それは、彼等が薄情なのではなく、彼等がハクの思惑を理解していたからである。目覚めるパワーが彼女にヒットしようかという瞬間、ハクはもう一度バトンタッチを使った。

「してや なっ!？」

そして、ハクとウィンディの立ち位置が再度入れ替わる。ウィンディは考えなかった。何故、あの少女がバトンタッチを使って自分を攻撃するのに丁度良い場所にわざわざ誘い込んだのか。何故、軽薄そうなイーブイがやられそうになってまだ余裕そうな表情をしていたのか。それで分かった。自分を惑わして、目覚めるパワーを確実に当てるため。だが、そう分かってても時既に遅し。

目覚めるパワーという技は、使うポケモンによってタイプが変化する。セレントが覚えている目覚めるパワーはエスパータイプである。炎タイプのウィンディには威力は平凡なものだが、イーブイ五人分の手助けで助力されたものだったらどうだろう？ 致命傷は負わせられる。

ウィンディは一応の抵抗は試みたらしい。だが、ハクのバトンタッチにより翻弄させられて十分な準備もできず、また先程オーバーヒートを放ち、その反動により攻撃の威力が低下していた。それらの理由も重なって、彼が放った炎はあっけなく吹き飛ばされ、ウイ

ンディは倒された、というわけだ。

「よし、行くう！」

倒れたウィンディの傍らをセレントは号令をかけながら走り抜けた。その後、五人も続く。

「リーダー、あつちに階段あるみたいよ」

「うん、そこまで全力でいくよ」

そう言つて、セレントは更にスピードをあげる。チーム：アダプターの誰一人として漏れることなくセレントについて行った。

「次は七階か……ん？ セレント、何かいるよ！」

階段を上がった直後、ポケモンの気配を感じ取ったルカエトがセレントに呼びかけた。

「敵？ そいつ、こつちに来そう？」

「うーん、どうだろ」

セレントの間に、ルカエトは首をかしげるだけだ。ファアリンが見通し眼鏡をかけ、ルカエトが指した方を見つめる。刹那の感覚をおいて、口を開いた。

「ピカチュウとシャワーズがダンジョンのポケモンと交戦状態に入っているみたい。どうする？ 加勢に行った方がいいかしらね？」

ファアリンは固い表情のまま言った。その言葉はセレントを大いに迷わすには十分なものだ。

チームメイトは皆、彼に判断を委ね、セレントを見つめている。

加勢に行つても良いが、ピカチュウ達からすれば足手まといになるかもしれない。いや、その前にピカチュウとシャワーズがダンジョンに配置されたポケモンだという可能性も否むことはできない。百聞不如一見。これは一度見通し眼鏡をファアリンから借りて自分で見た方が良さそうか。

「ファアリン、それ貸して」

「はい」

セレントは見通し眼鏡を受け取ると、それを頭にかけた。そして、壁越しに映る戦いに目を凝らす

成る程、ピカチュウとシャワーズがバッジをつけてる。彼等がダンジョンのポケモンという筋はなさそうだな……ん？ バッジ？ あれは……。

そして、彼は気付く。探検隊らしきポケモン達が所持しているバッジが、通常ではありえないことに。

現在探検隊連盟が公式で発行する探検隊バッジは、金属製で両横から羽が生えている。だが、彼等が所持しているバッジは羽が付いていない。百年ほど前にデザインが廃止された旧型のものだ。それも、

「救助隊？」

「えっ？ 何言ってるのよ？」

セレントが推測を述べた瞬間にミクリアが訝しげに声をあげた。

「救助隊だよ、あのポケモン達」

だが、その声も構わずセレントは続ける。バッジから判断しただけのことだが、その予測がどうしても頭にこびりついて離れない。

「……救助隊という呼び方は、百年前に廃止されたでしょう」

「そ、それはそうだけどさ……」

矛盾点を突かれ、セレントは答に窮する。だが、ルカエトが思いがけないフォローを入れる。

「あのさ、前に星の停止騒動があって、ヨノワールってポケモンがいたでしょ？」

「え？」

彼は、トレジャーバッグからノートパソコンを取り出し、何やら検索している。先程の戦闘で良く壊れなかったな、と言いたくなるほど無傷だ。

「うん、ジュプトルとチーム：ブライトっていう探検隊を壊滅させる為にさ。その時、刺客を雇ったんだってさ」

ルカエトはエンターキーを押すと、表示された画面をセレント達に示した。

「タイムスリップの疑い有り……？」

カイティスが画面を覗き込んで呟いた。それに、ルカエトは頷いて返す。

「二百年前にこの星を救って、神話では英雄と語り継がれている救助隊チーム：ヴレイフェルがタイムスリップでこの時代に来たんだって。で、ヴレイフェルは……」

ピカチュウとシャワーズで構成されている。ルカエトは言外にそう告げた。周囲に気まずい沈黙が降りるか、ルカエトが再び話し始めるかどちらが早かっただろうか。

「それから、彼等はヨノワールに頼まれたんだって」
「頼まれた？」

ミクリアが彼の言葉を反芻する。

「ジュプトルとブライトの星の停止防止行動を、抑制して欲しいって言われたらしいんだよ。そして、彼等はその要求をのんだ」

「……何故？ 世界を救おうという意味があつたなら、星の停止も防ぐのが正論じゃないの？」

英雄と呼ばれるが故に浮かび上がる矛盾点をセレントが突く。ルカエトはその問に対する答までは用意していなかったらしく、辟易した表情を作る。

「そこまでは分からない……」

「そっか……で、ルカエトはあのポケモン達がチーム：ヴレイフェルだっけ言いたいの？」

ここで、徐々に軸から離れていた話題をセレントが半ば強制的に軸に添える。

「多分ね。セレント、見通し眼鏡を貸して」

件のチームがヴレイフェルであることを確認するためなのだろうか。ルカエトは右前脚を、肉球を上に向けてセレントに差し出した。セレントは一抹すらも躊躇を見せずに見通し眼鏡を肉球の上に置く。「ありがと。えっと……」

ルカエトは渡された眼鏡をかけると、戦場を鑑みた。チームメイとはその唇の動きや眉の動き方から彼が何を考えているのか、は分

からない。

「……うん、ブレイフェルで間違いないみたいだ」
「本当？」

フアーリンが真偽を問うと、彼はその証拠すらも提示できる、と言いたげな程に自信にあふれた動きで頷いた。そして、次にその証拠を提示していく。

「ブレイフェルのリーダーのピカチュウ 木下神楽、ってい

うんだけど、銀の針に自分の十万ボルトの電流を介して、銀の針に電気タイプの性能を持たせる技術を持つてたんだ。それと酷似した技術を、あのピカチュウが使ってたんだよ」

「マジで？ そんならさ、アイツら世界救う程の探検隊ってことだろ？ 手助けなんていらんじゃん」

カイティスの言葉に、セレントとミクリアが賛成の意を示した。

「うーん、迷うけど、僕もそうした方がいいと思うよ」

「アタシも」

「でも、セレント……一応、恩を売っておいても悪くはないのでは……」

ハクが反対しかけたが、セレントがその言葉を塞ぐ。

「恩を売って言うてもね……僕達の実力でできることなんて、高が知れてるじゃない」

「むー……」

自論を却下されて癪に障ったのか、はたまたセレントの発言が的を得たのか、それとも別の理由があるのだろうか。ハクは頬を膨らませて唇を尖らせた。この年代にはよくあることだ。

「で、いいかな？ チーム：ブレイフェルは放置ってことで」

「僕は構わないな」

「私もそれでいいと思うわ」

ハクはいまいち釈然としない様子だったが、不承不承という体で首を縦に振った。セレントはちよつと苦笑いを浮かべながらも、進み出す。歩きながら、携帯電話を取り出してレイナの番号を呼びだ

した。数回のコールの後、ピツという音がして、耳に聞き慣れない
声流れ込んでくる。

『もしもし?』

「……………え? あれ? ま、間違い電話……………?」

セレントは思いがけず立ち止まった。チームメイトが振り返って
彼を見る。いや、確かに電話帳のレイナのところからかけたので、
間違い電話とというのはないだろう。現に、携帯電話の画面を見ると

『通話中…………… レイナ』とある。

『ああ、驚かせてごめんね。君、レイナに用があるのかな? セレ
ント君、だつたっけ?』

聞き慣れないが、聞き覚えはある。確か、レイナに同行していた
リオル……………シアンといっただろうか。彼の声だ。彼がレイナの携帯
電話を使って自分と話しているのか。

『ごめん、レイナなら別件で忙しいんだ。僕が聞いていいのなら言
伝しておくけど』

ああ、そういうことか。呆氣にとられていたセレントはようやく
思考回路を取り戻す。特に知られていても良い。というより、レイ
ナに知らせれば後々彼女に同行している面子にも行き渡る情報だ。

「あ、お願い……………します。えっと、『救助隊チーム：ヴレイフェル
がビルの中に乗り込んできてる』って伝えて貰えますか」

『救助隊……………?』

電話の越しにも関わらず透き通っている声が戸惑いの色を帯びる。

「はい。繰り返ししましょうか……………?」

『いや、大丈夫さ。言伝有難う』

そう言って、会話は相手側から切られた。

25話 二本の線は交わずに（後書き）

うん、シアン達の出番無かったんだよねw

ハーブ

「シアンは声だけ出てたからマシよ……」

チップ

「レイナだって名前出てたじゃん……」

……君達、低レベルな比較は止めようよ；

因みに、アダプターのメンバーの名前の由来を当てた人は未だにいません。さて、ここでヒントですが……

セレント

「いや、いつの間にクイズ形式になったし（汗）」

ヒントは「歌」と「機械」です。名前を聞いたことがあるという人もいるのではw

セレント

「言っちゃった!? この人今結構大きいヒント言ったよ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5673s/>

ポケモン不思議のダンジョン 新伝説 闇の司

2011年9月26日21時58分発行